兵庫県生産遺跡調査報告　第３冊

採石遺跡Ⅰ

（高砂市）

１９９３．３

兵庫県教育委員会

はじめに

兵庫県には多くの遺跡があります。それらは各地の風土と密接に結びついているとともに時代により地域により変化しております。地域により、その歴史も複雑です。その生活を担うものとして、各種産業（生業）があります。

兵庫県教育委員会では、昭和63年度に刊行致しました『兵庫県の諸職』で民俗学的なまとめを行いました。引き続いて考古学的な手法から生産遺跡の実態について基本的な調査を実施し、考えようとするものです。そのためにも文化財補助事業として詳細分布調査の一環として、昭和63年度から継続して生産遺跡の調査を行ってきました。「鉄」を端緒として「塩」の調査を行ってきました。それらに続くものとして「石」を取り上げました。

播磨の大きな産業として鉄・塩・石がありますが、その中でも石は石棺として大和をはじめ広く古墳に使用されています。また、明石城・姫路城などの築城石として多用されています。それ以降現在に至るまで連綿と使用されています。その中心である『竜山石』を取り上げ、「石」の調査の第一歩とするものです。

今回、報告致しますのは平成４年度に調査を実施した結果であります。さらに、引き続いて『銅づくり』『土器づくり』などについても調査を行うとともに、『鉄づくり』『塩づくり』についても継続して調査を行い、報告書をまとめていきたいと考えています。

調査に際しましては、多くの方々のご協力をいただいたことに厚くお礼申し上げますとともに本報告書が活用されることを願います。

平成５年３月

兵庫県教育長

芦田　弘逸

例　　言

1．本書は、高砂市で実施した採石遺跡分布調査の報告書である。生産遺跡の分布調査の一環として行ったものである。

2．調査は、平成４年度に兵庫県教育委員会が調査主体となり、「竜山石の文化会」の協力を得て実施した。

3．本調査は、文化庁文化財関係国庫補助事業として実施した。

4．本書で示す標高値は、高砂市設定のＢ．Ｍ．を主に使用した値である。また、方位は磁北である。

5．遺構および遺物写真は、調査担当者が撮影したものである。

6．執筆分担は本文目次のとおりで、編集は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が行った。

7．表紙および見返しの図は兵庫県立歴史博物館所蔵の『日本山海名産圖繪』『播州名所巡覧圖繪』から使用させて戴いた。

第１図　高砂市の位置

兵庫県生産遺跡分布調査
採石遺跡Ⅰ（高砂市）

本 文 目 次

例言

Ⅰ．調査に至る経緯と経過……渡辺……1

Ⅱ．位置と環境……横道

　1．地理的環境……3

　2．歴史的環境……5

Ⅲ．遺跡の分布状況（分布調査結果）……横道

　1．分布調査の概要……15

　2．各支群の概要……17

Ⅳ．石切場の概要……横道……25

Ⅴ．採石道具……横道・渡辺……31

Ⅵ．市内の石棺……横道……43

Ⅶ．おわりに……横道・渡辺……54

挿 図 目 次

第１図　高砂市の位置

第２図　高砂市周辺の地質図……4

第３図　高砂市の主な遺跡分布図……9・10

第４図　塩田遺跡出土土器……11

第５図　ＫＡ－16地点全景……11

第６図　調査風景……12

第７図　調査風景……15

第８図　龍山採石場分布図……19・20

第９図　加茂山・龍山支群分布図……21

第10図　宝殿山・加茂山支群分布図……22

第11図　宝殿山・地蔵山・生石中山支群分布図……23

第12図　伊保山支群分布図……24

第13図　加茂山No15地点地形測量図……26

第14図　加茂山No15地点矢穴細部……26
第15図　加茂山No16地点地形測量図……29
第16図　加茂山No26地点地形測量図……30
第17図　採石道具実測図(1)……32
第18図　採石道具実測図(2)……33
第19図　採石道具実測図(3)……34
第20図　採石道具実測図(4)……35
第21図　採石道具実測図(5)……36
第22図　採石道具実測図(6)……37
第23図　採石道具実測図(7)……38
第24図　採石道具実測図(8)……39
第25図　採石道具実測図(9)……40
第26図　採石道具実測図(10)……41
第27図　石宝殿　基部実測図……44
第28図　石宝殿　復原図……45
第29図　天磐舟実測図……47
第30図　阿弥陀町所在石棺仏実測図……48
第31図　北浜町西法寺境内所在石棺実測図……49
第32図　高砂市内石棺分布図……50

表　目　次

第１表　主要縄文・弥生遺跡……5
第２表　周辺主要遺跡地名表……6～8
第３表　高砂市内石棺一覧表……52

図 版 目 次

図版１　竜山採石場　空中写真
図版２　竜山採石場　空中写真
図版３　石宝殿　全景
図版４（上）　石宝殿　近景
（下）　石宝殿　近景
図版５（右上）　石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）
（右下）　石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）
（左上）　石宝殿　基部加工痕　（北側部）
（左下）　石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）
図版６（上）　石宝殿　北側部
（下）　石宝殿　突起部
図版７（上）　伊保山丁場　（節理面）
（下）　伊保山丁場　（節理面）
図版８（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－４地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－４地点　加工痕
図版９（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　全景（南から）
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　全景（北から）
図版10（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴痕
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　切り出し状況
図版11（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴状加工痕
図版12（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　西から
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　南から
図版13（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－13地点　北から

図版14（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　細部
図版15（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　全景
図版16（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　加工痕の残る石材
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　矢穴
図版17（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－20地点
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－20地点　矢穴
図版18（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－23地点　矢穴痕
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－23地点　加工痕
図版19（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－25地点
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－25地点　細部
図版20（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－25地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　全景
図版21（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　奥壁部
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴　奥壁部
図版22（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴　南壁部
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴痕
図版23（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－28地点
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴
図版24（上）　竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴
図版25（上）　竜山石切場跡　ＴＡ－３地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＴＡ－３地点　矢穴痕
図版26（上）　竜山石切場跡　ＴＡ－４地点　全景（北から）
（下）　竜山石切場跡　ＴＡ－４地点　（南から）
図版27（上）　竜山石切場跡　ＴＡ－10地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＯＯ－１地点　全景（東から）
図版28（上）　竜山石切場跡　ＯＯ－１地点　矢穴
（下）　竜山石切場跡　ＯＯ－２地点
図版29（上）　竜山石切場跡　ＨＯ－４地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＨＯ－４地点　切出部

図版30（上）　竜山石切場跡　ＩＨ－14地点　全景
（下）　竜山石切場跡　ＩＨ－14地点　矢穴
図版31（上）　竜山石切場跡　ＩＨ－４地点　北から
（下）　竜山石切場跡　ＩＨ－４地点　南西から
図版32（上）　竜山石切場跡　ＩＨ－２・３地点　全景　北から
（下）　竜山石切場跡　ＩＨ－２・３地点　全景　南から
図版33　採石道具
図版34（上）　石宝殿　加工痕　（西壁部分）
（下）　石宝殿　加工痕　（北壁部分）
図版35（左上）　石宝殿　西壁部節理面　加工痕
（左下）　石宝殿　突起部下半部　加工痕
（右上）　石宝殿　西側溝部　加工痕
（右下）　石宝殿　西側溝部　加工痕細部
図版36（上）　天磐舟
（下）　天磐舟　突起部　加工痕
図版37（上）　安楽寺境内所在石棺
（下）　安楽寺境内所在石棺　内面　加工痕
図版38（上）　西方寺境内所在石棺
（下）　西方寺境内所在石棺　外面下部　加工痕
図版39（上）　正蓮寺境内所在石棺蓋
（下）　正蓮寺境内所在石棺蓋　加工痕細部
図版40（上）　正蓮寺境内所在石棺身
（下左）　正蓮寺境内所在石棺身　平坦部　加工痕
（下右）　正蓮寺境内所在石棺身　短辺部斜面　加工痕
図版41（上）　谷ノ口所在石棺
（下）　谷ノ口所在石棺　短辺部斜面　加工痕
図版42（上）阿弥陀18号墳　所在石棺　加工痕
（下）大日山古墳　箱式石棺　外面加工痕

Ⅰ．調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

兵庫県教育委員会では、生産遺跡の調査として昭和63年度から、分布調査を中心に調査を継続してきた。『製鉄遺跡』『製塩遺跡』の調査を行い、継続して『銅』『石』『土器』等についても調査を予定していた。

『石』は、土器使用前から使われた道具の初源であり、早くから交流の用に供されていた。また、石材として播磨の石は著名である。古墳時代以降、播磨から多量の石材が搬出されていることは事実で、現代に至るまで大きな産業の一つとなっている。その中でも、最も良く知られているのが、「龍山石」であろう。それは先人の研究で多くを語られているもので、王者の石棺を供出した地域として理解されているものである。早くは『播磨国風土記』に大国里に「有作石形如屋・・・」とあり石宝殿のことと思われる。江戸時代には日本三奇の一つとして名所旧跡として親しまれていた。「龍山石」に限らず、周辺には「長石」「高室石」なども知られている。今年度は、最も良く知られた「龍山石」を中心に分布調査を実施することとした。広義には、周辺部分も同質の石材が採取され、素人目には同一の石材と思われる。しかし、長年の石材採取の歴史を見る限り、狭義の龍山周辺に限られて採取されているようである。このことから採石遺跡の端諸として「龍山石」の産地である高砂市を取り上げることとした。将来、周辺の石材や但馬の玄武岩なども対象としてみたいと思っている。

また、原始の石材の需給関係や近世の築城石についても今後検討・調査を実施したいと思っている。

２．平成４年度の調査経過

平成４年度から調査を開始した。石として世間によく知れ渡っている「龍山石」を対象として単年度で事業を実施することとした。現在の行政区画で呼ぶと高砂市を対象とした。

「龍山石」を対象としたのは、上記の理由によるものである。現在の兵庫県の遺跡での知名度と今年度の調査を行うにあたっての状況が一致したことが大きな理由である。調査は竜山を中心とした山塊を対象として分布調査を実施した。また、現地の分布調査と平行して採石道具の採集とその図化も行った。

分布調査の結果は、第Ⅲ・Ⅳ章で詳述するとおりであるが、その成果として加茂山支群・地蔵山支群など６つの支群分けが可能となった。今年度は十分に検討出来なかったが、引き続き今年度の成果を元に「龍山石」の検討を加えればと願っている。

分布調査の結果は初秋から始めたが、それと平行して整理作業および採石道具の実測作業等も行った。単年度の事業ゆえに十分な時間がなく、十分な調査を行えなかったかもしれない。引き続き調査を行うことでその間隙を埋めたいと思っている。

今年度の調査を実施するにあたって、多くの方々の教示・指導を得るとともに、多数の方々に協力を得ました。特に、前田陽子氏には実測から校正まで多くの作業をお願いしました。感謝致します。

調査協力・指導

伊保崎準財産区管理会・宝殿石材事業共同組合・竜山石の文化会

西野土地家屋調査事務所・生石神社・生石神社総代会

岡田章一（兵庫県立歴史博物館）・網井捨次（高砂市文化財審議委員）

調査担当者

横道隆一（竜山石の文化会）

渡辺　昇（兵庫県教育委員会）

調査参加者

中西文治・石原茂次・野々村熟一・舩津重次・野々村忠夫・高谷武雄

伊保和彦・大内　明・大内　孝・岸本　剛・沼田　晃・歌井昭夫

山本三之助・向吉加津典・石川正喜・田中　毅・橋本通男・稲田哲弥

高原孝明・泉　洋・網井秀樹・三島来次・前田陽子・伴　悦子

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

今回分布調査を実施した、龍山採石場跡は兵庫県高砂市阿弥陀町生石、魚橋から伊保町にかけて広がる広義の“龍山”及び周辺の山塊に所在する。

高砂市は、兵庫県下最大の流域面積を持つ加古川が播磨灘へそそぐ、その河口域に広がる三角州を中心とした平野部に位置している。市域の北部には、高御位山、中央部には、龍山山塊で占められ、その周辺にはあまり顕著ではないが段丘面が広がっている。

龍山眼前の地域には加古川と天川によって形成された、三角州性氾濫平野、後背湿地、旧砂堆、砂堆などに区分される沖積平野が広がり、現在の市街地もこの上に展開している。

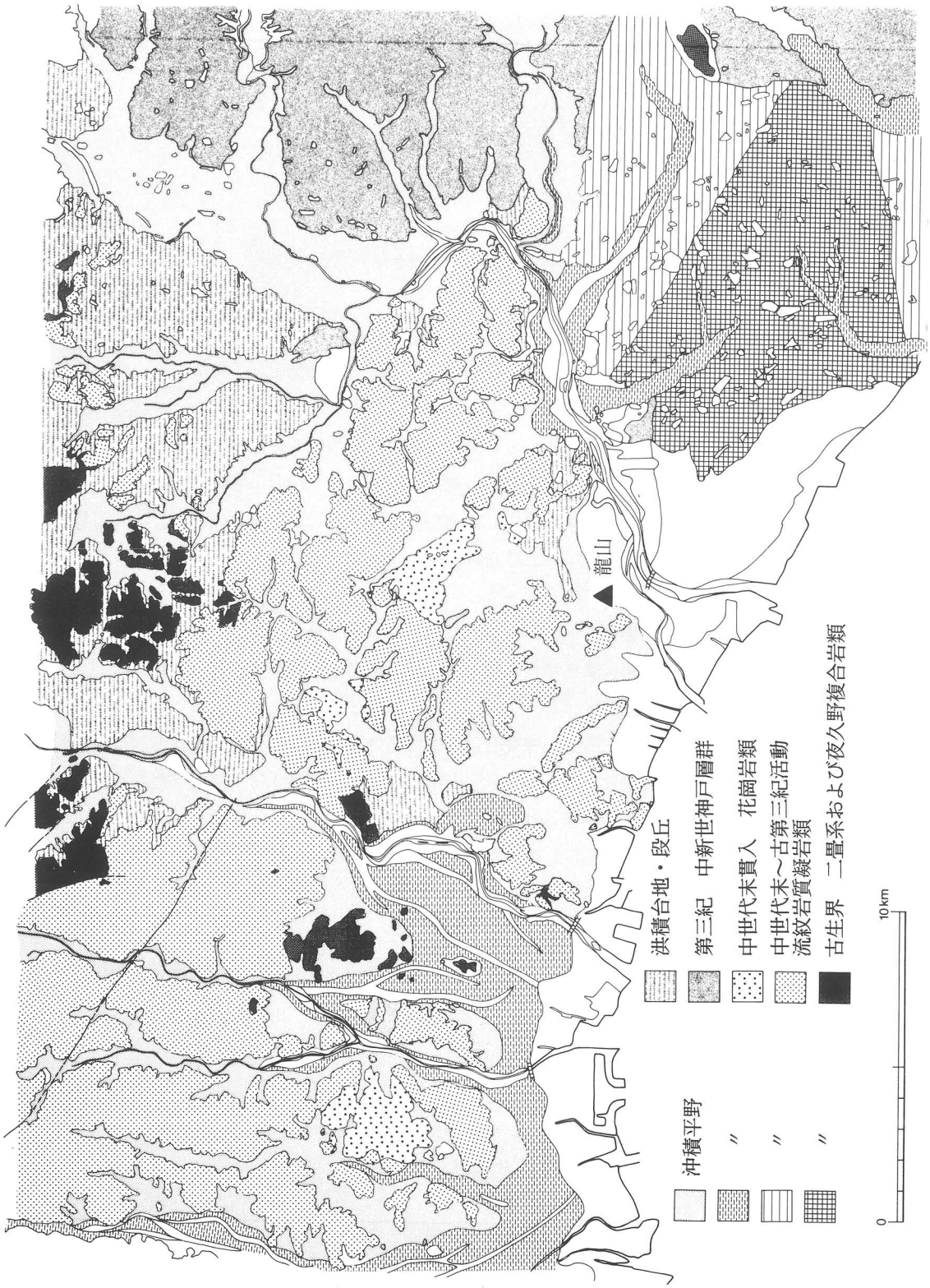
これらの、地形を構成する基盤層は中生代後期白亜紀の火山岩として噴出した、流紋岩質凝灰岩で、一部加古川市志方町付近では、花崗閃緑岩の山塊が見られるにすぎなく、比較的単純な地形配置を見せている。

基盤である流紋岩質凝灰岩は、加古川下流域だけでなく加古川上流域、杉原川の源流部三国岳付近から、西は岡山県、東は宝塚市付近にまで、兵庫県南西部に広く分布している。(1)(2)

この凝灰岩は、前期古墳の石室材としての活用に始まり、５世紀代には龍山石の本格的な開発が見られ畿内及び周辺の巨大古墳の埋葬施設である長持形石棺は、その大半が龍山石で作られ、後期には家形石棺の材料として、加古川周辺だけでなく、100例近くが東は滋賀県、西は山口県に及ぶ広範囲に運ばれていることが確認されている。

中世には、五輪塔や石仏材として、また石棺の蓋や身を転用して石仏を彫った、“石棺仏”が加古川流域には大量に残されている。近世には、築城石として利用され、現在に至るまで建築材として採石が続けられている。

高砂市域では通称“龍山石”と呼ばれ、加西市では“長石”と、同材の採石地毎の名称が付けられている。



第２図　高砂市周辺の地質図

2．歴史的環境

市内では、今回紹介する採石場跡を除くと、94箇所の遺跡が確認されている。[3] 龍山を中心とした地域で、最も古い遺跡は、鴻池遺跡Ａ地点で、池岸に露出する洪積段丘下位に相当する粘土層中よりチョッピングトゥール[4]が採集されている。

他に、竜山遺跡、魚橋遺跡などでは、尖頭器、ナイフ形石器が採集されているが、[5] 発掘調査によるものではないため遺跡の具体的な内容は不明である。

縄文時代の遺跡としては、地元小学生によって発見された日笠山貝塚がある。[6][7] 貝塚は日笠山山麓、標高３ｍ前後の地点に形成されている。龍山の南に東西に広がる砂堆と後背湿地の接点に位置する塩田遺跡[8]では、縄文晩期から弥生前期の土器が出土し、神爪遺跡Ｂ地点[9]からは晩期の土器が、西坂遺跡[10]ほか４箇所の地点で石鏃、剥片などの石器類が採集されている。

弥生時代の遺物を出土する遺跡は、市内で８箇所確認され、前期には、塩田遺跡に見られるような、河川の自然堤防や微高地上に、中期以降、平野部の拡大や湿地帯の陸化にともない、東宮町遺跡[2]の立地する、海を臨む砂堆上にまで、集落の拡大、拡散が見られる。また中期以降、日笠山尾根上に位置する、日の上遺跡からは弥生土器片の他、土錘やたこつぼなどの遺物が採集されている。後期に入ると、神爪遺跡Ｂ地点[3]など、周辺の微高地上での遺跡が増加する。

第１表　主要縄文・弥生遺跡

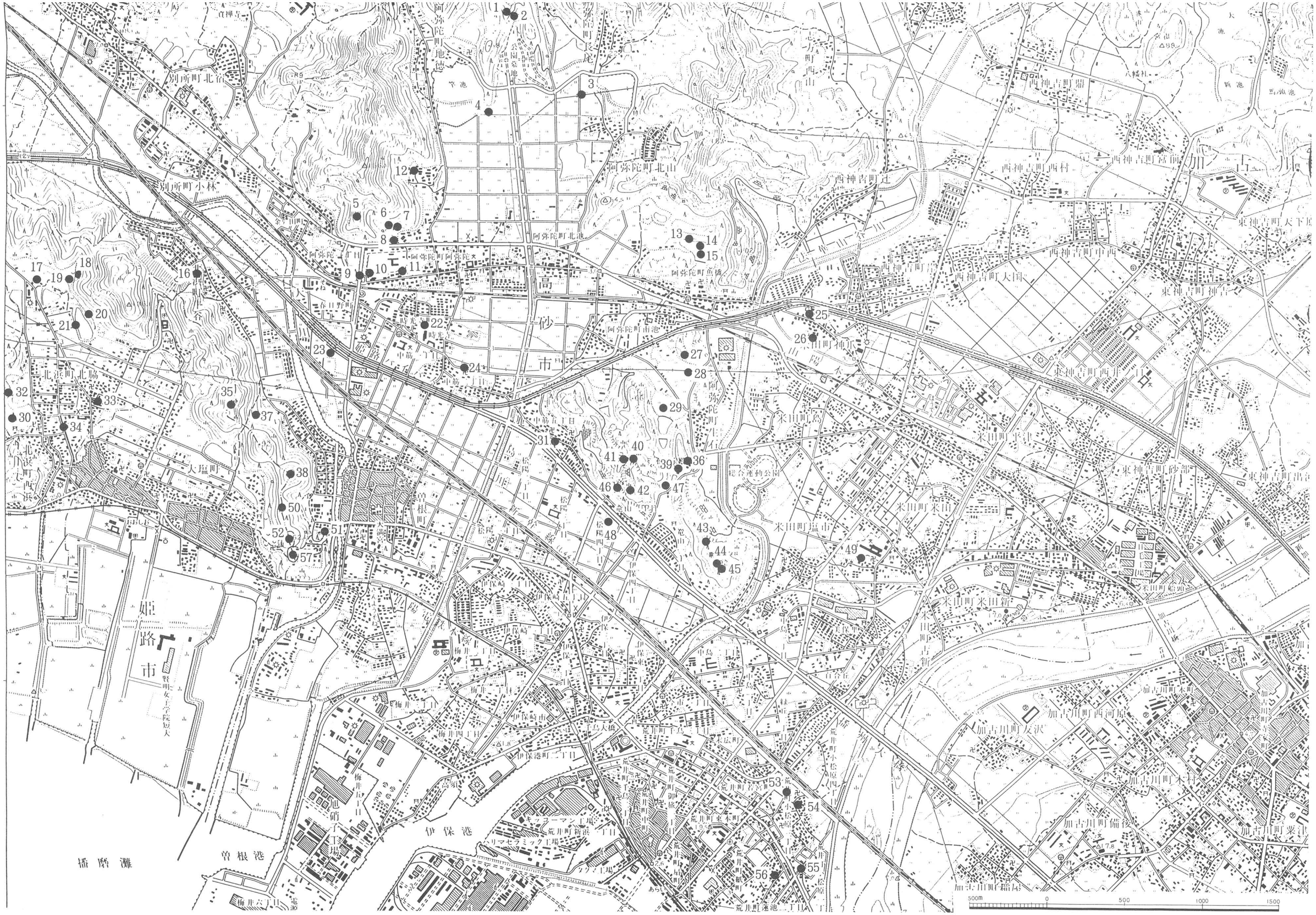
遺跡名＼時代	立地	標高	縄文時代		弥生時代					古墳時代
			晩期		前期	中期			後期	前期
			前半	後半	Ⅰ 前	Ⅰ 後	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ 前	Ⅴ 後
日笠山貝塚	山麓	2～3ｍ	―	―							
塩田遺跡	砂堆	2ｍ	―	―	―	―	―	―			
神爪遺跡Ｂ地点	低位段丘	3ｍ		―						―	―
米田遺跡	自然堤防	2～3ｍ							―	―	
魚橋遺跡	低位段丘	3ｍ						―	―	―	
東宮町遺跡	砂堆	2～3ｍ					―	―	―	―	―
朝日町遺跡	砂堆	2ｍ								―	―
中筋遺跡	砂堆	2～3ｍ								―	―
中山田・池ノ内遺跡	砂堆	3ｍ								―	―
小松原貝塚	自然堤防	3ｍ									―
日の上遺跡	尾根上	60ｍ								―	―

第２表　周辺主要遺跡地名表

番号	遺跡名	種類	所在地	時代	遺跡の概要
1	西坂遺跡 Ｂ地点	寺院跡	阿弥陀町 西坂	平安時代	1982年の市教委による確認調査では、礎石を伴う３間３間の建物跡を確認
2	寺尾１号窯	窯　跡	阿弥陀町 寺尾	平安時代	工事により半壊。平瓦、丸瓦、土師器、須恵器が出土
3	皿池ノ上 遺跡	散布地	阿弥陀町 北山ほか	縄文～江戸時代	水田中に剝片（サヌカイト）、須恵器、土師器が散布する
4	香呂山遺跡	散布地	阿弥陀町 香呂山	平安～江戸時代	水田中に須恵器、土師器、陶磁器類が散布する
5	経塚山古墳	古　墳	阿弥陀町 経塚	古墳時代	全長23ｍの前方後方墳。1980,81年の確認調査では、ガラス玉が出土
6	阿弥陀 16号墳	古　墳	阿弥陀町	古墳時代	高2ｍ、径10ｍ程度の円墳。横穴式石室墳丘は削られ半壊、石室材が露出する
7	谷ノ口遺跡	中世墓	阿弥陀町 谷ノ口	室町時代	山麓部周辺に遺物が散布する備前焼の蔵骨器が出土
8	阿弥陀 ２号墳	古　墳	阿弥陀町 谷ノ口	古墳時代	高2.5ｍ、径15ｍ程度の円墳横穴式石室封土が流失し石室が露出する
9	大日山古墳	古　墳	阿弥陀町 池ノ上	古墳時代	箱式石棺を主体とする径10ｍ程度の円墳1968年市教委調査。消滅
10	阿弥陀 ３号墳	古　墳	阿弥陀町 池ノ上	古墳時代	高2.5ｍ、径15ｍ程度の円墳。横穴式石室周囲が削られ半壊
11	阿弥陀 ４号墳	古　墳	阿弥陀町 池ノ上	古墳時代	高3ｍ、径20ｍ程度の円墳。横穴式石室石室は古くから開口する
12	阿弥陀 15号墳	古　墳	阿弥陀町 大観堂	古墳時代	高2.5ｍ、径10ｍの円墳。横穴式石室封土が流失し石室が露出する
13	鴨池遺跡 Ａ地点	散布地	阿弥陀町 魚橋宇戸	旧石器時代	池中から旧石器時代の遺物が出土する
14	魚橋１号墳	古　墳	阿弥陀町 魚橋宇戸	古墳時代	池中に石室材が露出。周辺に須恵器が散布する
15	魚橋２号墳	古　墳	阿弥陀町 魚橋宇戸	古墳時代	池中に石室材が露出。周辺に須恵器が散布する
16	天神山古墳	古　墳	北浜町牛谷 天神山	古墳時代	工事により消滅。詳細不明。鏡（三角縁五神四獣鏡）出土
17	中山田・池ノ内遺跡	散布地	北浜町北脇 中山田	弥生～室町時代	水田中に弥生土器、須恵器、土師器が散布する
18	北脇１号墳	古　墳	北浜町北脇 古当田上	古墳時代	高2.5ｍ、径10ｍの円墳。横穴式石室羨道部は半壊する
19	北脇２号墳	古　墳	北浜町北脇 小坂	古墳時代	高1.7ｍ、径10ｍの円墳横。穴式石室封土は完全に流失し石室が露出する

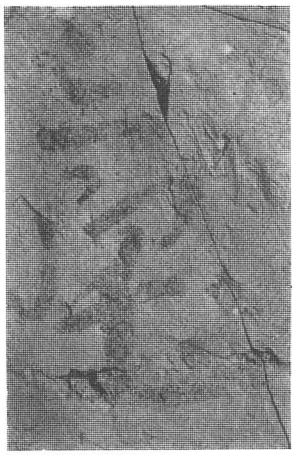
番号	遺跡名	種類	所在地	時代	遺跡の概要
20	北脇3号墳	古墳	北浜町北脇小坂	古墳時代	高2m、径10m程度の円墳。横穴式石室封土は流出し石室が露出する
21	菜切遺跡	散布地	北浜町北脇	弥生～	水田中に弥生土器、須恵器、土師器が散布する
22	時光寺古墳	古墳	時光寺町	古墳時代	径25m、高さ3mの円墳。後世の土盛り等による変形を受ける
23	塩田遺跡	集落跡	曽根町塩田	縄文～江戸時代	1968、71、77、78年市教委調査。縄文、弥生時代土器、墨書土器などが出土
24	中筋遺跡A地点	散布地	中筋2～4丁目	弥生～室町時代	水田中に弥生土器、土師器、陶磁器類などの遺物が散布する
25	神爪遺跡A地点	窯跡・散布地	米田町神爪	平安時代	畑中に遺物が散布するが、窯跡部分は消滅している
26	神爪遺跡B地点	集落跡	米田町神爪	縄文～江戸時代	1977～1988年市教委調査。弥生時代の溝、平安～鎌倉時代の建物跡などを確認
27	魚橋遺跡A地点	散布地	阿弥陀町魚橋山西	旧石器～室町時代	山麓部分にサヌカイト、チャートなどの石核、剝片土師器などの遺物が散布する
28	魚橋遺跡B地点	散布地	阿弥陀町魚橋生石西	古墳～室町時代	水田中に土師器、須恵器などの遺物が散布する
29	魚橋遺跡C地点	散布地	阿弥陀町魚橋反田	平安～室町時代	山麓部、水田中に遺物が散布する
30	西浜遺跡	散布地	北浜町西浜峠山	古墳時代	尾根上部分に須恵器、土師器などの遺物が散布する
31	中筋遺跡B地点	散布地	中筋5丁目	室町時代	土師器、陶磁器類などの遺物が散布する
32	峠山遺跡	散布地	北浜町西浜峠山	古墳時代	尾根上部分に広く須恵器、土師器などの遺物が散布する
33	北脇遺跡	構居跡	北浜町北脇村西	室町時代	西方寺周辺が主郭部と推定される『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』1985
34	北浜遺跡	散布地	北浜町北脇村西	奈良～江戸時代	水路改修工事中に土師器が出土
35	西山遺跡	散布地	曽根町西山	旧石器～江戸時代	尾根上部分にナイフ形石器、須恵器、土師器などの遺物が散布する
36	石宝殿	古墳	阿弥陀町生石	古墳時代	神社の御神体として保存されている。経年変化による表面の剝離が進んでいる
37	天川遺跡	散布地	曽根町大北山	古墳時代	山麓部分に広く遺物が散布する、土取りにより北側部分は消滅
38	北山遺跡A地点	散布地	曽根町北山	古墳時代	尾根上部分に土師器、須恵器などの遺物が広く散布する
39	竜山1号墳	古墳	阿弥陀町生石	古墳時代	封土は流失し、奥壁と側壁の一部、小型家形石棺の蓋と身が残る

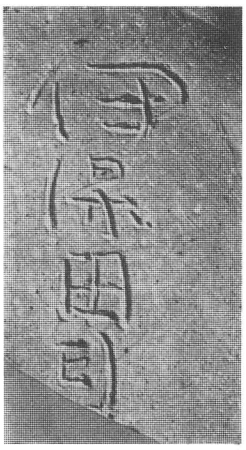
番号	遺跡名	種類	所在地	時代	遺跡の概要
40	竜山２号墳	古　墳	竜山２丁目	古墳時代	石材の切出しにより奥壁部分のみ残る。石室内には、箱式石棺が確認されている
41	竜山３号墳	古　墳	竜山２丁目	古墳時代	封土は流失し、天井石は取り除かれている、須恵器、土師器など出土
42	竜山４号墳	古　墳	竜山２丁目	古墳時代	円墳。横穴式石室から、須恵器、土師器出土。消滅
43	竜山５号墳	古　墳	米田町島 竜山１丁目	古墳時代	全長35ｍの前方後円墳。1976年市教委調査竪穴式石室から鏡、鉄製品などが出土
42	竜山６号墳	古　墳	竜山１丁目 米田町島他	古墳時代	径35ｍの円墳、墳頂部に一部石材が露出する前方後円墳の可能性もある
45	竜山遺跡	散布地	竜山１丁目 米田町島他	旧石器～縄文時代	山頂部を中心に尖頭器、ナイフ型石器、石鏃、剝片などの遺物が散布する
46	天の磐舟	石　棺	竜山２丁目 他	古墳時代	伊保山山腹、南斜面に位置していた、現在市教育センターに移されている
47	伊保山 古窯跡	窯　跡	竜山２丁目	江戸～明治時代	山麓部に窯壁、遺物が散布する
48	伊保遺跡	散布地	竜山1、2丁目、松陽他	古墳～室町時代	水田中に土師器、須恵器などの遺物が散布する
49	米田遺跡	集落跡	米田町米田	弥生～室町時代	自然堤防上に広がる、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などの遺物が出土
50	日の上遺跡	集落跡	曽根町北山	弥生～古墳時代	尾根上部分に弥生土器、土師器、土錘などの遺物が散布する
51	日笠山貝塚	貝　塚	曽根町 南山他	縄文時代	1968、71、77年に市教委調査縄文土器、石器、獣骨が出土、晩期の土壙墓を確認
52	日笠山 １号墳	古　墳	曽根町経塚	古墳時代	全長30ｍの前方後円墳、土師器、円筒埴輪が出土、後円部に石室材が散乱する
53	小松原遺跡 Ａ地点	構居跡	荒井町小松原３丁目	室町時代	大福寺、三社大社を中心に、堀跡が残る土師器、陶磁器などの遺物が出土
54	小松原遺跡 Ｂ地点	集落跡	荒井町小松原2、3丁目	古墳～室町時代	自然堤防上及び周辺の水田中に須恵器、土師器などの遺物が散布する
55	小松原貝塚	貝　塚	荒井町小松原１丁目	古墳～平安時代	大半は、削平され畑として一部残る。須恵器、土師器、鹿骨などが出土
56	蓮池遺跡	集落跡	荒井町蓮池 １、2丁目	古墳時代	微高地上で、須恵器などの散布が見られる
57	日笠山 群集墳	古　墳	曽根町経塚	古墳時代	横穴式石室を主体とする古墳。貯水池工事により消滅



第３図　高砂市の主な遺跡分布図

「札家」


「三宅」

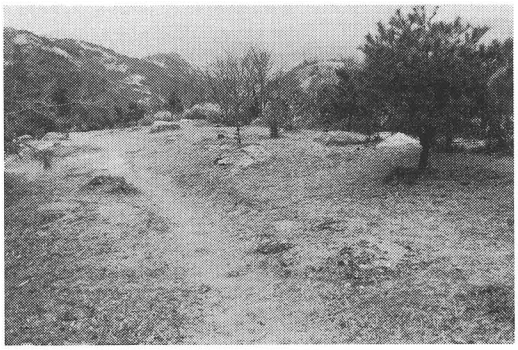

「伊保田司」

第４図　塩田遺跡出土土器

古墳時代の集落遺跡としては、小松原遺跡Ｂ地点がある。同遺跡の確認調査[4]では、古墳時代後期の包含層とともに、この層の上下を厚い砂層が覆っており、この自然堤防上でも、常に水の脅威にさらされていたことが確認された。比較的古い時代に形成された砂堆付近では、陸地が南下するにつれ、周辺の環境も安定した方向に向かっていったものと思われ、この時期、荒井周辺の砂堆上には、小松原遺跡Ｂ地点をはじめ蓮池遺跡など古墳時代後期の遺跡が出現する。紙町周辺の砂堆上では須恵器などが散布する地点を確認している。[11]

前期の古墳には、経塚山古墳、竜山５・６号墳などがある。経塚山古墳は、経塚山山頂部に前方部を南に向けた前方後方墳である。墳丘は、全長23.4ｍを測り、前方部中央には、全長3.85ｍの竪穴式石室が築かれており、1980，81年の調査では、石室内からガラス玉が２点出土している。[12]

竜山５号墳は、竜山尾根上鞍部に位置する前方後円墳で、全長35ｍを測る。後円部中央には、竪穴式石室が築かれており、北側部分は流失しているため全長は不明だが、残存部で全長4.40ｍを測る、石室内からは内行花文鏡、剣、刀、槍先、鏃先、短冊形鉄斧、ガラス玉が出土している。[13]


第５図　ＫＡ－16地点全景

日笠山山頂には、前方後円墳である日笠山１号墳が、龍山山頂部には竜山６号墳が位置している。この竜山６号墳は現況では円墳だが、前方部を削平された前方後円墳の可能性がある。[14]

後期には、前期の古墳を中心として、各所に群集墳として古墳が造られている。

阿弥陀古墳群は、経塚山を中心とした山麓に形成された古墳群で、５支群、15基の古墳で構成され、大半は未調査だが、開発に伴い12,13号墳のみが発掘された。[15] 12号墳は池の上支群に属する古墳で、国道２号線の南側、大日池までの緩やかな傾斜の山麓部分に位置していた。

第６図　調査風景

12号墳の残存部分での規模は、直径10.5ｍ、比高1.1ｍを測り、石室は、両袖式の横穴式石室で、全長6.90ｍ、玄室長4.40ｍ、最大幅2.21ｍ、高さ2.06ｍ、羨道部長2.5ｍ、高さ1.32ｍ。を測る。

奈良・平安時代の遺跡には、塩田遺跡、西坂遺跡などがある。塩田遺跡からは、土師器、須恵器、墨書土器、緑釉陶器（りょくゆうとうき）、軒丸瓦などが出土している。墨書土器には「□西」「大使」「札家」「三宅」「□（分か）」などがあり、他に底部外面に「伊保田司」とヘラ書きされた円面硯（えんめんけん）も出土し、「大使」「札家」と書かれた土器は８世紀後半、円面硯は８世紀代、「三宅」は８世紀末から９世紀初頭に比定される。[16]

「三宅」は（みやけ＝屯倉）を指し、「田司」は（たのつかさ）、「大使」は（たつかひ）と解され、前者は「三宅」の経営者を、後者は稲の出納に直接あたったものを指し、「札家」の札は、木簡を指し、このような出納事務を執った事務所を表すものと考えられている。このような遺物から、官衙的な建物、郡衙（ぐんが）がこの地に存在したことが推定されている。[17]

西坂遺跡は、高砂市公園墓地、北西の尾根上及び山麓部に広がる遺跡で、中心となるＢ地点では、尾根上（標高51ｍ）平坦部を利用し、北側部分は一部を削りだし、南側部分は土盛りにより、南北20ｍ、東西15ｍの広さを確保し、桁行三間、梁行三間の礎石を利用した建物跡を確認している。出土遺物には、椀、皿、土釜などの土師器、壷・甕などの須恵器、瓦類、釘などの鉄製品のほか壁土が出土している。[18]

瓦には平、丸瓦、軒丸瓦が１種類、軒平瓦が２種類が出土している。遺物は、11世紀初頭に比定されているものである。[8]

その他、平安～鎌倉時代の遺跡として魚橋・寺尾古窯跡など窯跡も確認されている。

魚橋古窯跡は、法華山谷川の右岸、低位段丘上に位置していたが、土取りにより消滅している。出土遺物から、12世紀の前半から13世紀初頭にかけて瓦を中心に操業されており、この地で生産された瓦は、播磨国府に比定される姫路市・本町遺跡、播磨国分寺など近隣だけでなく、

京都府・六勝寺や鳥羽離宮などにも運ばれていることが確認されている。[19]

寺尾古窯跡は、公園墓地造成工事中に発見され、２基の窯跡を確認している。灰原、焚口、燃焼部の大半は削られてなく、現存する燃焼部も天井部はなく、左右両壁の残存高は20cm前後、床面最大幅は140cmを測る。出土した遺物には、丸・平瓦、須恵器、鉄製品があり、平安時代後期に比定されたものである。[20]

神爪遺跡Ａ、Ｂ地点では、窯体は確認されていないが、融着した須恵器や軒丸瓦の笵の一部などが、出土しており須恵器、瓦兼用の窯跡の存在が推定されている。[21]

中世には、魚崎構居、小松原構居、高砂城などの遺跡の他、当時の遺物が出土する遺跡が数箇所で確認されているが、調査例は少なく明らかではない。

谷ノ口遺跡では、文安４年（1447）の銘の刻まれた石棺仏に伴い、備前焼の骨蔵器が出土しており、石棺仏の埋葬形態を知る上で貴重な例を示している。周辺では、石棺や古墳の石材を利用した石仏、備前焼等の遺物も広く散布しており、周辺一帯は、中世の墓域として利用されている。[22]

近世の高砂は、姫路藩の物資の集散港として発展を遂げ、特に高砂町は重要拠点として整備され、当時の町割は現在に至るまで残されている。近世陶器、瓦などの遺物、井戸、礎石などの遺構が工事等で、断片的に採集、記録されているが、[23]調査例はなく今後この時期の本格的な調査が望まれる。

注 (1) 田中真吾ほか『加古川市史』第１巻 1989

(2) 地質調査所『兵庫県南西部地域水理地質図及び説明書』 1966

(3) 『高砂市遺跡地名表』『遺跡地図』高砂市教育委員会 1992

(4) 眞野　修「兵庫県高砂市阿弥陀町魚橋採集の石器」『旧石器考古学』35 1987

(5) 佐藤良二「志方町・加西市及び周辺の旧石器」『旧石器考古学』 21 1980

(6) 本郷晋吉ほか『高砂市史』曽根編　高砂市教育委員会 1964

(7) 赤松啓介・喜谷美宣ほか『日笠山貝塚』１、２高砂市教育委員会 1986

(8) 眞野　修『塩田遺跡』高砂市教育委員会 1971
(9) 横道隆一「神爪遺跡Ｂ地点」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度 1988
(10) なびつま「郷土資料室だより」１巻１号高砂市教育委員会センター 1989
(11) 高砂市文化財資料７「小松原貝塚」１高砂市教育センター 1988
(12) 眞野　修「経塚山古墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和56年 1984
(13) 山本三郎・眞野　修『播磨・竜山５号墳発掘調査報告書』高砂市教育委員会 1978
(14) 泉　洋ほか『竜山３号墳』白陵歴史研究サークル 1985
(15) 上田哲也・赤松啓介『阿弥陀古墳群』高砂市教育委員会 1965
(16) 眞野　修・前田保夫『塩田遺跡２』高砂市教育委員会 1979
(17) 原秀三郎「倉札・札家考」『木簡研究』第８号　1986
(18) 眞野　修「大日廃寺」『兵庫県埋蔵文化財調査年報昭和57年度』 1985
(19) 今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』 1980
(20) 「郷土資料だより」２巻２号　　高砂市教育センター 1990
(21) 「 –市内の埋蔵文化財 –」　展示会パンフレット　高砂市教育センター 1986
(22) 『高砂市遺跡地名表』高砂市教育委員会 1992
(23) 高砂町・舩津重次氏同町内採集資料ほか

Ⅲ．遺跡の分布状況（分布調査結果）

１．分布調査の概要

広義の意味での“龍山石”は、古墳時代前期の竪穴式石室材及び長持形石棺の素材としての開発に始り、中世には五輪塔を始めとする石造物の素材として、近世には築城用の用材として切出され、建築部材として現代にいたるまで採石は続けられている。

特に石棺材としての“龍山石”ついては、古墳時代の石棺研究や生産形態についての研究が進む中、多くの論考が展開されているが、その古墳時代の代表的な生産地として比定される“龍山”も加古川下流域一帯の部分を指しており、産地山塊の単位で特定するものではない。

奈良時代に成立した『播磨国風土記』には、「この里に山あり。名を伊保山といふ。帯中日子命を神に坐せて、息帯日女命　石作連大来を率て　讃岐の国の羽若の石を求きたまひき。未だ御廬を定めざりしとき、大来見顕しき。美保山といふ。山の西に原あり、名を池の原といふ。原の中に池あり、故、池の原といふ。原の南に造り石あり、形、屋の如し。長さ二丈、広さ一丈五尺、高さもかくの如し。名号を大石といふ。伝えていへらく、聖徳の王の御代、弓削の大連の造れるいしなり。[1]」と記されており採石に関わる地名説話が見える。

美保山は伊保山を、大石は石宝殿を指すものと解されている。この伊保山南山腹には、古式家形石棺の蓋石である天磐舟が位置し、昭和40年代には、石棺の未完成品と推定される石材が散在していたことが記されている。

また、伊保山では現在の石材採掘に伴い旧丁場から、ノミなどの道具類も出土している。高砂市教育委員会が1989～91年度に実施した、市内遺跡詳細分布調査においても採石場跡の調査については、遺構の年代の特定も困難で、多くは現在も続けられている採石部分と重複すると

第７図　調査風景

ころから、一部地域を対象に実施したにすぎないが、近年竜山を中心とする山塊では、採石場跡を利用した資材置場やゴミ処理施設等再開発が増加する傾向にあり、これらの開発に対応し採石場跡としての生産遺跡を保存するための基本資料を作成する目的で調査を実施した。

分布調査では、高砂市阿弥陀町、伊保町、米田町に広がる広義の“龍山”を中心とした範囲を対象として実施し、岩盤から石材の切り出し時に残った矢穴等の加工痕を検出し、切出し時の工程の単位毎に地図上にドット化し、必要に応じ地形測量を行うとともに、矢穴については、可能な限り計測した。現在操業中の採石場、既に放棄されているが現代の石切場と確認できるものについては、時期の重複するもの以外は、分布図には記していない。

年代を特定するのは困難であるが、矢鉄を利用して石を切出していた1950年代前後までを対象に考えている。

今回の分布調査では採石場毎の地点を明確にするため、各丁場の存在した山塊毎に通称名を記号化し、順次分類、番号を付している。但し、実際には今回分類した以上に、零細な丁場割も多く、多くの分類が可能であるが、操業された時期によってもその数が異なるため、ここでは煩雑さを避けるため、通称の山塊を一単位としている。

注 (1) 鎌谷木三次校『播磨国風土記』（未刊）

２．各支群の概要

加茂山支群（ＫＡ－01～30）

加茂山は、加茂神社の位置する山塊を指し、狭義の龍山とは中央部谷間で区分される。

今回、加茂山で確認された採石場跡は30箇所に及んでいる。山麓部北側では、現在も続く採石場があり、南側では山麓周辺まで宅地化等開発が進んでいるため、明確ではないが、山腹及び尾根上では、遺存状況の良好な採石場跡も№４、７、13、14、16、26、28地点など多く残されている。採石の規模、地点毎の岩盤の節理の状態によって遺構の状況が異なっている。ＫＡ－16地点では、岩盤に切出しのための矢穴と、時期の異なるものと思われるノミ状の加工痕が保存状態もよく残されているところから、時期の比定を目的としてこの岩磐を中心として試掘調査を実施した。

龍山支群（ＴＡ－01～10）

狭義に用いる龍山は、竜山６号墳の位置する山頂部を中心とする範囲を指している、この山中で確認されたもので、山塊の北側半分は現在も続く採石によって旧状をとどめない。今回、龍山で確認された採石場跡は10箇所にすぎないが、これは山麓部、特に南側では山麓まで宅地化開発が進んでいるため、採石の痕跡は認められるものの矢穴等の確認が出来ないもの、重なる採掘によって立ち入りの出来ない地点も多くあり、今後の調査が必要な部分である。

尾根上では、遺存状況の良好な№３、４地点などのほか、尾根上には矢穴痕の残る加工石材片が散在する。

宝殿山支群（ＨＯ－01～04）

生石神社、石宝殿の位置する山塊で、採石場跡はわずかにＨＯ－01～04の４箇所を数えるのみである。№３地点は、山塊の北側の山麓から中腹にかけて、標高15～20ｍの地点に位置している。80×150㎝の長方形の四周を縦割りの矢穴を開け、下辺は水平方向節理（ズラキズ）を利用した横割の矢穴を開けた状態の石塊が残されている。石材の切出し方法等は他の場所と同じであるが、石材の上面に線刻が刻まれている。線刻の中央部は、剝離のため文字か、記号かは、明確ではない。

生石中山支群（ＯＯ－01～06）

宝殿山に北接する通称“生石中山”で確認されたものである。当山塊でも他の支群と同様、現在も続く採石場があり、このために北側部分は大きく削平されている。また、山頂から西側の部分についても、現代の採石により旧状を著しく変えている。

確認された地点は、東側山腹から山麓にかけての部分に広がっている。

ＯＯ－01～03地点の位置する地点は、斜面全体が凹地状を呈しており、一部露出する岩盤に矢穴等の加工痕が残る。他に岩盤は露出していないが、同様の凹地状を呈する地点が、規模の

違いはあるものの、数箇所見られる。これらの部分も採石場と推定される。

01地点では、採石の痕跡が良好に残されており、この矢穴から、160×200㎝前後の石材を切り出していたものと推定される。厚さは下半部が埋もれているため明確ではない。

地蔵山支群（ＺＩ－01）

生石中山に北接する山塊で、山頂部には石仏・五輪塔の他、家形石棺蓋石が石仏前に置かれている。北端部分は、バイパス工事により削平され、他の山塊と同様、採掘が続けられているため、旧状を著しく変えている。

遺構の確認されている地点は、現在の採石場の中に、一部残っている状態にすぎず、屑石・廃材の置場となっているため、遺構の規模などは不明である。

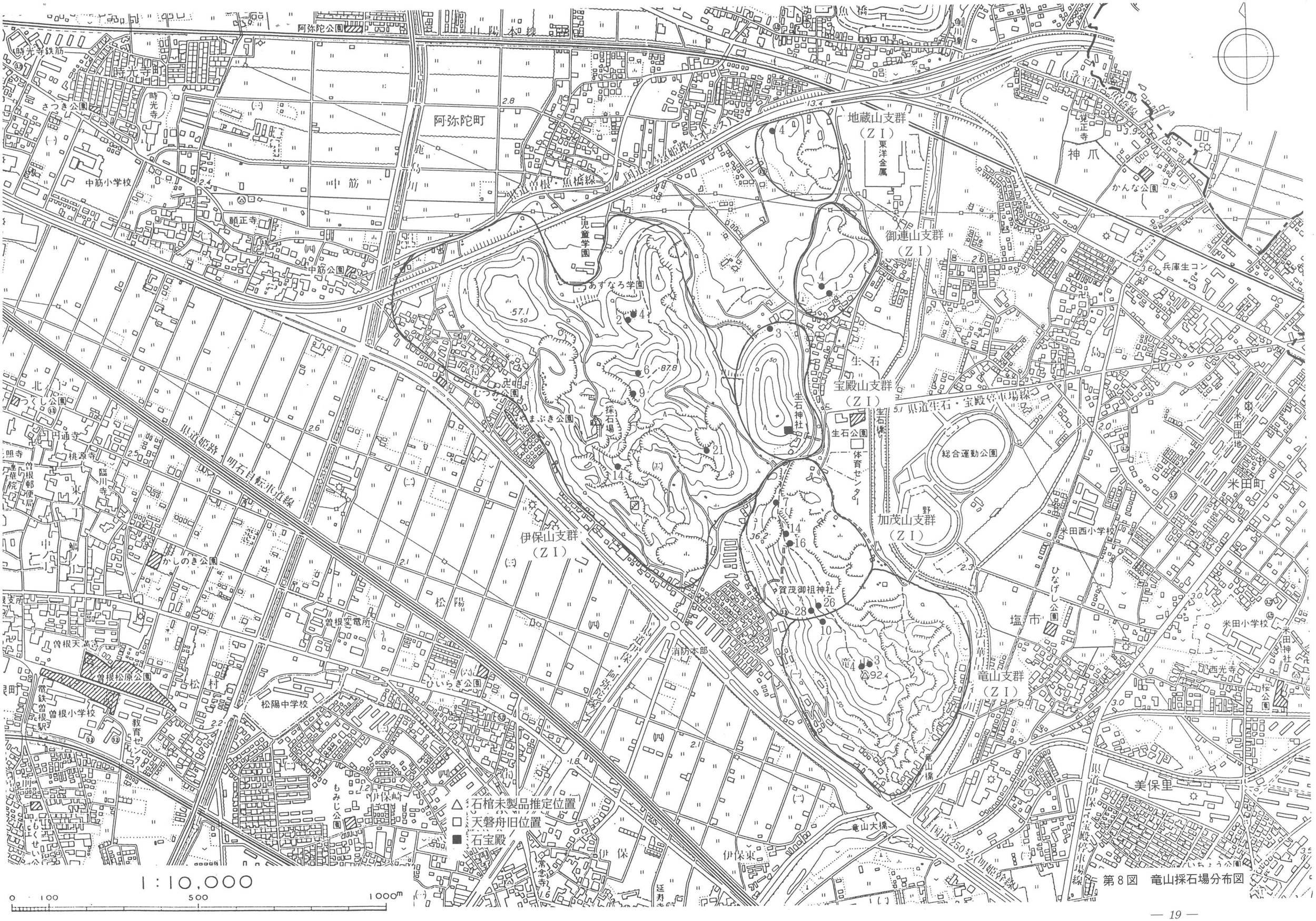
伊保山支群（ｉＨ－01～34）

この支群は、宝殿山の西側に広がる高坪山、中筋山を含んだ広い範囲の山塊を指しているが、分布の中心となる部分は伊保山山頂周辺となるため、伊保山支群と称することにした。

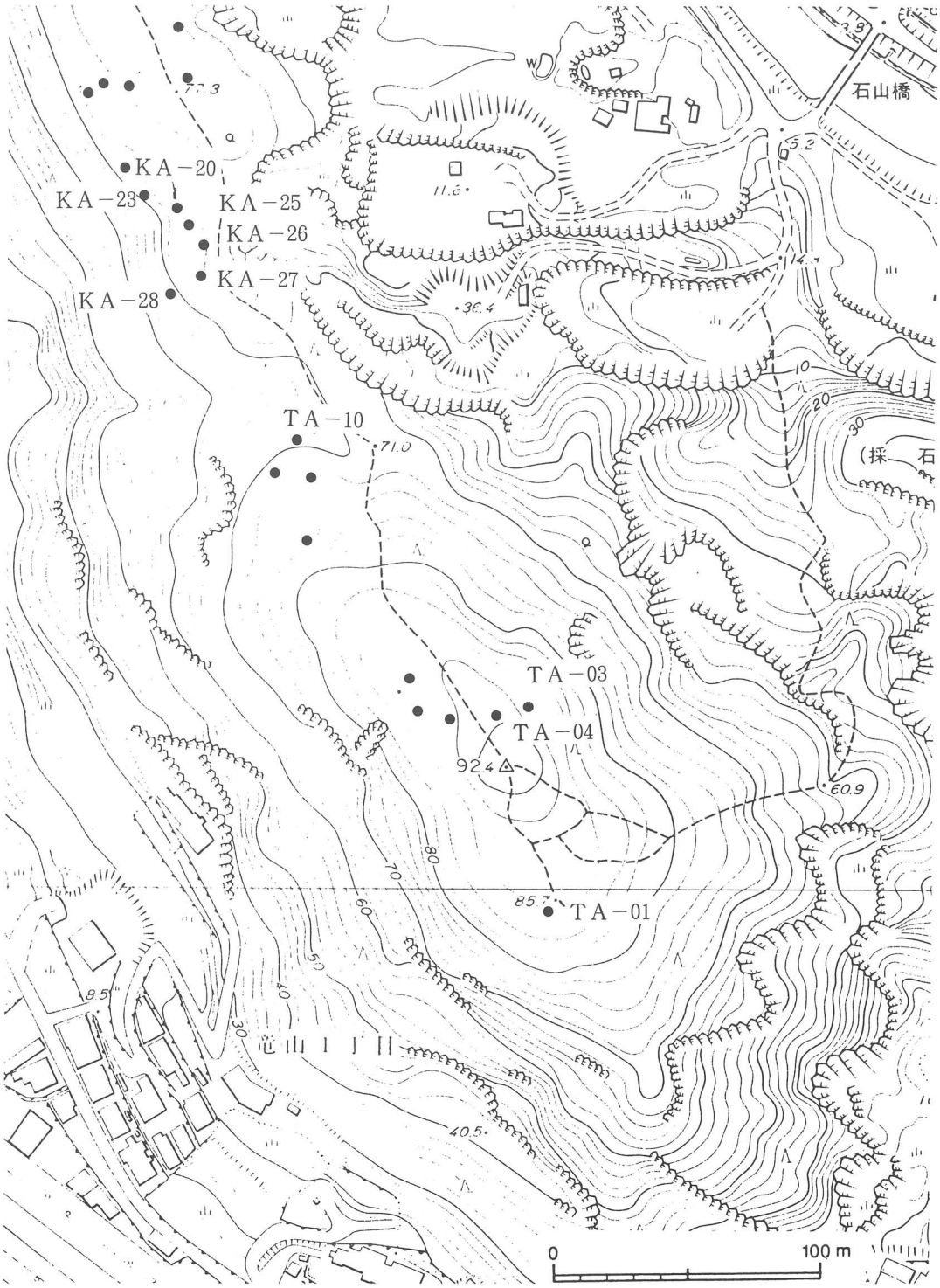
この支群でも、他の支群と同様に江戸時代以降、増減はあるものの戦後しばらくまでは多くの丁場が採石を続けていたが、現在では、数箇所で操業しているにすぎない。このような状況から、山塊の山頂から、山麓にかけて規模の大小はあるものの多くの採掘場が開口している。

分布調査では比較的、旧状を残している山頂付近及びその周辺で、矢穴痕等の遺構を確認している。この支群中の採石場でも、他の採石場と特に異なるものは見うけられない。

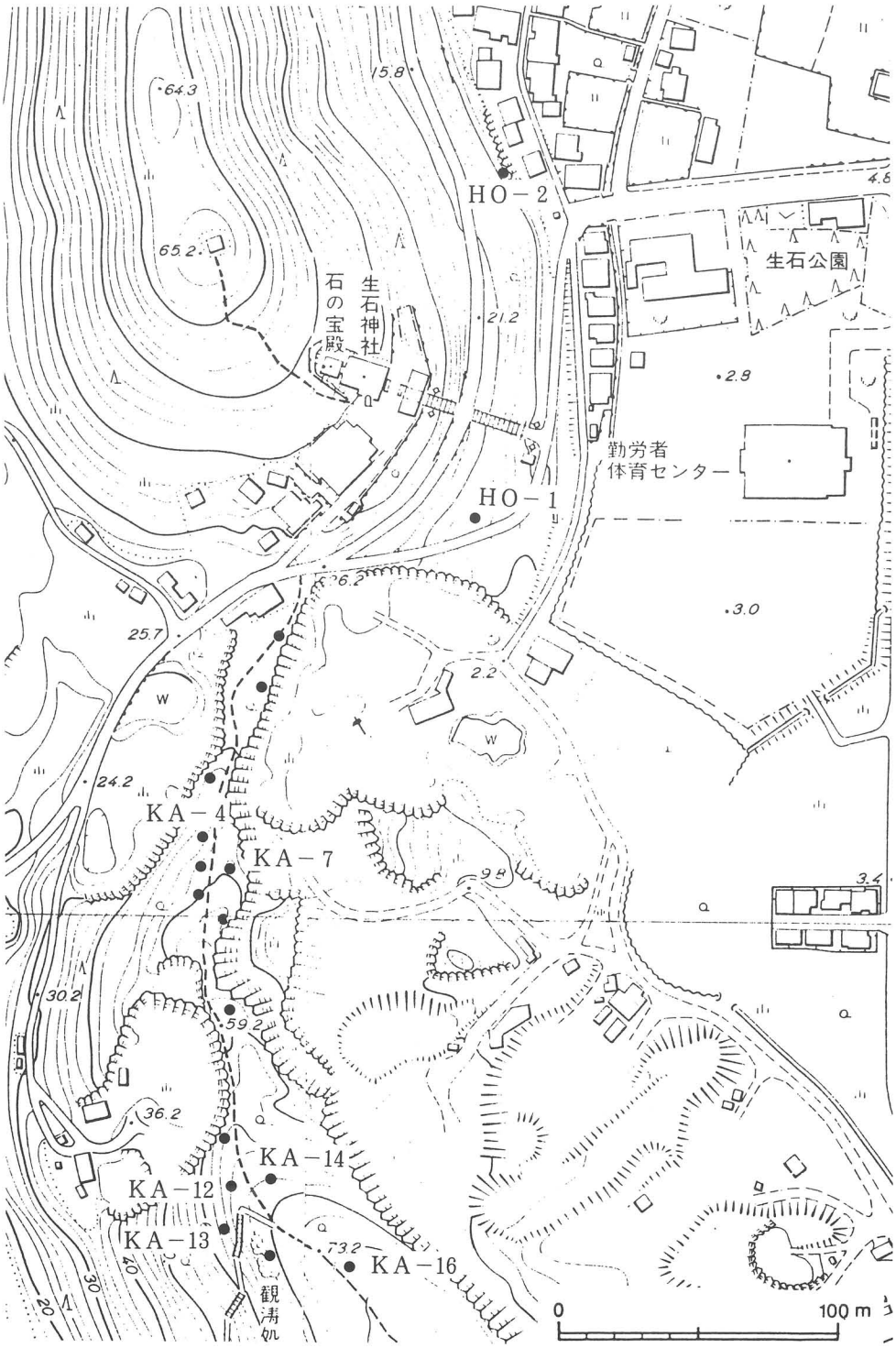
山頂付近に遺存するＩＨ－７、８地点では採掘場だけでなく、切出した石を搬出するための板石や廃材等で整備された幅60～100㎝を測る搬出路と想定される遺構も良好に残されている。



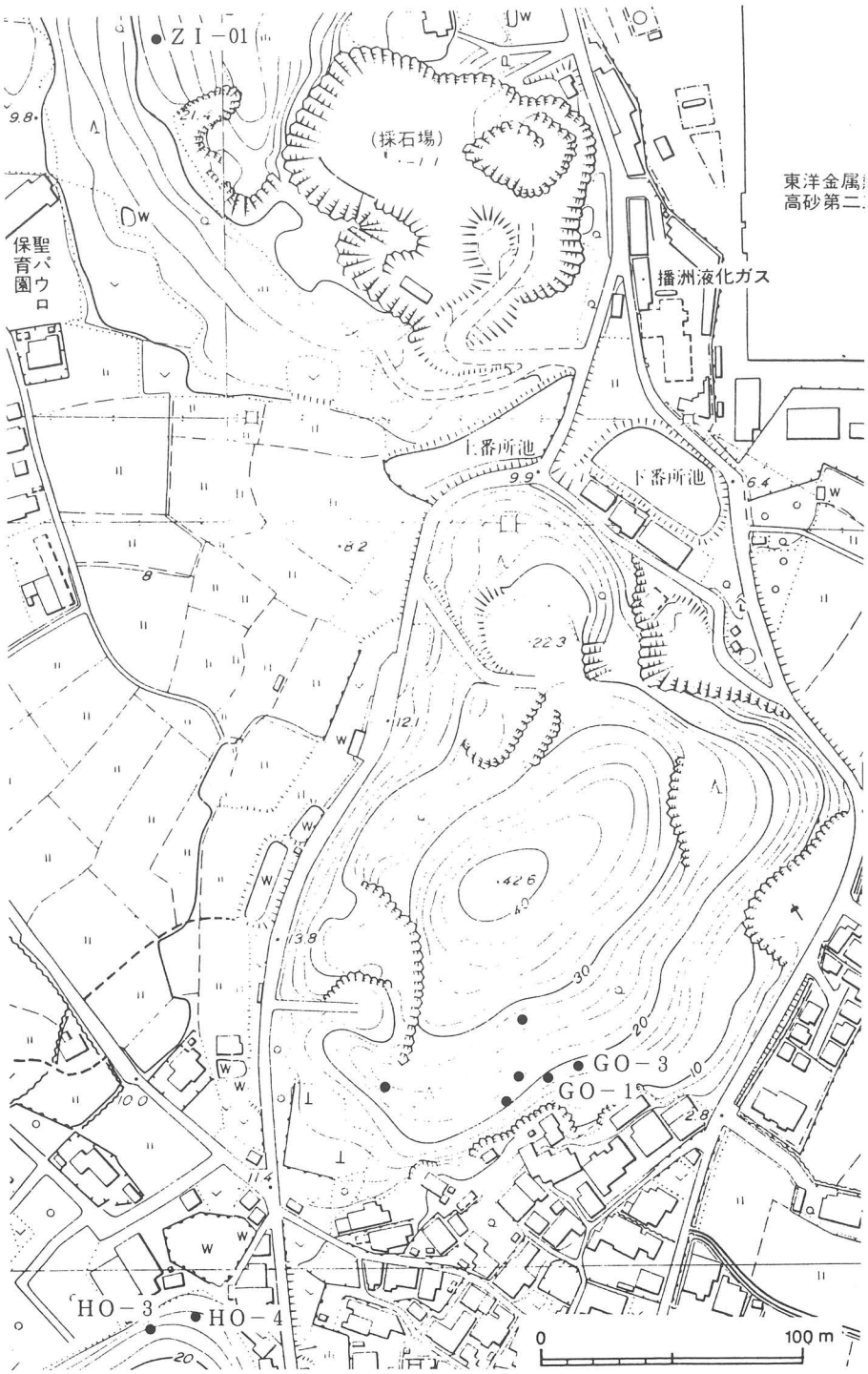
第8図　竜山採石場分布図



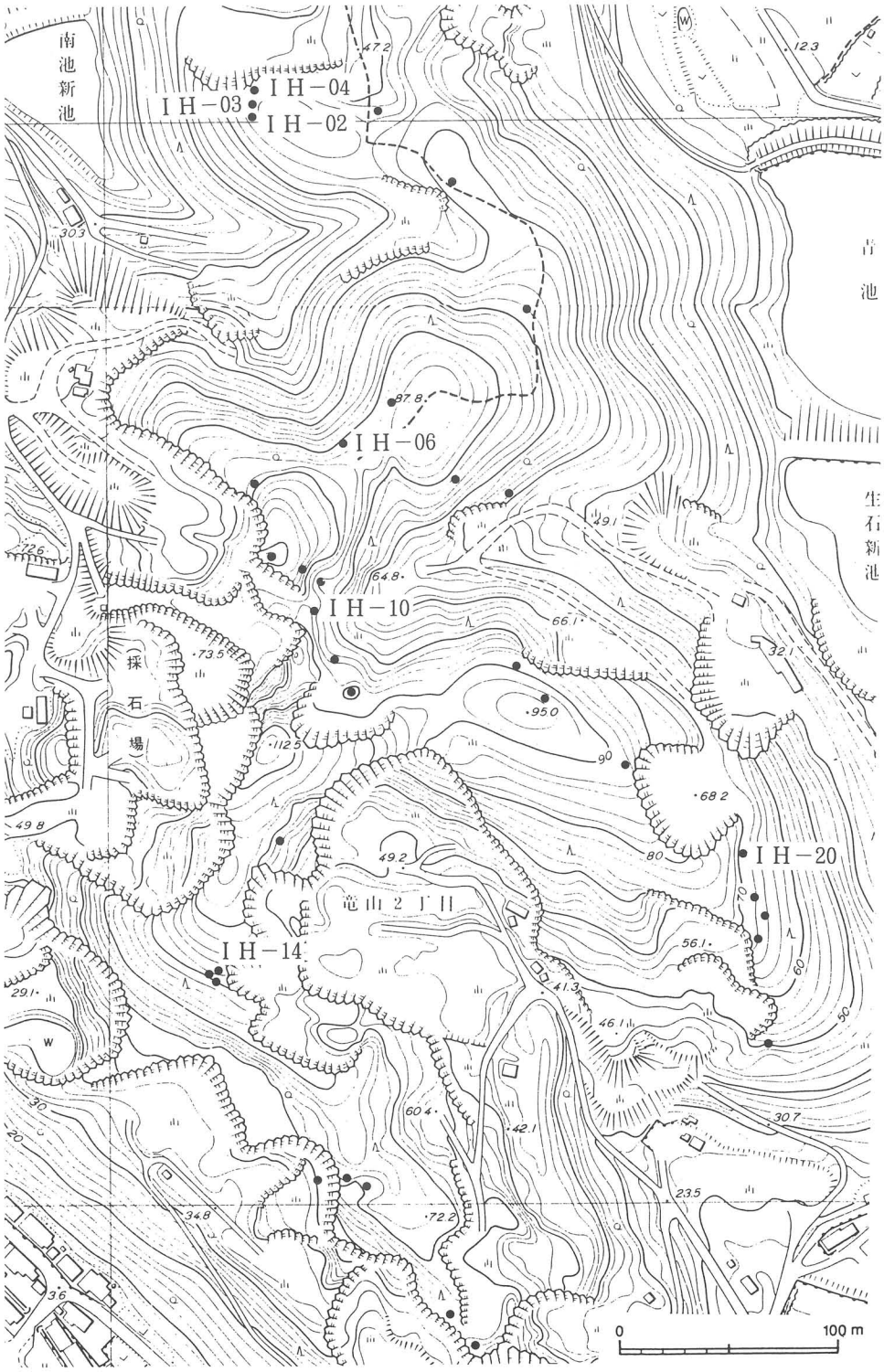
第９図　加茂山・龍山支群分布図



第10図　宝殿山・加茂山支群分布図



第11図　宝殿山・地蔵山・生石中山支群分布図



第12図　伊保山支群分布図

Ⅳ．石切場の概要

加茂山No４地点（ＫＡ－４）

ＫＡ－４地点は生石神社鳥居前から「観涛処」へ登る尾根筋道の途中、道を挟んで東西に採石場跡が広がり、標高42～44ｍの地点に位置する。この地点では、露出する矢穴跡の観察から、時期の異なる採石作業が重複していることから、各々時期の異なる地点をNo４～７地点と呼称している。

No４地点は、一部露出する岩盤に矢穴跡が残り、凹地に上部からの流出した土砂、採掘時の屑石（コッパ）が堆積している状態で、西側部分は現在の採石のため崩落している、現況での規模は、南北６ｍ、東西５ｍを測り、不整形な卵型を呈している。採掘坑中央部を観察すると水平方向の節理面（ズラキズ）、垂直方向の節理面（タテキズ）などの堆積節理を利用して、階段状に割り取っていたことが窺えるが、明瞭に矢穴が残るのは開口部から３段目以下で、上部の露岩の肩部には明確な矢穴は検出されず、節理面に沿って10㎝前後の不成形な袋状の凹みが残されており、節理面が発達した顕著な部分については、ＫＡ－７地点でも見られるよう定型の矢穴は掘らずに節理面に残る凹部を利用し石を割ったものと考えられる。（図版11下）

切出し部の最深部では岩盤の露出面から２ｍの深さまで掘り込み、特に中央部分では、割出し時の矢穴、矢穴を掘るための調整痕（矢場取り＝ヤバトリ）などが明瞭に残っている。（図版８下）この調整痕は、矢穴を掘る準備として行うもので、この地点では、節理面に対して均一に力のかかるよう矢穴の打込み面を揃えておく必要があり、そのためにおこなうものでノミ状の工具を用い節理面を覆う岩の部分を削り取り、節理面を露出させている。

加工痕は幅５～８㎝、長さ８～10㎝の溝状で、矢穴を掘り込んだ節理面に対して垂直に打込んでいる。山石屋の作業工程ではヤバトリ（矢場取り）と呼ばれる作業に対応する。

No１の矢穴は、No２の矢穴を掘るために設けた“矢場取り”のためのもので、南端部から10㎝の所で、No２の節理面と重なる。確認のできる矢穴痕は154箇所を数え、１ｍの幅に２～３㎝前後の間隔で８枚の矢穴が掘られている。

矢穴は、８箇所、152個を検出している。

第１地点では、矢穴列１ｍに平均12.5個が、第２地点では、１ｍに平均6.5個、第３地点では１ｍに平均7.0個の矢穴が掘られている。

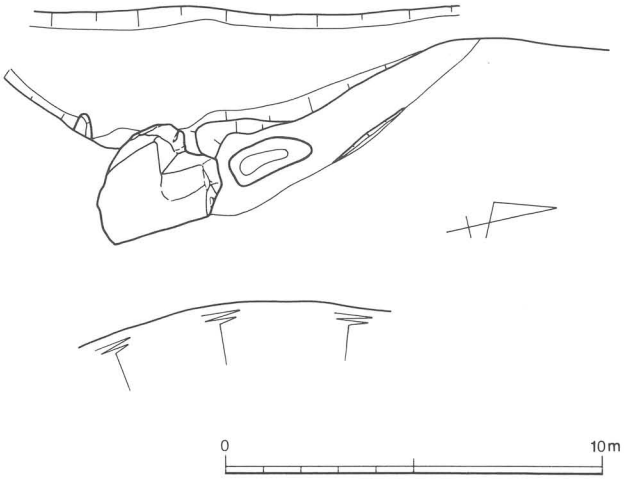
加茂山No15地点（ＫＡ－15）

15地点は加茂山山腹に位置する「観涛処」割出し時のもので、正確には採石場とは異なるものであるが、年代の明確な加工痕としてとりあげた。

「観涛処」は、天保７年（1836）姫路藩河合寸翁の尽力によりこの地に刻まれたもので、３

字の大きさは各1.8m前後、跋文まで含めると全長10mを測る。

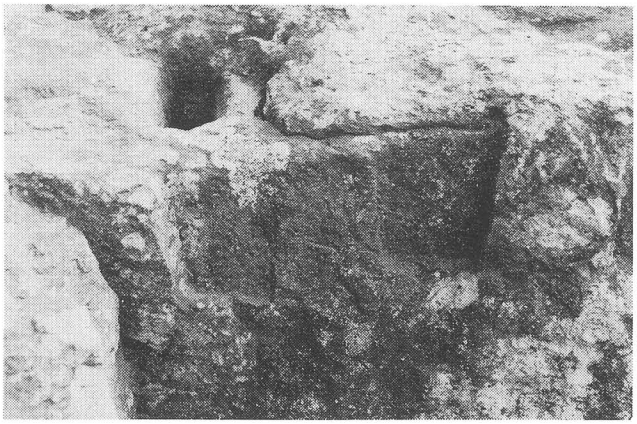
この3字を刻むための準備作業として、荒割りで岩盤を垂直に近い状態で、3×10m前後の平坦面を切出す必要がある。遺存する矢穴の形状は、平面は長方形を呈し上端部では、5×10cm、先端部では、2.2×7.2cm、断面はやや角の丸い逆台形状となり、上端部からの深さは9.6cm前後を測る。



第13図　加茂山No15地点地形測量図

矢穴先端の掘り込む角度は、すべて同一ではなく、矢のさき具合を考慮し節理面に対して微妙な方向の調整がされていることが矢穴底部の状況からわかる。

この地点では、尾根上からおよそ40～45°前後の傾斜を示す堆積の節理に対して、垂直に近い状態で走る節理面（タテ）を利用して平坦面を割出しています。



第14図　加茂山No15地点矢穴細部

矢穴の規模、掘り込みの状態などは、目的とする石材の切出す矢穴と準備段階の石材を切出すための矢穴とか節理面の状態によって異なるが、矢穴の形状は台形で、開口部幅4.0～11.0cm、底部幅3.3～10.5cm、深さ5.5～16.2cmを測る。割り切れずに残った矢穴では、開口部は7.1×10.1～7.2×8.5cmの長方形を呈し、深さ12.1×14.0cmを測る。

加茂山No16地点（ＫＡ－16）

加茂山登山道を登り切った尾根上、平坦部、標高72ｍ前後の地点に位置する。

矢穴の残る石材を中心にして、平坦面上で岩磐が広く矢穴を残す岩盤を中心に尾根に平行する、1.5×15ｍのＡトレンチとこれに直交する1.5×10ｍのＢトレンチの２本を設定し、調査を実施した。Ａトレンチでは、尾根上北側から南に緩やかに岩盤が延びている、加工痕の無い岩盤部分では、表土下に風化礫を含む濁黄灰色土、明灰黄色粘質土となり、自然の堆積を示しているが、加工痕の残る部分の岩磐では、表土直下がこの採石面上部となる。

中央部、縦割り状の矢穴は、表土直下で検出したもので、一部北端部のものは露出していた。（図版16下）矢穴は、200㎝×75㎝前後の規模の岩をほぼ中央部で二分するために、長軸に直交する矢穴が５個、これをさらに二分するための矢穴が、直交する方向に２個掘られている。この岩の上部は平坦に整形されており、また両側面にもノミ状工具による石材の整形痕が残る。矢穴は、整形途中のものも含まれており、節理面の拡大、矢穴の欠損も見られず、この矢穴は使われることなく、途中で放棄されたものと思われる。

矢穴は、やや不整形な長方形で開口部の幅6.48～7.36㎝、縦4.03～4.45㎝、深さは7.25～9.26㎝を測る。

岩の北側側面では、広い範囲でノミ状工具による整形痕が残されており、この加工時の屑石が表土下に、南から北に層状に堆積し、加工痕下端を覆っている。この屑石層中下部に、黒灰色土が見られ、土層中より炭に混在して中世に比定される土師器皿が出土している。

この矢穴の残る岩に、直交する状態で露出している岩の西側側面にも、横割り状の３個の矢穴が残されている。この矢穴も割れ残ったものではなく、整形中で放棄されたものである。矢穴は、不整形な楕円形で、開口部の幅3.74～4.8２㎝、深さは4.90～4.89㎝を測る。

加茂山No26地点（ＫＡ－26）

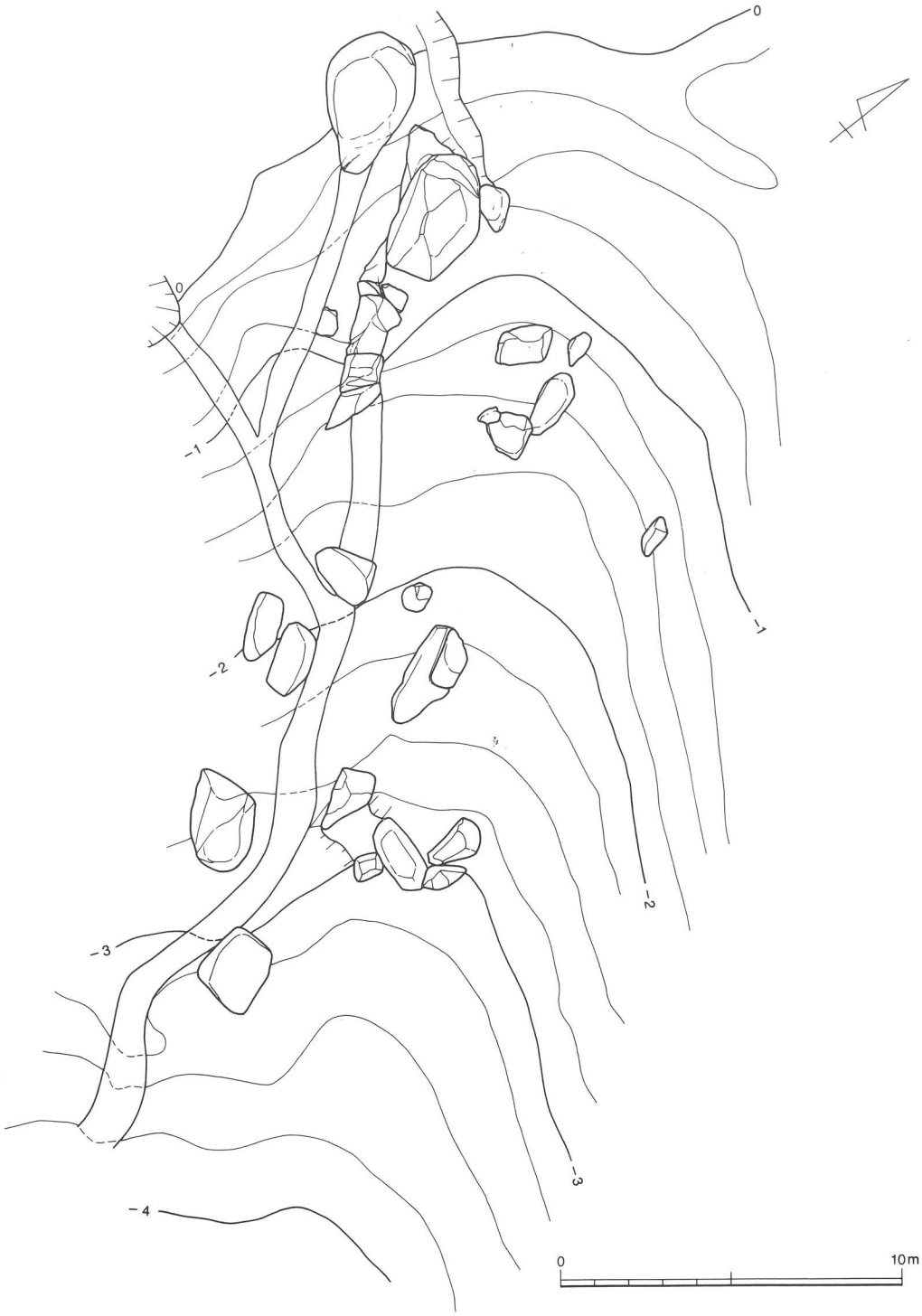
加茂山の尾根上、南端部に位置する採掘場跡で、標高72ｍ前後の地点に位置する。

この地点は、尾根上からの斜面を南から割り取った状態で、南に向かって開口する、13ｍ×７ｍの楕円形の窪みを呈している。この窪みの底には矢穴の痕跡の残る加工石材、露出する壁面に矢穴痕が残り、底部には、屑石や土砂が堆積しているが、現況では尾根上から最深部まで、250㎝前後まで割り込まれている。

露出する周囲の壁面は、矢穴等の加工痕が観察できるが、特に北壁壁面部分では、ほぼ一回に切出した石の規模に相当すると思われる採石時の痕跡をそのまま残している。（図版21上）散乱する加工石材には、矢穴の形状から時期差が見られることから異なる時期に再度採石が続けられている可能性があるため、今後発掘調査で時期の特定には、注意が必要である。

この北側壁面から、窪みの底部はほぼ水平となり南に向かい、この南側開口部付近には捨て

られ、積まれた屑石、土砂を積み上げて、南に延びるスロープ状となっている、このスロープが途中で垂直に落ち、ＫＡ－27地点とつながっている。（図版20下）



第15図　加茂山No16地点地形測量図

第16図　加茂山No26地点地形測量図

V. 採 石 道 具

以下に紹介し、図化した道具は高砂市域で操業していた石屋（石工）の道具である。古墳時代の技術を継承したものではない。しかし、現在継続されず、その技術が廃れようとしている点で資料化することは意義深いものと考えられる。

道具類は大枠で基本的に江戸時代から第二次世界大戦前までの道具と考えられる。ただ、一部のノミ、ヤには戦後のものが含まれている。第二次世界大戦前であろうが、黒色鉱山火薬導入前までの可能性が高い。黒色鉱山火薬は、高砂では大正年間に使用されはじめたとされている。すなわち江戸末期から大正期の道具と考えて大過ないものと思われる。

石屋の道具には、作業工程からヤマカタの道具とマチカタの道具とがある。前者は、採石現場での石の切り出し、一定の規格に応じた原材料の調整の作業で使用するもので、後者は建築材等に加工し、製品として調整を行う工程で使用するものをさす。戦前までは、この両者は明確に分化されていたが、戦後これらの作業は同じ現場で一環して行われる採石場が大半である。今回、ここで取り上げる採石道具類は、ヤマカタの石屋が使用していたものである。

ヤマカタの石屋が行う採石の工程を示すと次のとおりである。

岩盤から、石を切り出す作業をオオワリ・タネダシと呼んでいる。採石を行う山塊には、生成に起因する節理面が無数に残っている。この節理面を利用して、石を割り出していく。これらの節理面を総称して“キズ”と呼んでいる。これらの節理面のうち、垂直方向に走る節理面を“タテ（キズ）”、水平方向に走る節理を“スワリ（キズ）”と呼んでいる。また、この節理面の状態が緊密なものをズラ・ズラキズと呼ぶ。

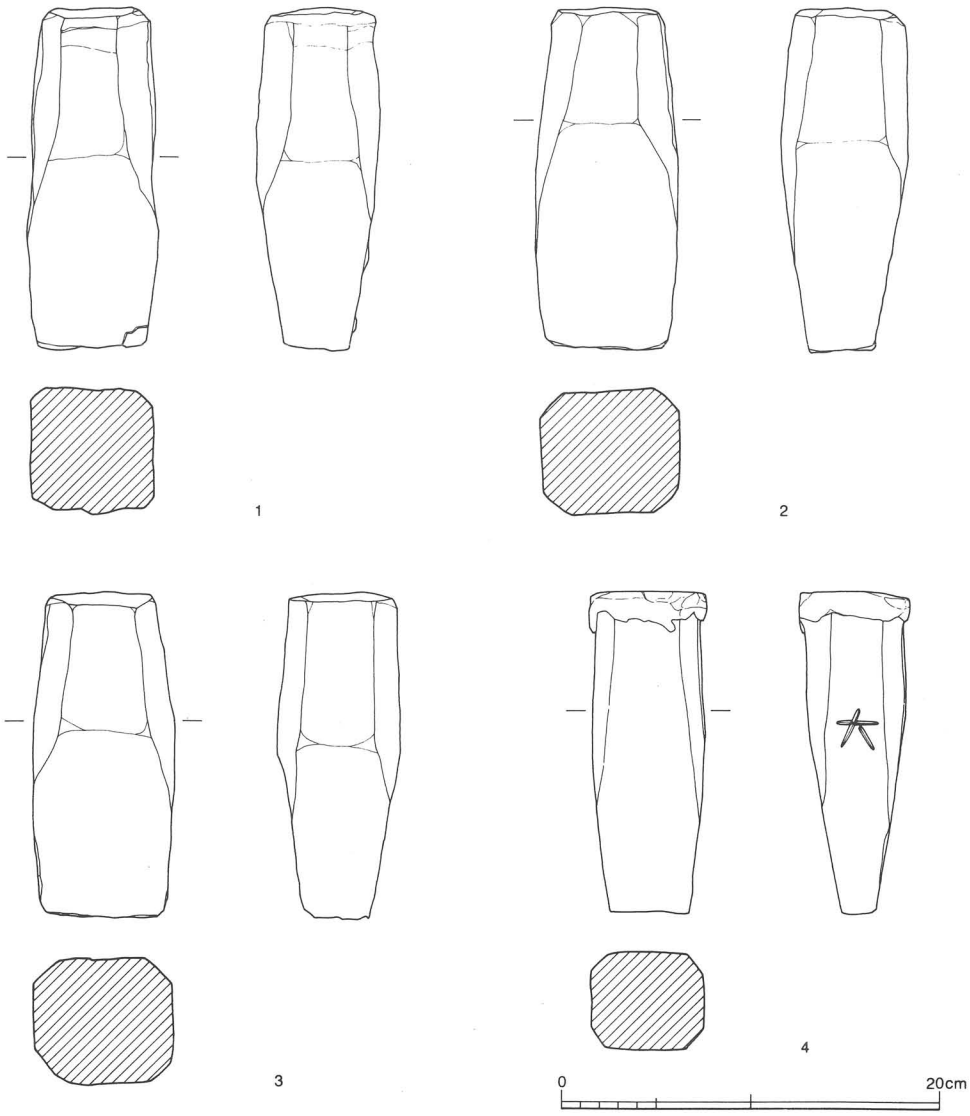
オオワリ作業時には、この節理の方向・強弱を見極めることが石を切り出すために重要であり、熟練を要する。(図版７．上・下）

(1) **クチアケ・ヤバトリ**

切り出す地点を見定め、表土を剝ぎ、矢穴を開ける場所を設定する。次に設定した場所のキズに沿って矢穴を掘るための準備として行うもので、節理面に対して均一に力がかかるように一寸～一寸五分程度の平坦面をヒラノミ（クチキリノミ）で矢穴を開ける部分を削り取る。これらの作業を前者をクチアケ、後者をヤバトリと称している。

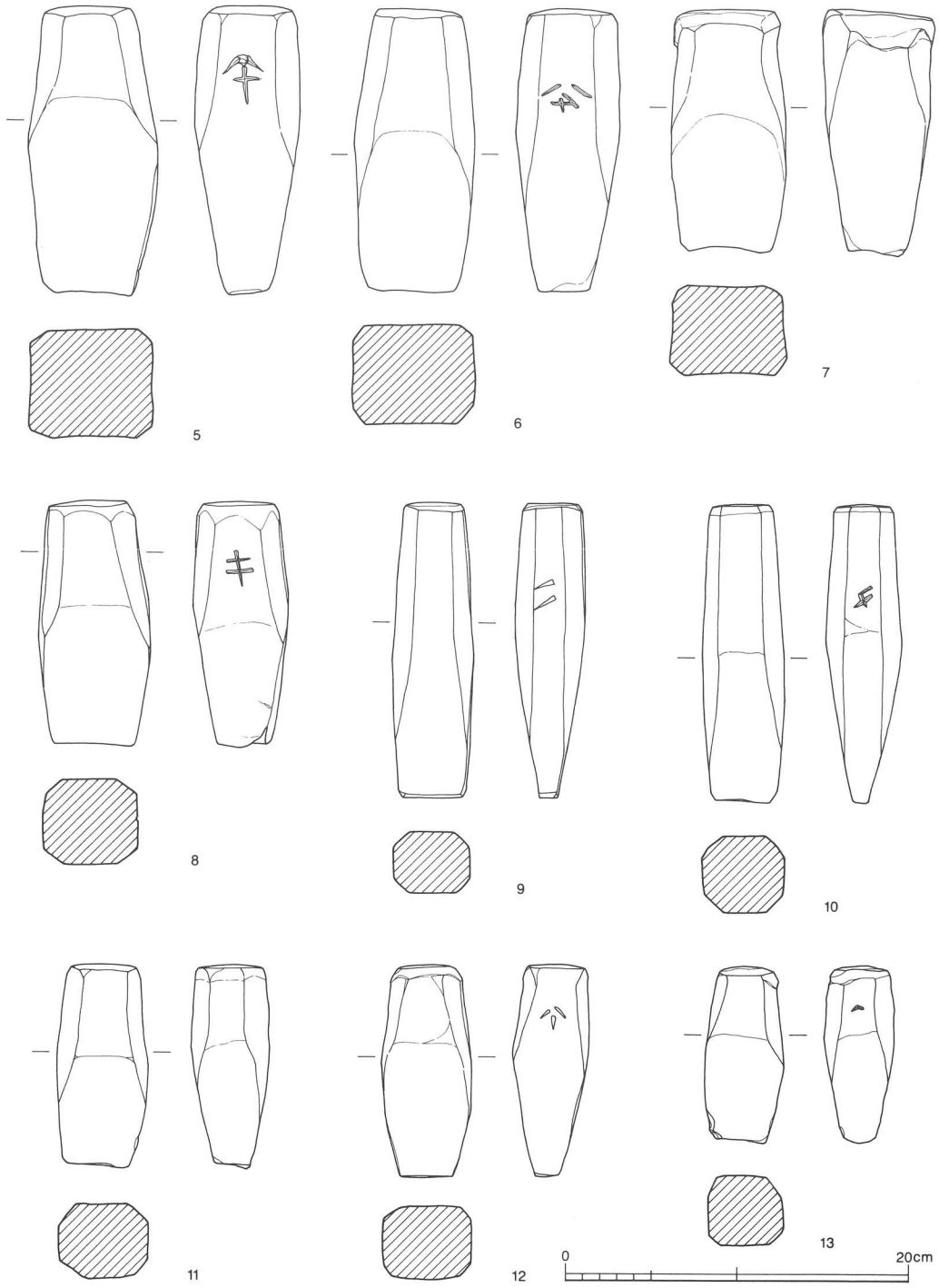
(2) **ヤアナホリ**

矢穴列を設定した箇所に、矢穴を掘る。矢穴の規模・数については、切り離す石の大きさ・節理面（キズ）の状態で異なる。矢穴の開口・整形にはサキノミを用いて矩形に彫る。矢穴底部の整形にはテッカを用い、最後の仕上げとして穴の底は節理面に直接力がかかるよう、これに沿ってソコウチで傷を入れる。１人の職人が中矢程度の矢穴を掘るのに１日に７枚が標準と言う。



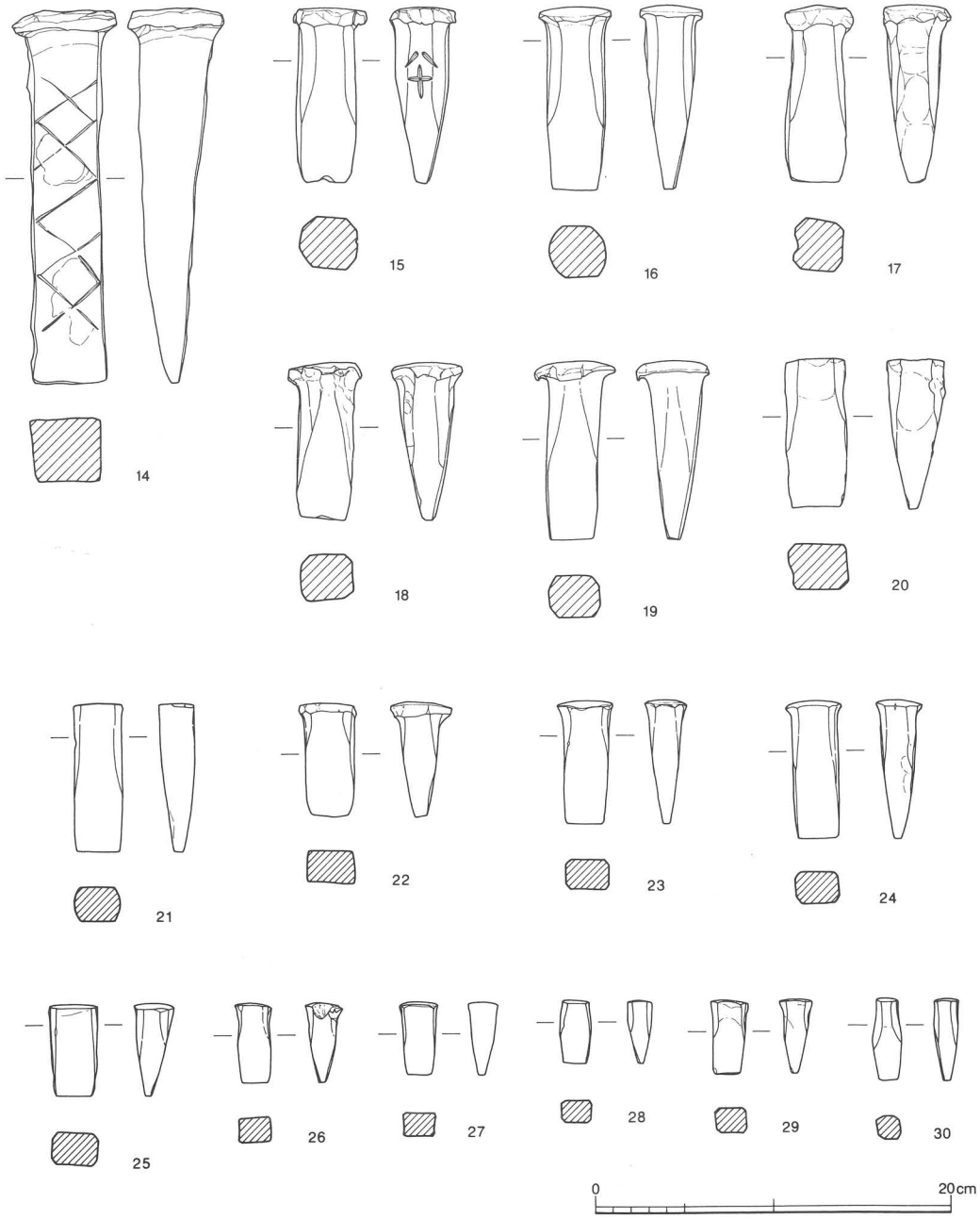
オンビキ（1～4）

第17図　採石道具実測図(1)



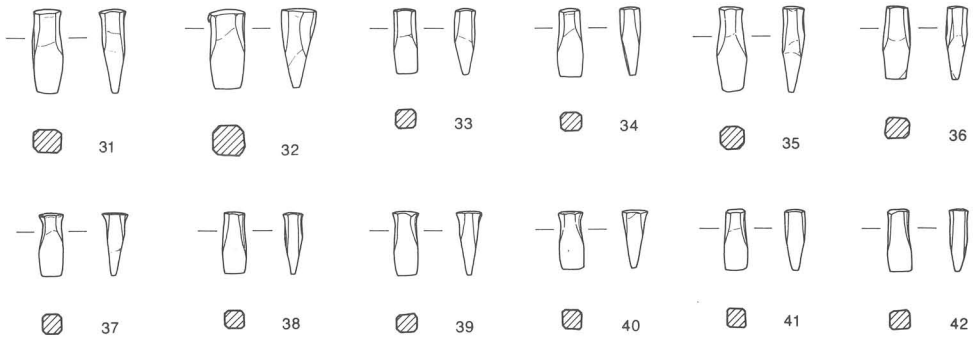
オオヤ(５～８)　寸二(９・10)
中　矢(11～13)

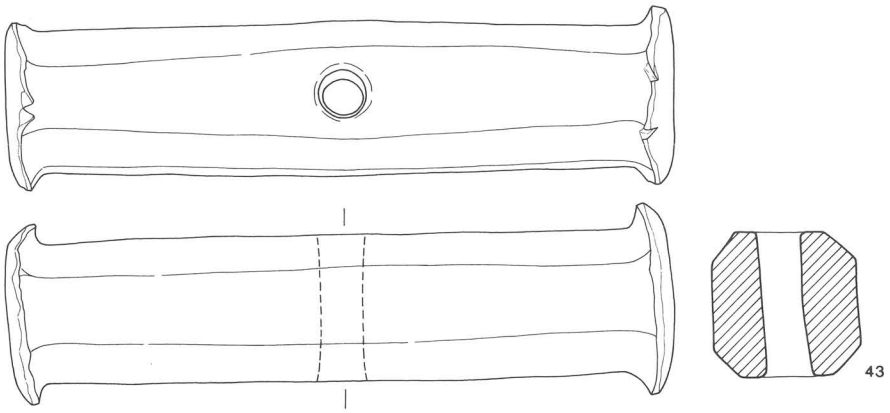
第18図　採石道具実測図(2)

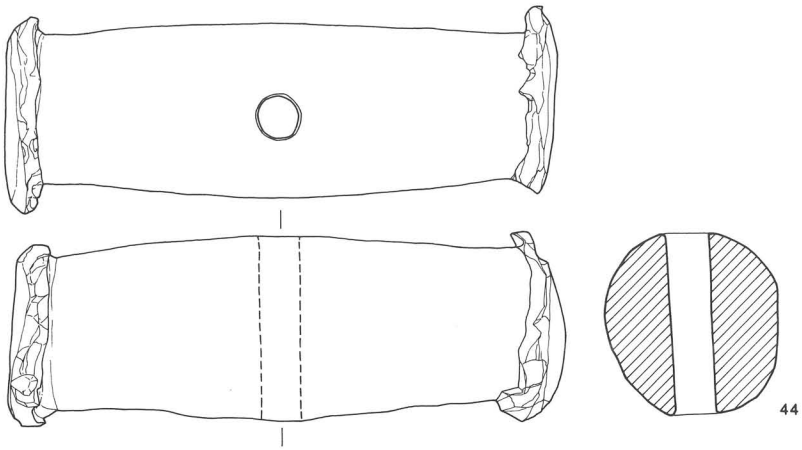


ハラシヤ(14)　一　寸(15～24)
トビヤ(25～27)　コマヤ(28～30)

第19図　採石道具実測図(3)

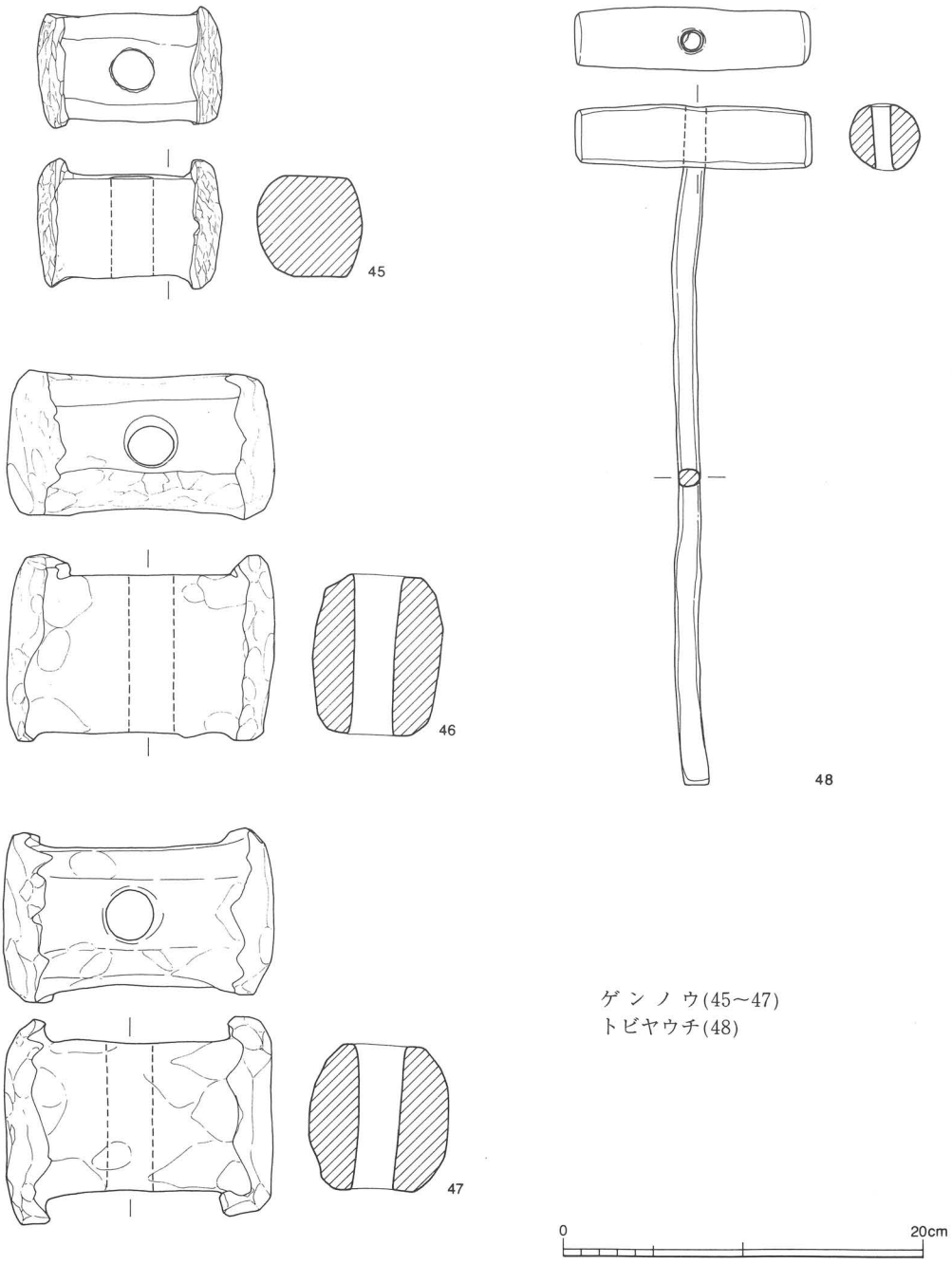




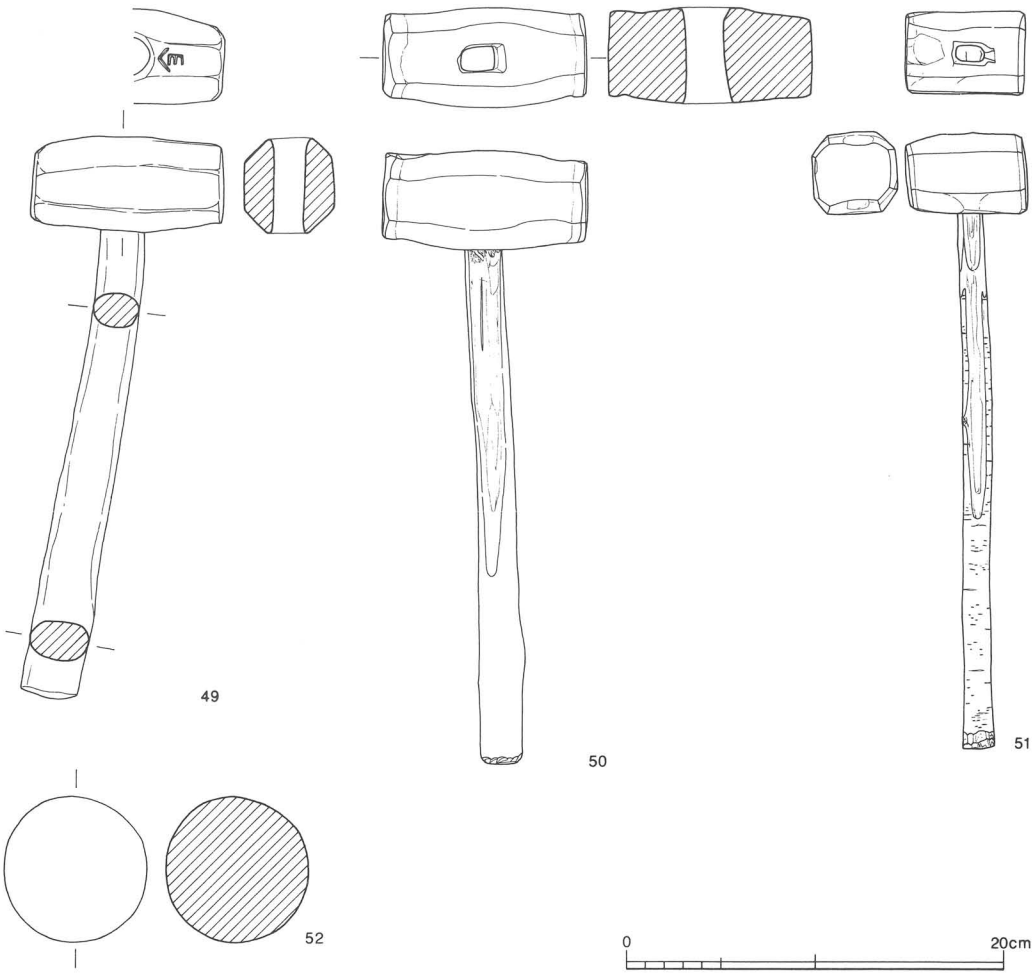


マメヤ(31～42)
オオゲンノウ(43・44)

第20図　採石道具実測図(4)



第21図　採石道具実測図(5)

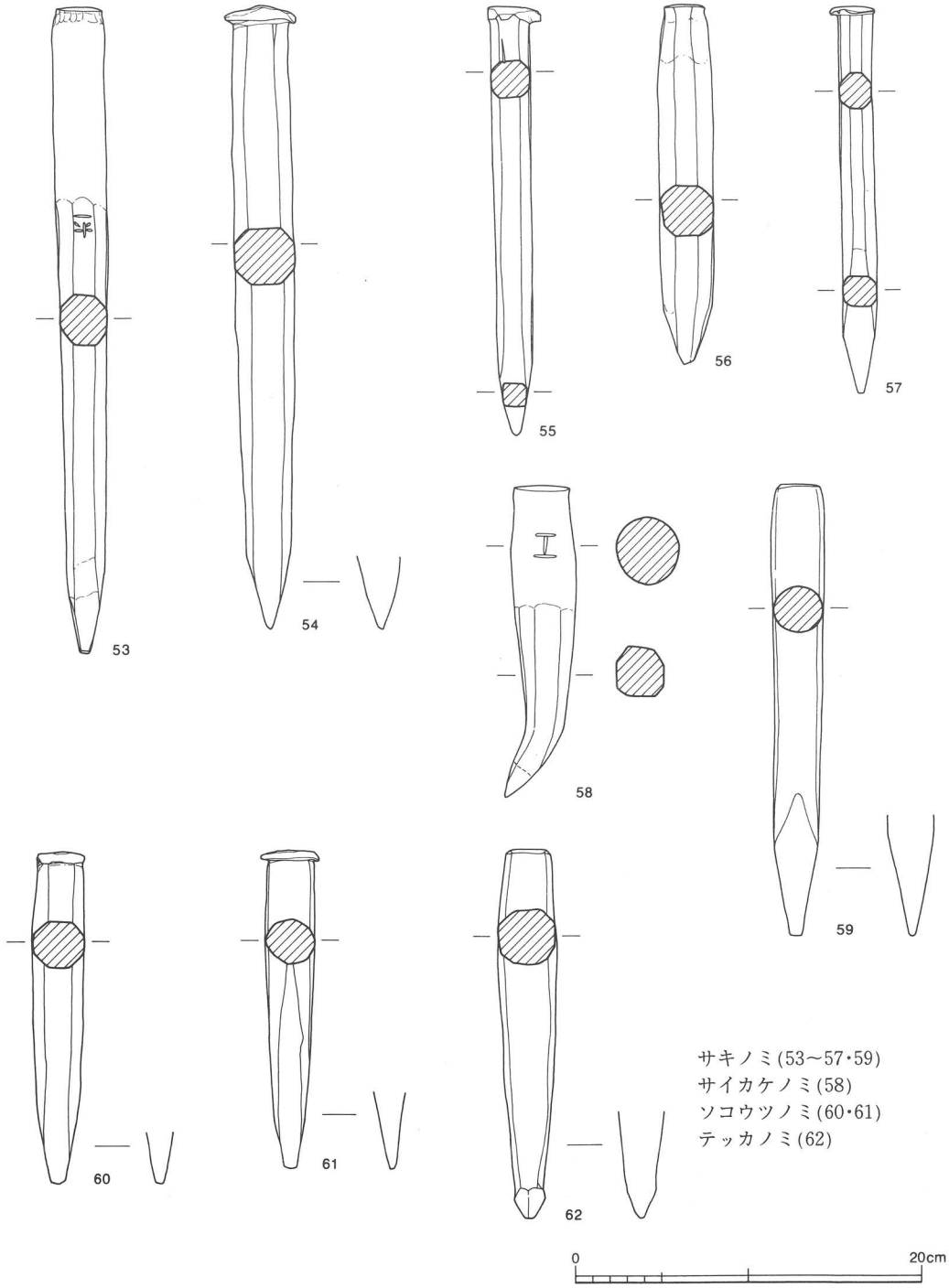


コヅチ(49・50)
コマヤタタキ(51)

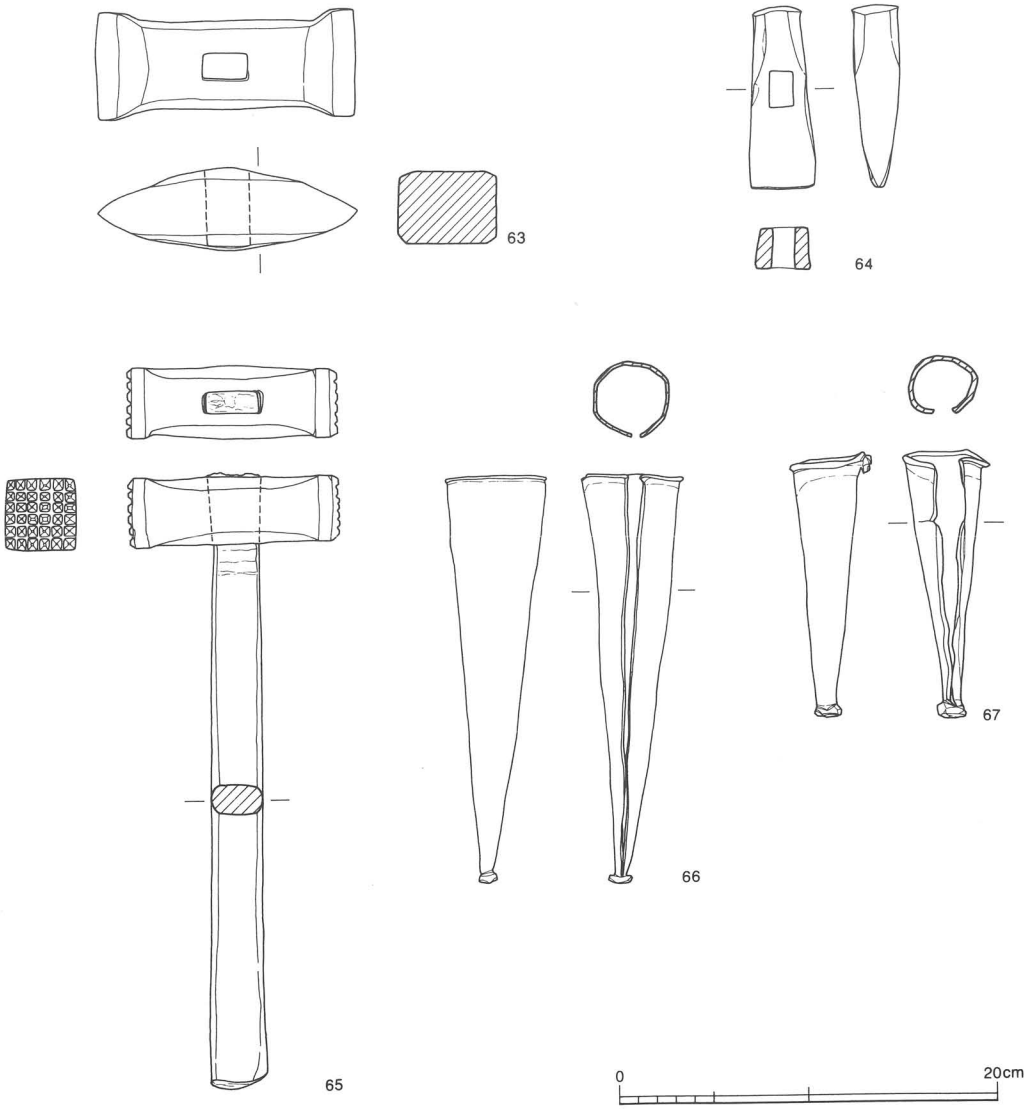
第22図　採石道具実測図(6)

(3) ヤウチ

掘った矢穴にヤ（矢・矢鉄）をゲンノウで打ち入れ石を割る。叩き方は、各矢に力が均等にかかるよう打ち込んだ。100回叩いて一寸程度入ったと言い、これを目安に交代した。

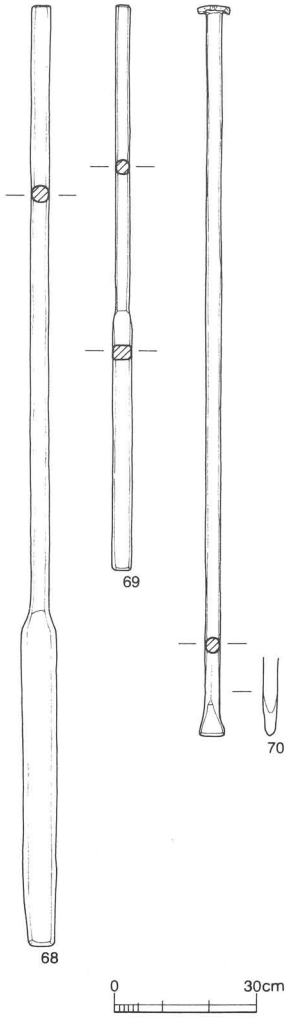


第23図　採石道具実測図(7)



ハゲンノウ(63・64)
ビシャン(65)
カネヅツ(66・67)

第24図　採石道具実測図(8)



中デコ(68)
小デコ(69)
ハッパノミ(70)

第25図　採石道具実測図(9)

(4)　テコオシ

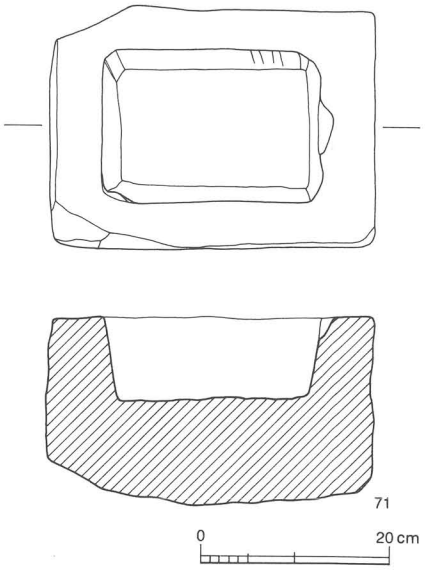
岩盤から切り離した石を取り出す工程を指す。切り離した石材の規模に応じて大デコ・中デコなどのテコを使用した。伊保山では、一人親方の零細な丁場（採掘場）が多いため、人手がかかるこの作業は、近隣の丁場から加勢を頼んだ（これを普請と呼んでいる）。また、岩盤から切り離した石材の隙間が狭いような場合には、ハラシヤを利用して隙間を広げる。

切り出した石は、用いる用材に応じてチュウヤ～マメヤの矢を使用して、アラワリ～コワリの作業を行う。間知石（ケンチイシ）などの小割りには、昭和初期からトビヤを利用している。コワリした用材の整形は、ハゲンノウで石の凸部を削り取ったり、コヤスケで形を整え、ヒラノミ・ビシャン等で表面を仕上げる。

石屋の道具には、大別して①矢を叩くものであるゲンノウの種類、②石を割るための矢の種類、③矢穴を開けるための準備や仕上げ加工のためのノミの種類、④その他に分けられよう。

①ゲンノウには大ゲンノウと中ゲンノウがある。その中に先端部を焼き入れしてある生大ゲンノウと焼き入れをしてない大ゲンノウがある。焼き入れをすると硬度が増すので、矢との関係(消耗度などの)から時期により変化している。大まかにオオヤが貴重品である戦前までは生ゲンノウが主流であった。打撃した後の状況から柔らかい方を「まくれる」と表現していたようである。大ゲンノウは八貫の重さがあったこたから「八貫」とも呼ばれていたようである。中ゲンノウは約四貫の重さが多い。

ハゲンノウ(63・64)は加工用・仕上用のゲンノウで、石の凸部を削り取ったり、粗仕上げにも使用している。セットウ・コマウチゲンノウ(49)・コヅチ(51)は、各々小形の矢（コマヤ・マメヤなど）を打つのに使ったものである。セットウは、ノミを叩くのに用いた。



ミズイレ

第26図　採石道具実測図⑽

ゲンノウすべての柄については、高砂ではカナメを主にグミ・エンジの木を使用していた。硬いが柔軟性がある性格のため、ゲンノウの柄に適していたようである。

ビシャン(65)は仕上げ用のもので、ビシャンによる仕上げをビシャン仕上げと呼び、石の面を均一・滑らかにするためのものである。ただし、この作業を行うと風化しやすくなるといわれている。現在では、動力を用いるようになっている。

②矢は用途・大きさから、オンビキ(1～4)・オオヤ(大矢、二寸)(5～8)・寸二(9・10)・中矢(11～13)・一寸(15～24)・コマヤ(小矢)(28～30)・マメヤ(豆矢)(31～42)に分けられる。大小はあるが、基本的に形状は同じである。頭を平滑にし打力を有効的に吸収し、最大幅を長さの中央部に持っている。コマヤ・マメヤは、寸物の「のべ石」割用として主に使用されていた。

これらと違う性格を持つものに、ハラシヤ(14)がある。各種の矢で開けた隙間を広げるためのもので、他の矢より長いのが特徴である。図化したものは、スベリ止めとして斜交するように刻みが見られる。中央部に最大幅を持たず、頭部に最大幅を持つことも他と大きく異なっている。

矢を打ち込む行為を「矢打」と呼び、節理の状態を見ながら、順次、矢穴に均等に力がかかるよう打ち込んだ。また、矢穴は戦前で、オオヤなら２～３枚、中矢なら７枚程度１日で彫るのが１人前と言われていた。

③ノミには、矢穴を掘るためのノミと加工仕上げ用のノミとに大別される。矢穴を掘るためのノミとしてはサキノミ(53～59)とソコウチ(60･61)がある。サキノミはクチキリノミ・ヒラノミとも呼び、粗掘りに使うものである。ソコウチは石工が石材の節理面を読み取り、その中心線に傷を付けるものと、サキノミによる粗彫りののち、底部分を打つ２つの作業がある。サキノミは、刃先が四角または六角になり尖っている。ヤバトリなどの作業にも利用する。ヒラノミ(58)は刃先がやや平たくなっている。テッカ(62)は刃先が一文字となっており、やや厚みを持つ。特殊なサキノミとしてサイカケノミ(58)がある。先端部に鋼を焼き入れたものである。伊保山採石場から１点出土している。ソコウチは、刃先が尖り一文字となっており、矢穴の底部が節理面に対して有効に力が走るよう、節理に沿って傷を入れる。

サキノミを中心に丁場でノミを修理するための道具としてカネヅツ(66･67)がある。戦前まで、石工が自分で補修していたもので、先端部を焼き直す際に頭部を挟む道具である。また、補修道具として焼き直す時に水入れするための容器として水入れ(71)がある。その他にフイゴバサミなどの道具もある。

④その他の道具としては、切り取った石材を動かす道具としてテコ(68･69)がある。大・中・小に分けられる。また、黒色鉱山火薬を使用するための穴を開けるハッパノミ(70)もある。現在のコンプレッサーに相当するものである。

ハッパとは、発破作業を指すが、単純に岩石を破壊するためのものではなく、オオワリ等の作業には、節理面に対して力をかけ、石を割るのを目的としており、現在でも黒色鉱山火薬を使用している。高砂・伊保山での丁場では、大正年間頃から、始まったとされる。

作業には、二人が一組となり、一人がゲンノウを叩き、ノミを持つ者は、一打ち毎に刃先を回転させ、火薬を仕込む穴を掘り、火薬を詰める。

これらの道具を使って、石材の切り出し・加工を行うわけであるが、特にオオヤなど貴重品は数が少なく、貸し借りも行われていたようである。そのためにも道具に刻印をしるしているようである。

◆

石屋の作業工程等の聞き取りについては、次の方々にご協力いただきました。

石原茂次　大正９年２月14日生　(伊保)

野々村熟一　大正９年11月30日生　(生石)

中西文治　明治45年４月１日生　(米田・塩市)

道具に関しては、次の方々から資料提供・実測の便宜を図っていただきました。

石原茂次・井村恵一・塩谷　保・伊奈豊次・野々村熟一・垣内康勇

松下蔵和・野々村繁太郎

収集した道具類については、米田町　宝殿石材事業共同組合事務所内で保管している。

Ⅵ. 市内の石棺

分布調査では、採石場の分布だけでなく、その加工技術の復元のため、石材道具の収集、聞き取り調査など民俗学的な手法での調査も実施した。

これらの調査と並行して、石材加工技術の具体的な復元のための資料とするため、時期の特定できる資料を収集することを目的として、龍山を中心とした地域での石棺、石室材に残る加工痕等についても、調査を実施中である。

(1) 石宝殿〔高砂市阿弥陀町生石〕（図版３・４）

石宝殿は、宝殿山東斜面の中腹、標高42～50ｍ付近に、流紋岩質（熔結）凝灰岩で構成される山塊を加工して造り出した石造物で、現在は生石神社の御神体とされている。この石宝殿に関しては、『播磨国風土記』を初見として、江戸時代には「日本三奇」のひとつとして多くの書物にも紹介されている。

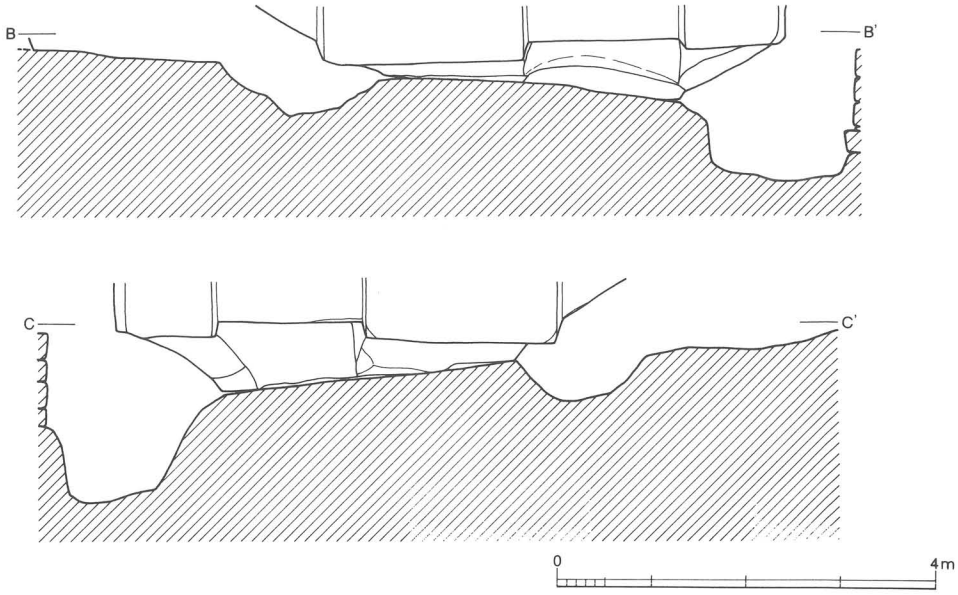
この石造物の性格をめぐっての研究は、多くの研究者が各論を展開している。これらの研究の基本的な文献として、1968年の調査をもとにした詳細な実測図を紹介した、西谷真治「石宝殿」（『天理大学学報』第59集）がある。ここでは、この石造物の性格等についてではなく、従来水が溜まった状態であったために紹介されることのなかった石造物基部に残された加工技術の痕跡について紹介する。

1980年８月、生石神社及び総代会、市消防本部の協力により、石造物周辺の窪みに溜まった水の20年ぶりの水替えに並行して、清掃の後の数時間、基底部の写真撮影、一部実測を実施することができた。

石造物は、岩盤を掘り込みつくり出した状態で、本体基部周囲はさらに掘り込まれ、掘り込みの底部は、溝状を呈している。便宜上、各溝は石造物の背面部（突起部）の部分を西とし、正面部（拝殿側）を東とする。背面部（突起部）の掘込み溝の底部は、幅140～160㎝の断面Ｕ字状の溝となり、正面部（拝殿部）では、幅150～160㎝の逆台形状となっている、特に北側部分では、掘り方上部で、幅80㎝、深さ50㎝、箱掘り状の溝が掘られ、溝の底部は、背面部から正面部へ急な傾斜が見られる。（図版５）

溝の底部は、任意の基準から北西隅では－62㎝、南西隅では－55㎝、北東隅では－174㎝、南東隅では－62㎝を測る。北東隅が最も深くなっているが、この溝の東側外縁部は溝の底部よりも30～80㎝高く、排水溝などの加工は特に見られないので、十分な排水機能を持ったものではない。清掃後の排水時には、この北東隅の部分に水が集るため、ここからポンプで排水した。

この外縁上（拝殿部）には、延石が４、５段積まれ、現在では掘込み部の溝に水が溜った状態だが、東側の溝、外縁最上端のレベル高でも、背面部掘込み溝の最深部より30～40㎝程度低



第27図　石宝殿　基部実測図

く、また石造物の基部が面する主要節理面の上面は、現在の拝殿周辺までかなりの傾斜で下がっていること、外縁最上端に積まれている延石が加工状況から古墳時代に遡るものではないことなどから、当初から周囲に意図的に水を溜めていたものではないと思われる。

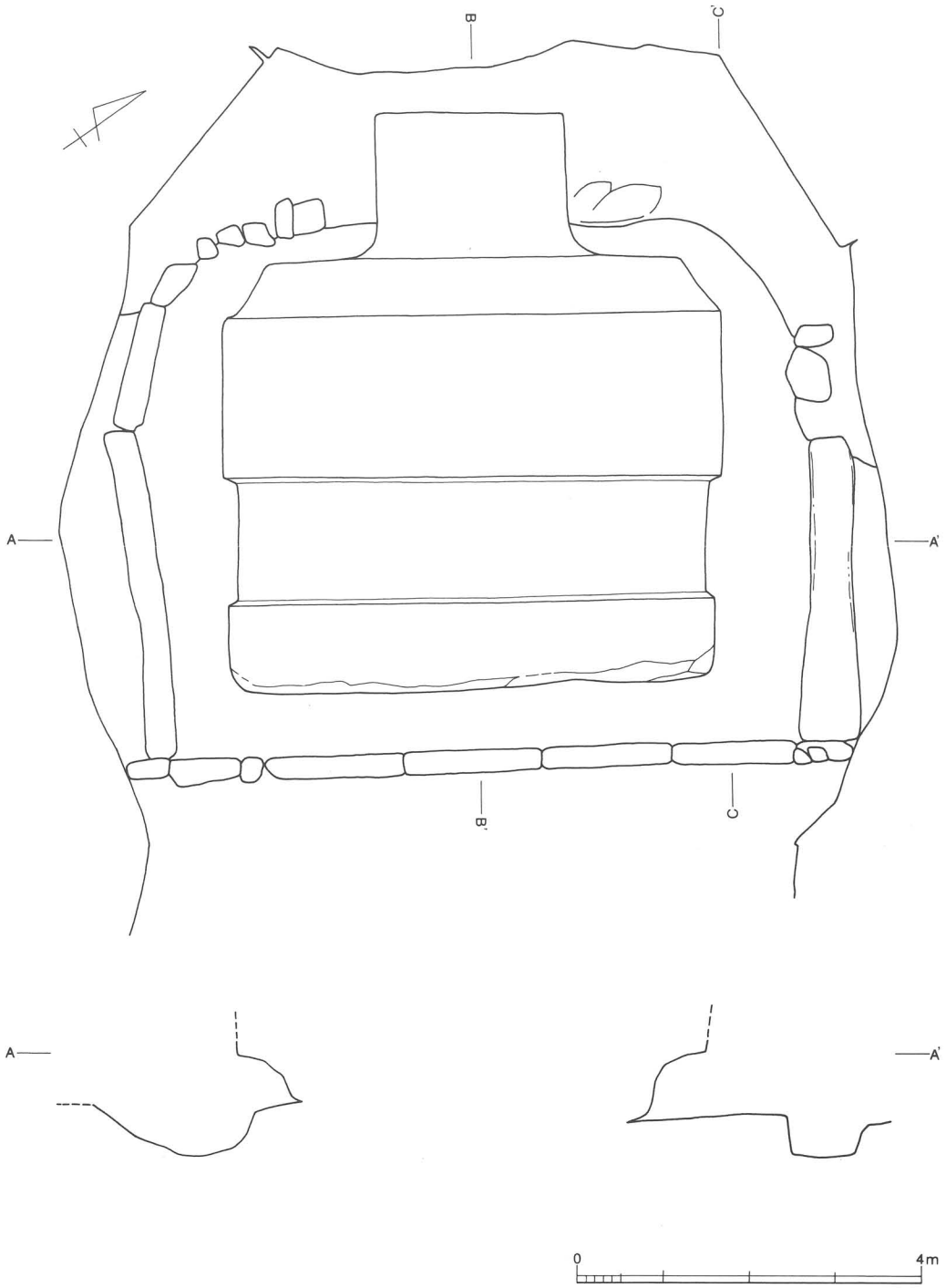
石造物本体と基盤部との間には、発達した顕著な節理面がある。この節理面を挟んで本体部と基盤部の状態が“切れている”ことは、突起部側、西側壁下部の状態を観察することによっても理解できる。

この主となる節理面を利用すれば、本体部が浮石状に見える、この加工も比較的容易にクサビ状の加工ができ、切り離し作業が可能となる（この節理面を石工は、スワリキズと呼んでいる）。

この主要節理面以外にも、様々な方向や強弱をもった節理面が、この場所でも存在し、石造物本体にも見られる。。

石造物本体の造り出し作業は、この主となる節理面を中心に、計画したものと考えられる、本体基部及び周辺の岩盤に残る加工痕を観察すると、発達した顕著な節理面の割り取り部に残る加工痕と、節理面とは関係なく石を割り取らざるをえなかった部分に関しては、当然ながら、割り取り方法が異なっている事が確認できる。

大割り部分の痕跡は、突起部側、北側の崖壁部分の中段付近で観察される。この節理は垂直方向の節理を利用しての、割り取った跡と思われる。不整形な幅５～７㎝、深さ７～８㎝の矢穴状の加工痕が壁面に残っている。（図版35下）



第28図　石宝殿　復原図

（前掲西谷真治「石宝殿」に加筆）

実際には、何等かの工具は使用しているが、道具の力の方向が節理面に対して直交する形で力を加えて、石を割っているために、加工痕は残されていない。

突起部下、西側の溝の肩部分には、発達した節理面がないため、この溝を掘るために、ノミ状工具で作業を始めている、幅2.5～3.0㎝、長さ10～12㎝前後のノミ跡が5～10㎝間隔で掘られ、ノミをずらしながら溝の肩部から底へと削っていった状況が見られる。（図版6下）

(2) **天磐舟**〔高砂市曽根町　高砂市教育センター内所在〕（図版36）

現在、高砂市教育センター前庭に放置されているが、旧位置は、伊保山山頂から東南に派生する尾根の南斜面、標高60～70ｍの地点に、天井部を下にした状態で置かれていた。(1)

採石作業がこの石棺の位置する地点まで及ぶところから、昭和38年5月、石原茂次、船津重次各氏の尽力により、伊保山より降ろされ、一時期高砂市役所前庭に、その後現在の位置に移されている。

この石棺が少なくとも江戸時代以降、この状態であったことが江戸時代に刊行された『播磨名所巡覧図絵』などに記されていることにより確認できる。

現在では、伊保山全体が採石により旧状を変えてしまっているため、消滅してしまっている古墳も数多くあるので該当する古墳が消滅している可能性もあるが、現存する伊保山周辺の古墳では規模、年代等石棺と合致する古墳はなく、これに伴うような伝承もみられない。(2)

また、棺身も周辺に見られないこと、伊保山山中では石棺の未完成品と推定される石造品が存在していた(3)ことなどから搬出途中のものとも考えられている。

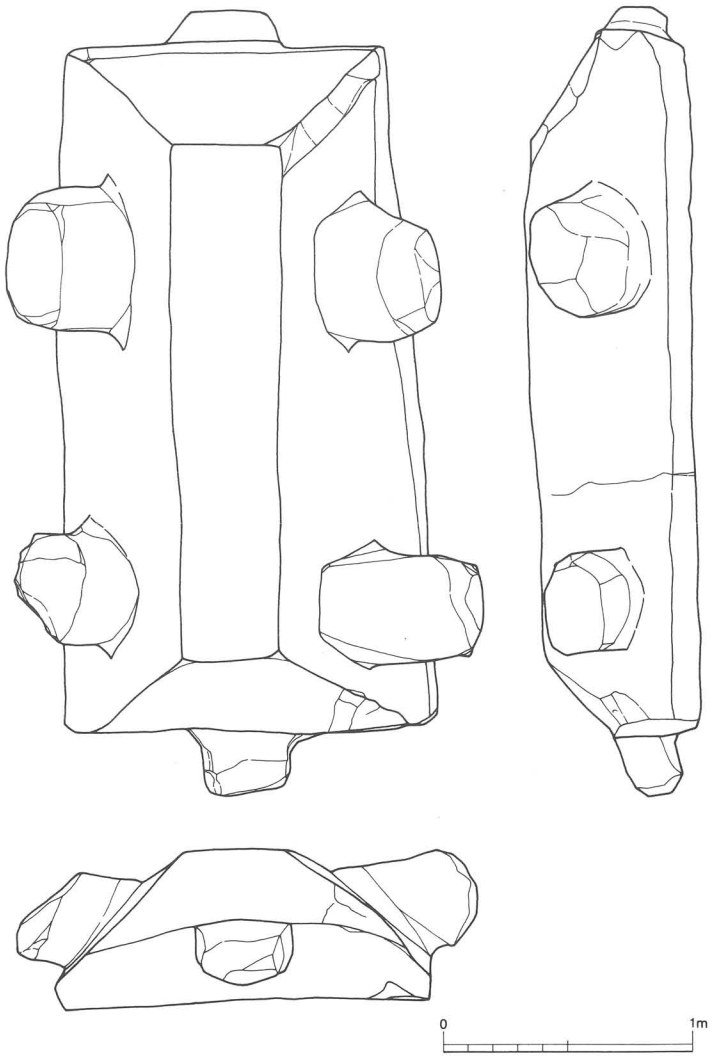
石棺の位置していた、斜面付近には矢穴の残る採石場跡（ＩＨ－No14地点）や、土師器、須恵器などの散布する地点が確認されている。

石棺の移動時に立ち会われた舩津氏によれば、石棺を移動した後、周辺を精査したが、土器一片すら採集できなかったとのことで、石棺の移動時期を示すものは見られない。この石棺は、家形石棺の蓋石で、短辺部両端には、屋根からの傾斜面から造り出された、各1個のいわゆる縄掛突起が、広辺部両端には、斜辺から上方に突出する各2個の断面が、楕円隅丸を呈する、不整形な突起部を有す突起部の先端は、頂部平坦面に近接する。

石棺は、一枚石を刳り抜いて造られており、法量は、長さ、275㎝（突起部を含めると312㎝）、幅148㎝、厚さ56㎝を測り、頂部には、長さ240㎝、幅45㎝の平坦面を造っている。内部には、40～50㎝の平坦面を残し、15㎝前後の深さに掘り込まれている。

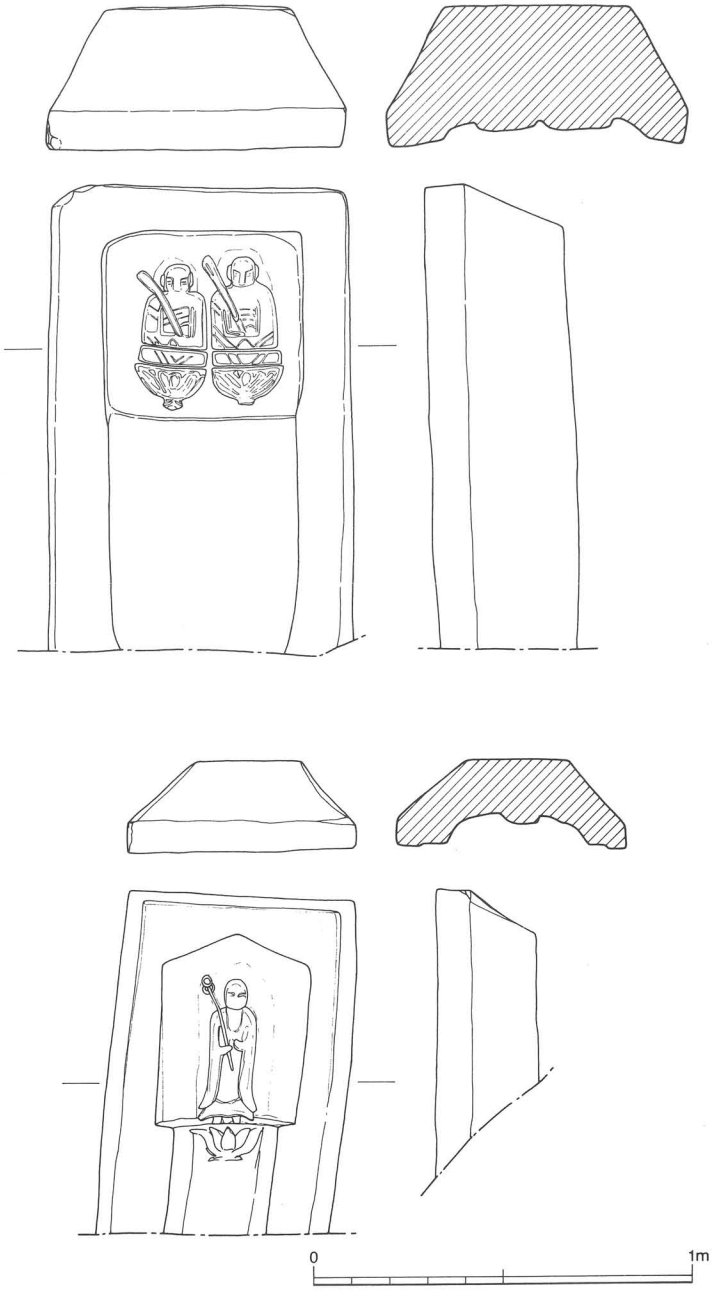
内外面とも経年変化による剝離、風化が進んでいるが、保存状態の良好な部分では、調整痕と推定される加工痕が観察できる。

短辺部の突起周辺では、突起部の削り出し時のものと推定される、先端の尖った工具による連続的な斜方向の削り痕など調整痕を消す作業が行われたことがわかる。（図版36）



第29図　天磐舟実測図

同様の仕上げ調整の作業は、長辺部の斜面の一部にも加工痕を観察することが出来る。このような仕上げ痕は、節理面の状態、石の質、風化程度により加工痕の有無は判別し難いが、小型の家形石棺では見られず、以外の石棺、正蓮寺境内所在石棺では、棺身、蓋の接合面にこの仕上げを見ることが出来る。工具の特定は困難であるが、先端部の剝離状態、線状に残るキズ痕など、ノミ状の工具によるものと考えられる。

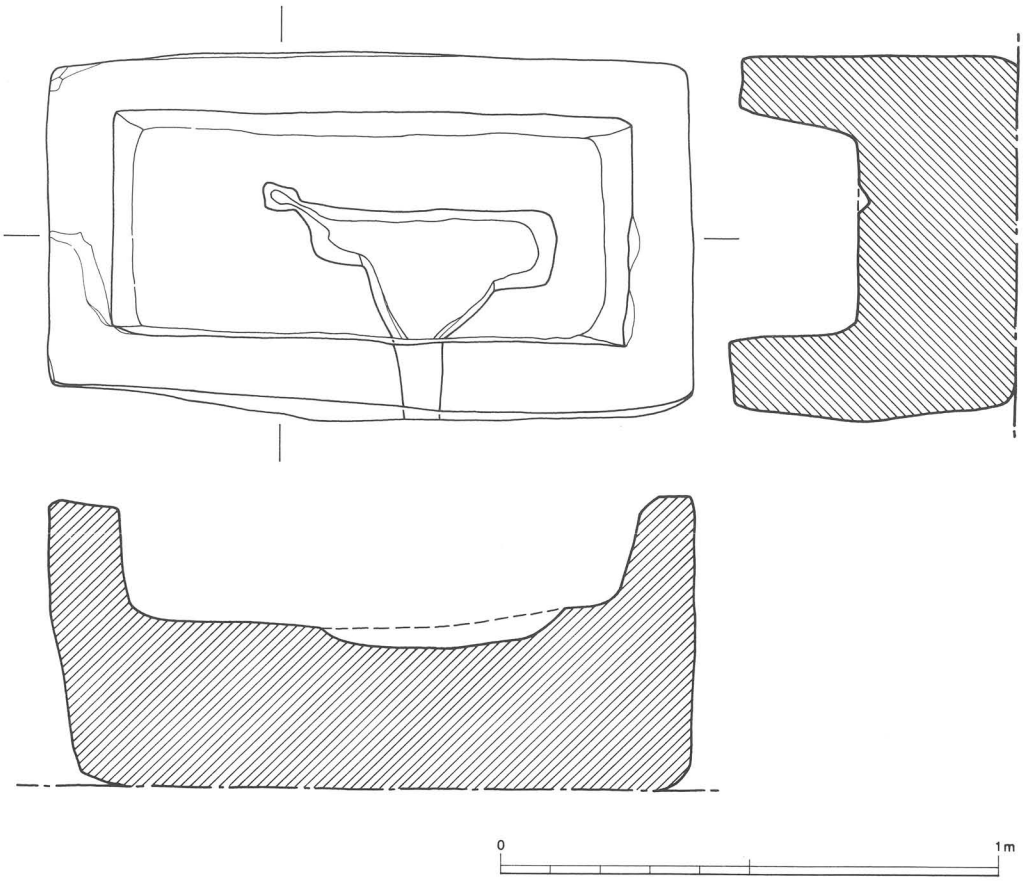


第30図　阿弥陀町所在石棺仏実測図

注 (1) 小暮宰『高砂市史』 伊保編 高砂市教育委員会 1969

(2) 武藤誠「石宝殿」『兵庫県の古社寺と遺跡』 1977

(3) 上田哲也氏の教示による。



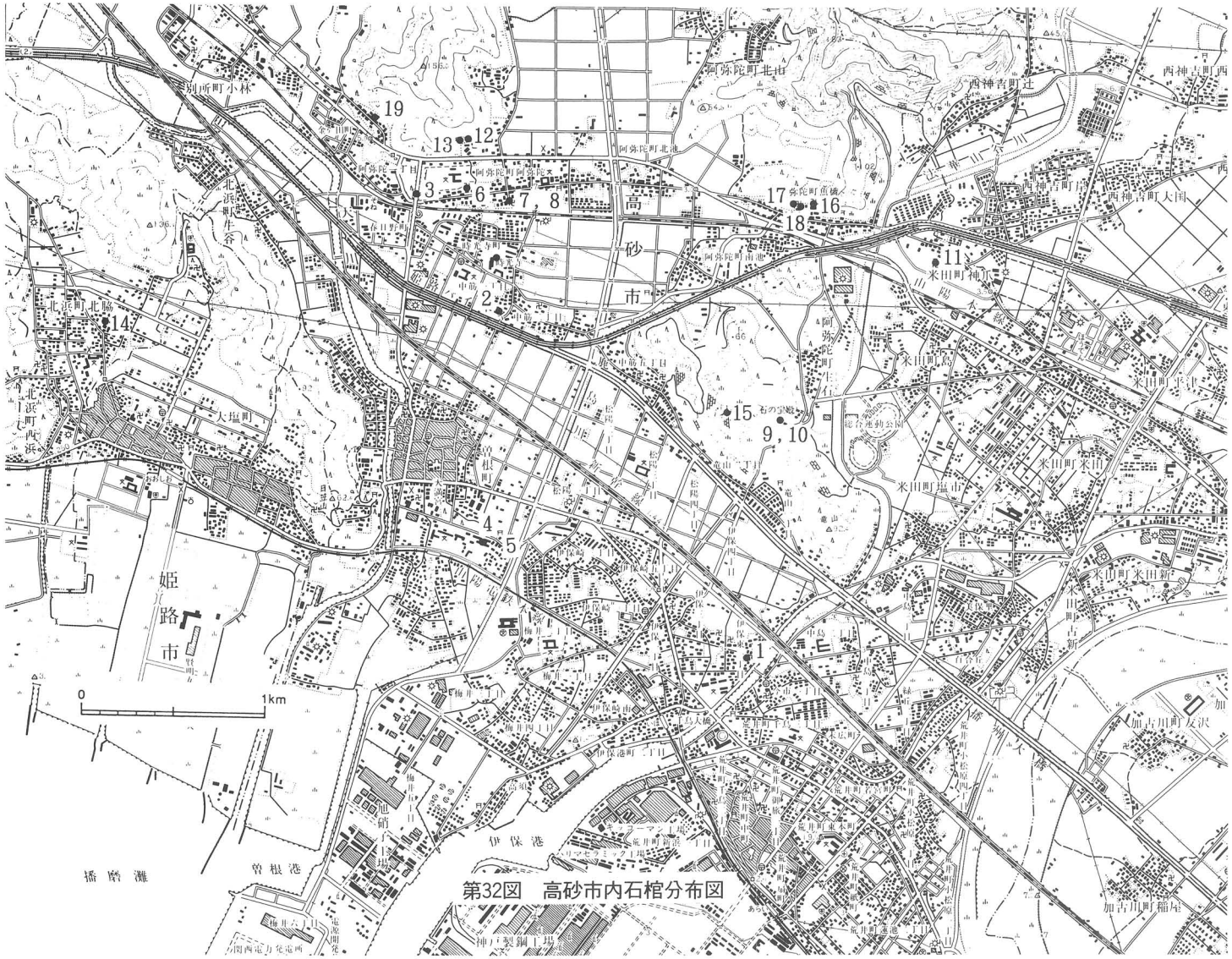
第31図　北浜町西法寺境内所在石棺実測図

(3)　**安楽寺境内所在石棺**〔高砂市阿弥陀町魚橋〕（図版37）

安楽寺境内に、所在する刳抜き式家形石棺身で、手水鉢として転用され、短辺部には、水抜き用の穴が開けられており、内面底部にも若干の手が加えられている。

同寺から北に250ｍの山麓部には、魚橋古墳群が位置しているが、石棺の出土地、移設の経緯は不明である。

法量は、全長123.5㎝、幅67.3㎝、厚さ45.6㎝、内面の刳抜き部は、長さ97.9㎝、幅48.1㎝、深さ23.2㎝、外面下辺部に幅21.5～23.3㎝、厚さ3.8～4.3㎝の帯状加工を施す。棺蓋と接する平坦部分は表面を平滑にし、調整痕を消す作業が行われている。また内面短辺部側では、削り出し時のものと推定される、先端の尖った工具による、幅1.5㎝前後の溝状の、連続的な、加工痕が残る。



第32図　高砂市内石棺分布図

(4) **西法寺境内所在石棺身**〔高砂市北浜町西浜〕（図版38）

西法寺境内に、所在する刳抜き式家形石棺身で、手水鉢として転用され、長辺部には、水抜き用の穴が開けられており、内面底部にも排水用の不整形な掘り込みが見られる。

同寺から北に500ｍの山麓部には、北浜古墳群が位置しているが、石棺の出土地、移設の経緯は不明である。

法量は、全長126.5㎝、幅70.0㎝、厚さ63.5㎝、棺身の掘り込み21.5㎝を測る。

加工痕は、内外面で観察できる。内面の保存状態のよい部分では、削り出し時の加工痕と丁寧なノミ状工具による、連続的な仕上げ調整の加工痕が残る。

外面では、東西の仕上げの状態が異なっているが、石棺の置かれた向きによる風化の程度による仕上げ痕の有無か、どうかは判別し難いが、東面部分は、西面がほぼ垂直に削られ、細かな整形痕が一部残るのとは異なり、やや胴張り状になっている面の下部、20㎝前後に大きな剝離痕が残る。

この加工痕は、先端の尖った工具によるもので、幅２～３㎝前後、長さ10～15㎝の溝状のものと、これに伴う剝離痕である。後世の手による可能性もあるが、底部から側面にかけて削られており、底部の状況が確認できないため不明であるが、この石棺素材の持つ節理面を利用した、企画段階の割り痕である可能性もある。

(5) **正蓮寺境内所在石棺**〔高砂市阿弥陀町魚橋〕（図版39・40）

安楽寺から西へ100ｍ、正蓮寺境内に、所在する刳抜き式家形石棺の蓋と身である。現在、蓋は前栽の水入れとして、身は水槽として一部加工され、転用されている。

同寺から北東に300ｍの山麓部には、魚橋古墳群が位置しているが、石棺の出土地、移設の経緯は不明である。

・石棺蓋

刳抜き式の突起をもたないもので、天井部を固定のため埋め込んでいるので頂部は確認できないが、棺身接合部分から緩やかな傾斜面を持ち頂部に続くものと思われる。現況の法量は、全長200.2㎝、幅86.9㎝、厚さ26㎝以上を測る。

棺身と接する、平坦部分は13.3～14.8㎝を測り、旧状の残る部分では、平滑に調整し、光沢を持つ。斜面から棺身部に接する垂直面の表面には、斜辺部から垂直面へと斜め方向の、先端の尖ったノミ状工具による幅１～1.5㎝前後の溝状に残る整形時の痕跡があるが、仕上げの作業も行われている。

・石棺身

刳抜き式の棺身で、全長177.7㎝、幅91.0㎝、厚さ66.4㎝、棺身の掘り込み34.0㎝を測る。

棺身と接する平坦部分は16.0～16.4㎝を測り、風化による剝離が進んでいるが旧状の残る部

分では、平滑に調整し、光沢を持つ。棺身部内外面には、先端の尖ったノミ状工具による調整が行われているが、平坦面同様の丁寧な仕上げの調整痕は見られない。

(6) **谷ノ口遺跡所在石棺蓋**〔高砂市阿弥陀町阿弥陀〕（第30図上・図版41）

経塚山の山麓南斜面、標高20ｍ前後の地点で、確認されている谷ノ口遺跡内に所在する。遺跡には、石棺仏や古墳の石材を利用した石仏、室町の備前焼、土師器などの遺物が広く散布しており、この分布と重なり、後期の古墳も点在する。

石棺は刳抜き式の家形石棺の蓋石で、石棺仏に転用されている。

法量は、下部は地中に埋没しているため、現長で142.7㎝、幅77.5㎝、厚さ37.1㎝、頂部平坦面は、現長57.7㎝、幅50.5㎝を測るが、全長は不明。

内面は、平坦部11.2～12.3㎝を残し、掘り込まれるが、内部に二尊仏が掘られているため、旧状は不明。

風化が進んでいるが、斜面に残る加工痕は、ノミ状工具による調整が行われている。

石棺仏には、文安四年（1447）の銘が刻まれており、1992年の分布調査では、この石棺仏に伴い備前焼の蔵骨器が１点出土している。埋葬施設を伴う石棺仏としては、他に例がなく当時の信仰形態、石棺仏の性格を知る上でも重要な遺跡である。

(7) **阿弥陀18号墳所在石棺蓋**〔高砂市阿弥陀町阿弥陀〕（第30図下・図版42上）

谷ノ口遺跡内に所在する石棺仏から西へ20ｍの地点、阿弥陀18号墳が半壊の状態で現存し、この墳丘上に位置している。

刳抜き式の家形石棺の蓋石で、石棺仏に転用されている。

法量は、下部はコンクリートで固定しているため、現長で80.2㎝、幅63.0㎝、厚さ24.3㎝を測るが全長は不明、左が120㎝以上はある。

内面は、２段の平坦部を造り出しているが、地蔵尊が掘られているため当初のものかは不明だが、１段目の平坦面は、5.8㎝を測る。

屋根部分の稜線の整形には、断面がクサビ状を呈する、先端の尖ったノミ状工具の加工痕を認める。斜面部分にも、同様の工具による加工痕が残る。

谷ノ口遺跡所在石棺蓋の調整痕とは、若干調整の密度が異なっているようにも見えるが、時期差というよりも、風化の度合い、石の材質（同じ竜山石であっても、産出する丁場によって硬度等が異なる）による違いと思われる。

(8) **大日山古墳出土箱式石棺**〔高砂市時光寺町〕（図版42下）

1968年、県道立体交差の工事に伴い調査された古墳で、調査後石室材のみが、時光寺で復元

保存されている。

遺跡は、経塚山の南、通称大日山と呼ばれる標高19ｍの小丘陵上に位置していた。調査の結果、古墳時代前期に比定される箱式石棺を主体とする、径10ｍ前後の円墳である。

石材は、竜山石でも、比較的表面に近い軟質の部分を用いている。

側右部外側部分では、２㎝前後の直線か或いは少し丸みを帯びた刃のノミ状の工具を用いて、石を剝ぎ取る様に割り取っていることが観察できる。

後期の家形石棺の加工痕に見られるような、棺蓋との平坦部分には表面を平滑にする当石棺では、調整痕を消す作業ではなく、割り取った状態で使用している。

第３表　高砂市内石棺一覧表

番号	名　　称	所在地	種　　別	備　　考
1	網　　堂	伊保町	家形石棺蓋石	石棺仏
2		中　　筋	家形石棺蓋石	石棺仏
3	大日山古墳	時光寺町	組合式箱式石棺	
4	天　磐　舟	曾根町	家形石棺蓋石	県指定
5	阿弥陀13号墳	曾根町	家形石棺身	
6	不断寺石棺	阿弥陀町	家形石棺身	
7	地蔵院石棺１	阿弥陀町	家形石棺身	
8	地蔵院石棺２	阿弥陀町	家形石棺身	
9	竜山１号墳	阿弥陀町	家形石棺身	
10	竜山１号墳	阿弥陀町	家形石棺蓋石	
11	覚　正　寺	米田町	家形石棺身	
12	谷ノ口石棺１	阿弥陀町	家形石棺蓋石	石棺仏
13	谷ノ口石棺２	阿弥陀町	家形石棺蓋石	石棺仏・阿弥陀18号墳
14	西法寺石棺	北浜町西浜	家形石棺身	
15	竜山２号墳	伊保町	組合式箱式石棺	消滅
16	安楽寺石棺	阿弥陀町	家形石棺身	
17	正蓮寺石棺１	阿弥陀町	家形石棺蓋石	
18	正蓮寺石棺２	阿弥陀町	家形石棺身	
19	豆　　崎	阿弥陀町	長持形石棺	断片

Ⅶ. おわりに

今回の調査は、龍山に残る採石場跡の一握りの部分についてのみ実施したにすぎない。石工の具体的な作業の聞き取りから始まり、具体的な採石作業の復原、道具の収集など多くの部分を、採石作業を経験された古老の方々にご指導いただき、進めることができた。この具体的な作業の理解なしには、分布調査を進めることは、不可能である。

この調査の取りまとめとしてではなく、途中経過として、調査を通じて理解したこと、今後調査の課題となる点について若干ここに記し報告にかえたい。

今回の調査で年代の比定できる遺物が出土したのは、加茂山16地点の試掘調査に伴うもので加工痕を覆う屑石層中より、中世に比定される土師器が出土している以外は、表土層中から近世の陶器類は採集しているが、積極的に年代を示すものではなく、ほとんどの地点では、遺物は採集していない。

龍山石は、江戸時代、姫路藩の専売であり、藩の許可無く自由には採石、販売できなかった。特殊な例として龍山山麓の塩市村が水害の被害にあい、救済のため村中が藩に採石の許可を願い出た舩津重次氏所蔵の古文書から確認できる。明治に入り、払い下げを受け現在見られるような自由な採石が行われるようになった。

明治時代以降連綿と現在にまで採石作業は続けられている。今回の調査では、多くの人達の協力を得ることができました。特に、石材関係に従事する宝殿石材事業組合の役員の方々および竜山石の文化の会員の方々には今回の調査を支えて戴いた。

今年度の調査成果を踏まえて、次年度以降調査を継続したいと考えている。先に記したように周辺だけでも「長石」「高室石」の石の種類があり、播磨に目を転ずれば多くの石種がある。各地の石材があるが、なかでも家島産の石材は現在でも頻繁に使われている。また、但馬では玄武岩が、丹波では油井石が採取されている。

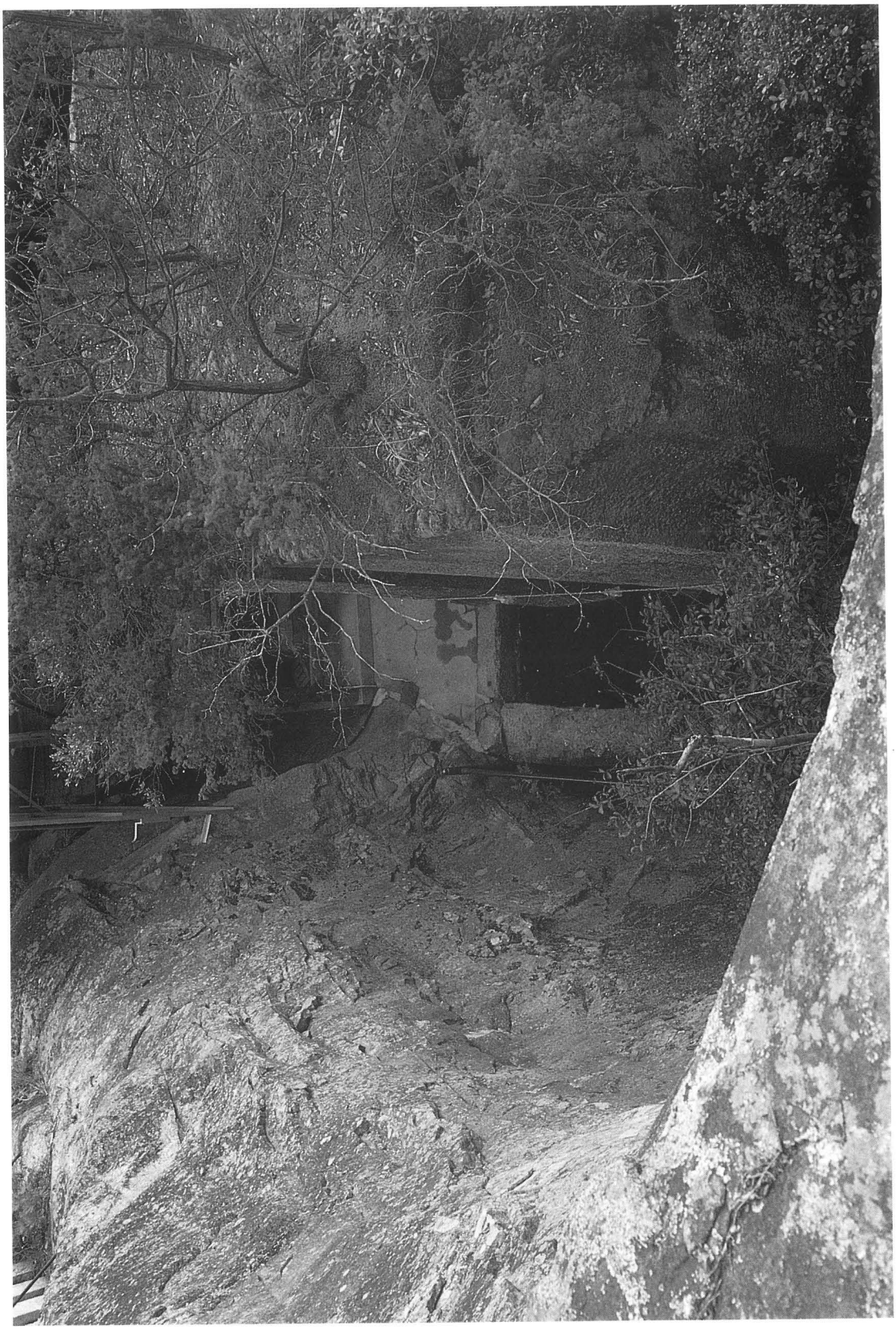
これらは新しい時代を主とした石である。その中でも龍山石は、『播磨国風土記』以降、明確に記録に現れている。古墳時代まで遡ることは明白である。分布調査の結果では、織豊期以降（大半は天正以降）の採石の痕跡しか確認出来なかったが、何処かに古墳時代の採石場があることを夢見て調査を継続したいと思っている。

今後、周辺地域の調査と同時代の県下の調査を交差することで、新たな事実が見いだされることを願い、また本書が活用されることを願っておわりとしたい。

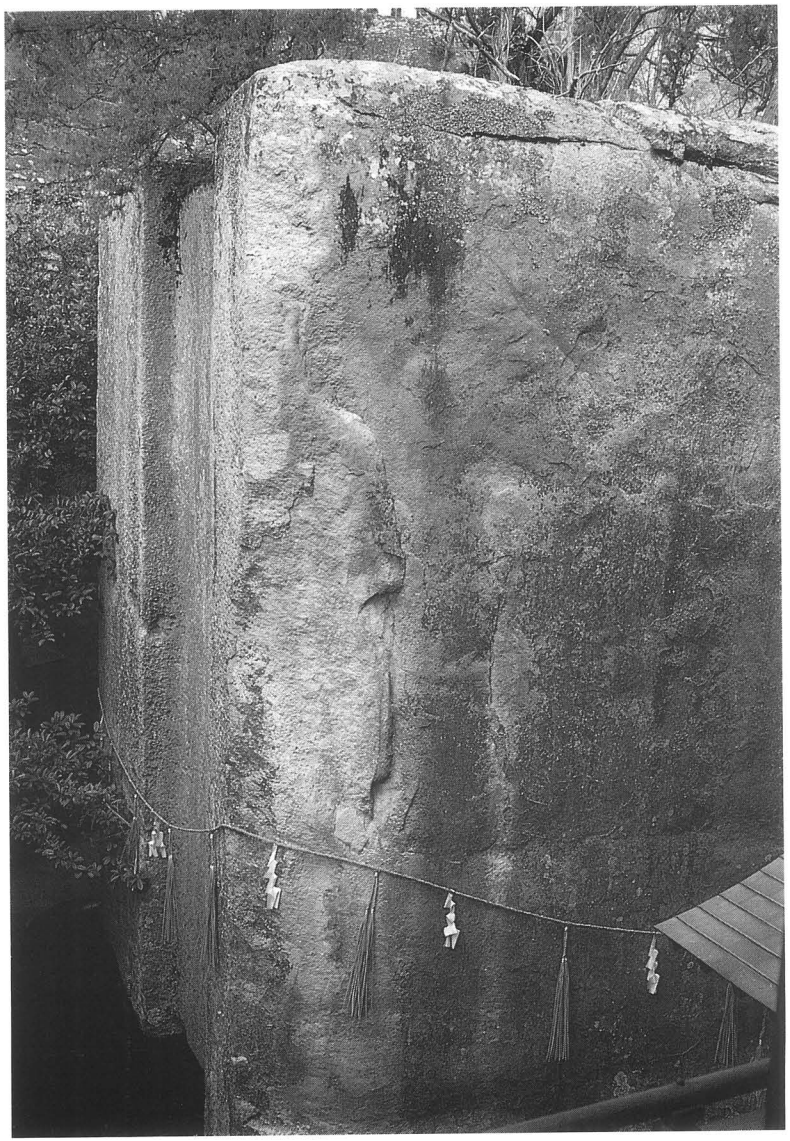
図　　版

竜山採石場　空中写真

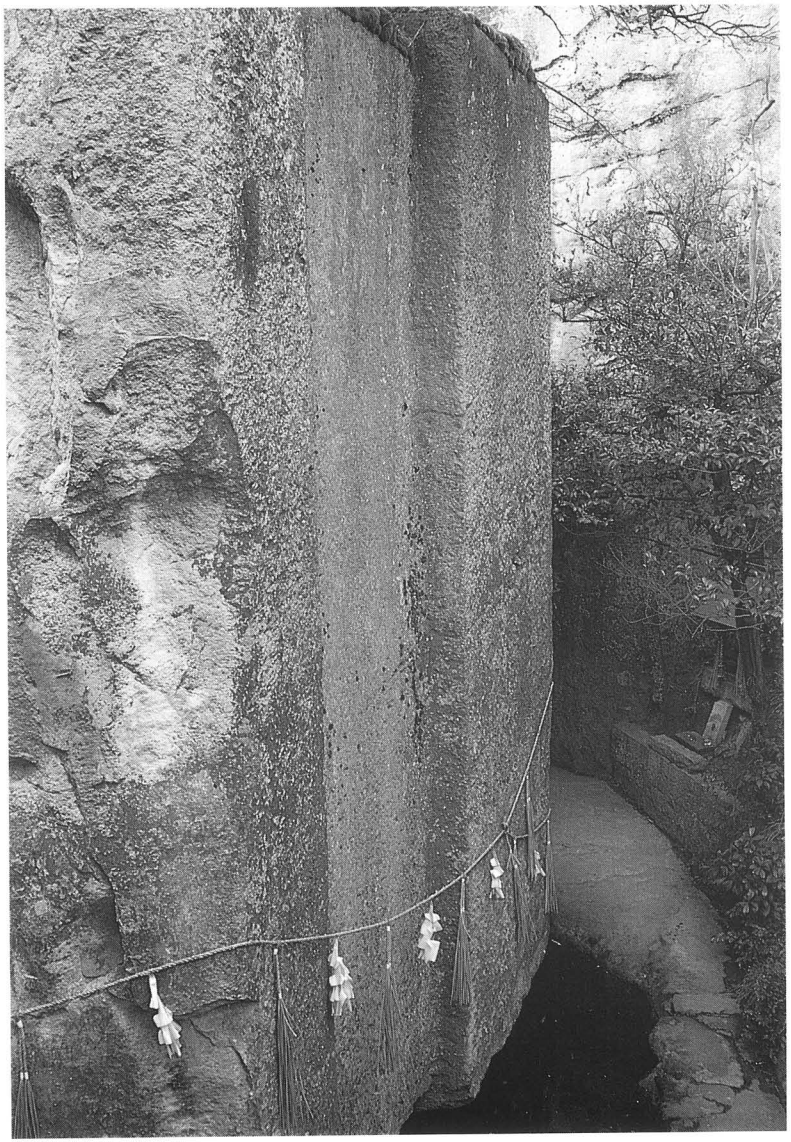
竜山採石場　空中写真



石宝殿　全景

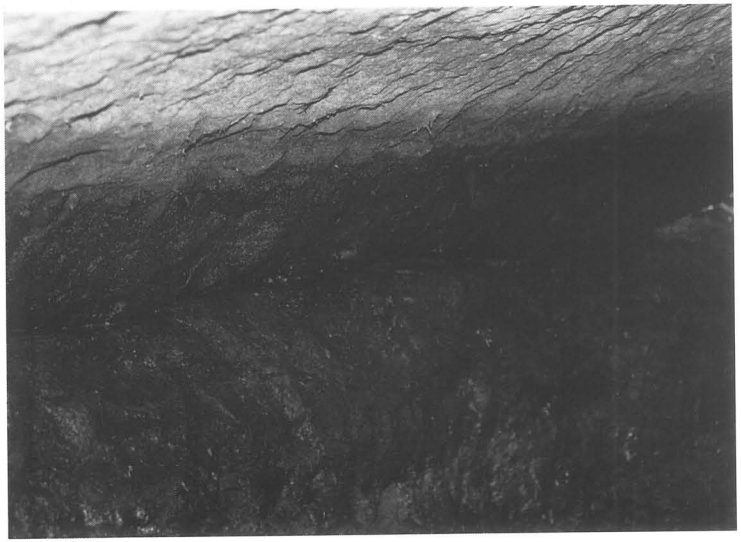


石宝殿　近景



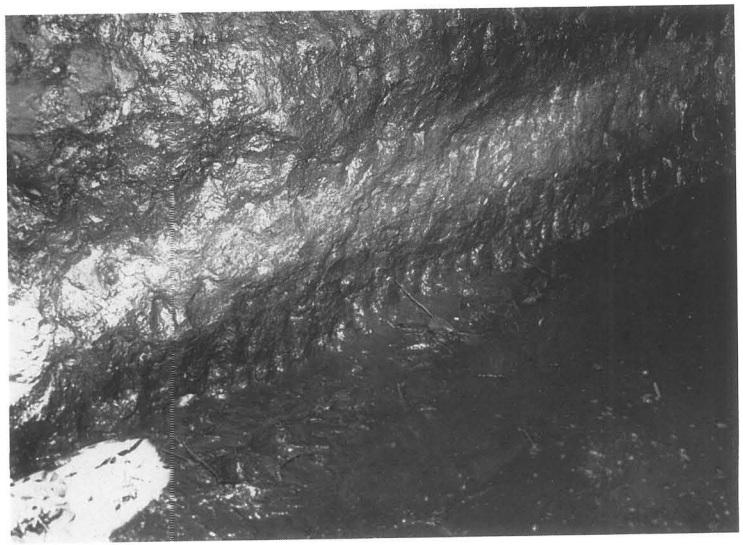
石宝殿　近景

石宝殿　基部加工痕　（北側部）



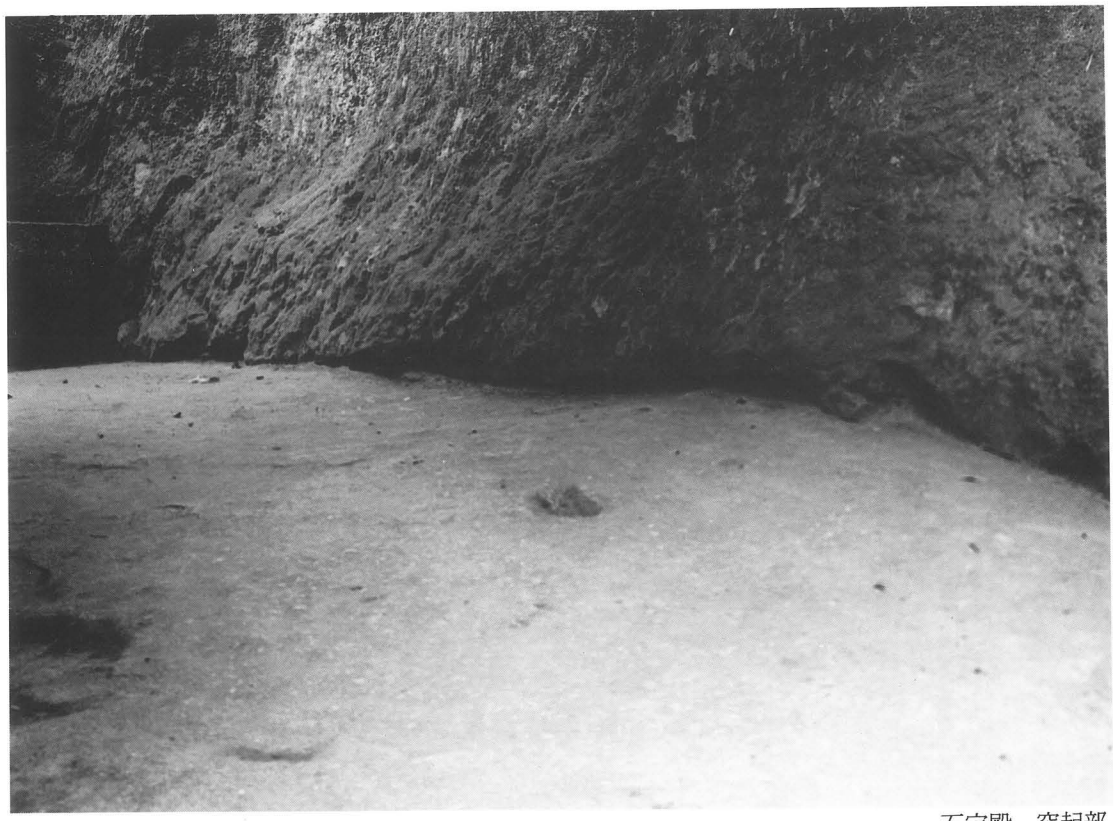
石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）

石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）

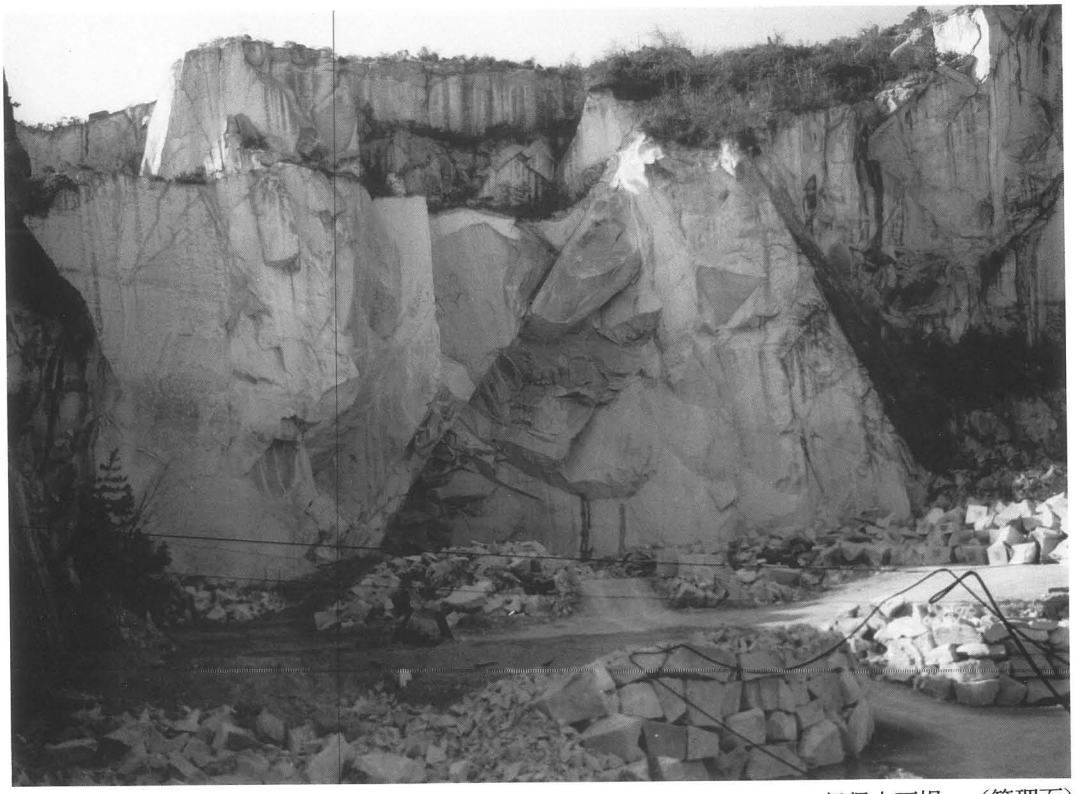


石宝殿　基部加工痕　（拝殿側）

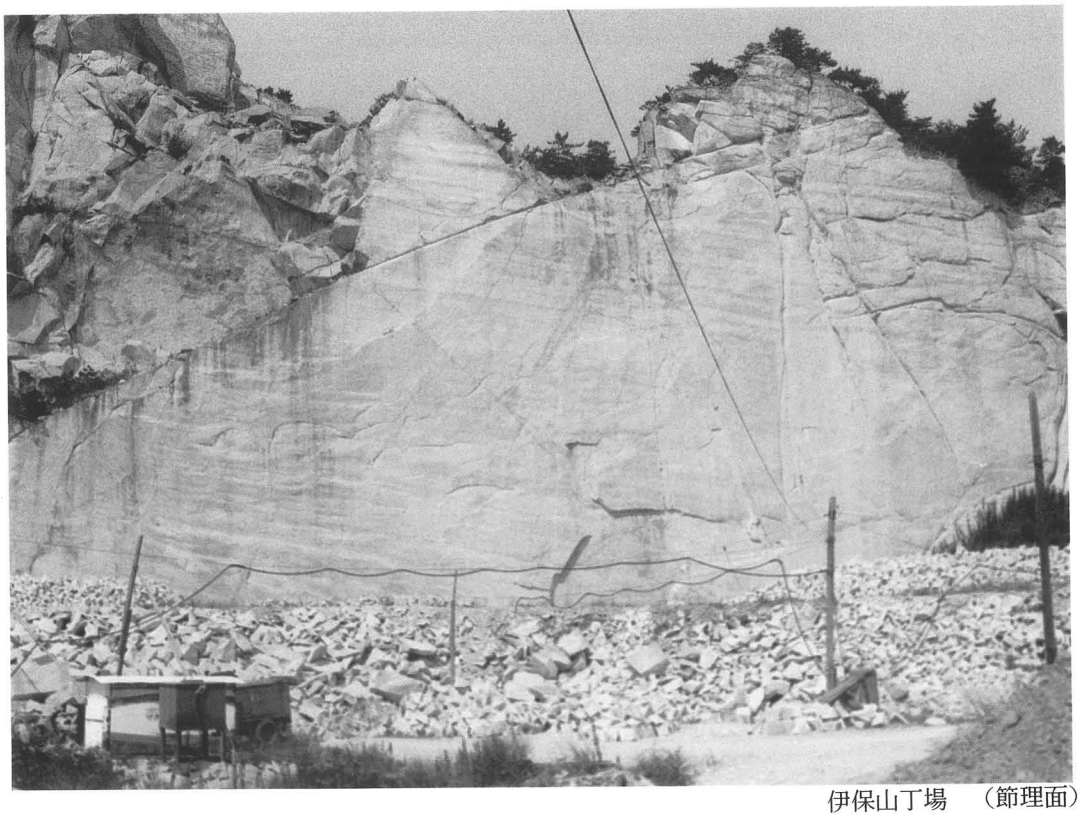
石宝殿　北側部



石宝殿　突起部



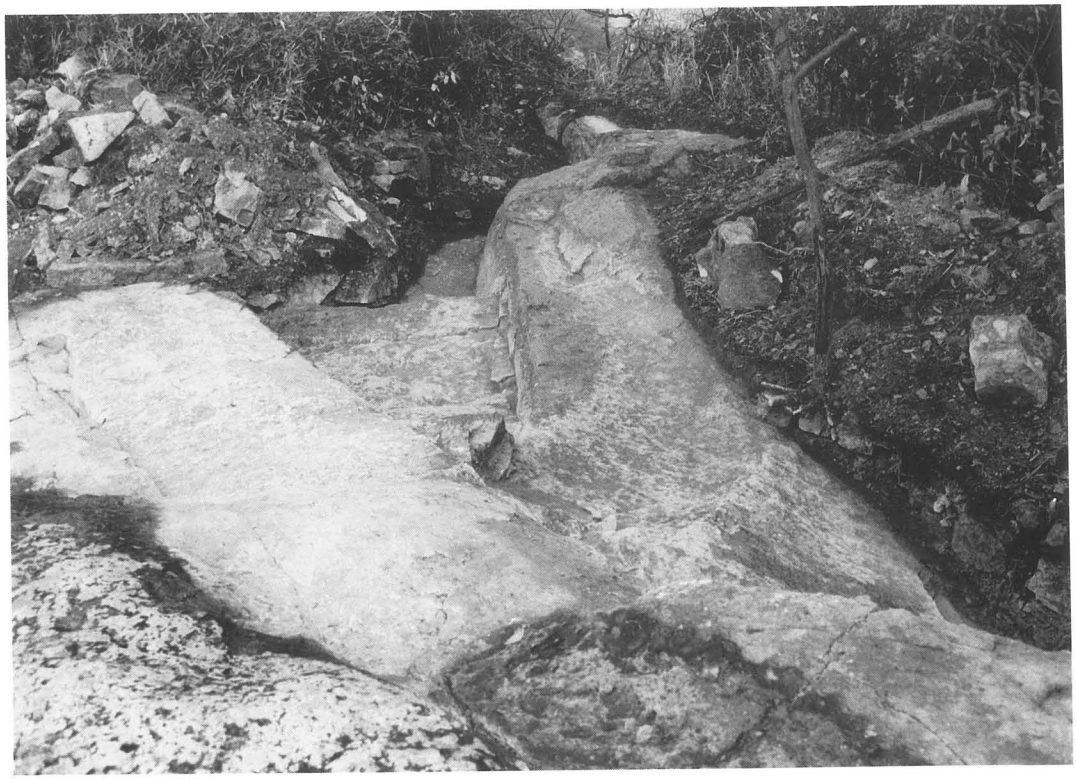
伊保山丁場　（節理面）



伊保山丁場　（節理面）

竜山石切場跡　ＫＡ－４地点　全景

竜山石切場跡　ＫＡ－４地点　加工痕



竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　全景（南から）

竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　全景（北から）

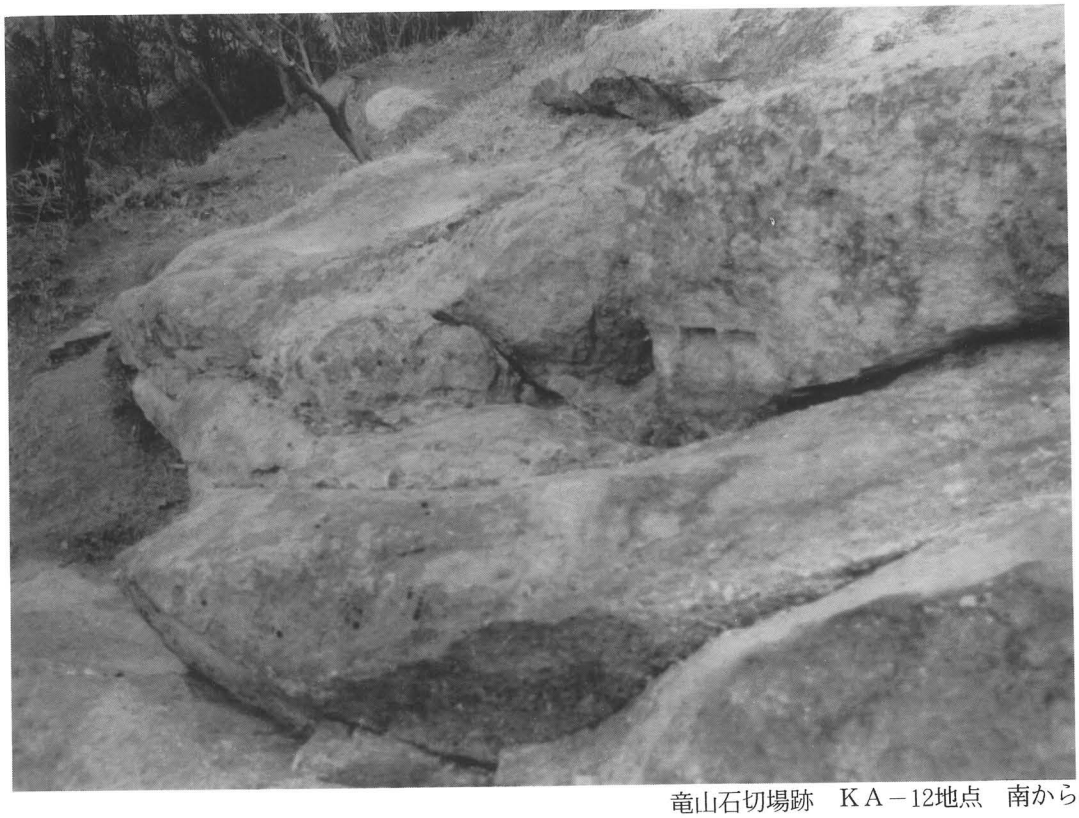
竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴痕

竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　切り出し状況

竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴

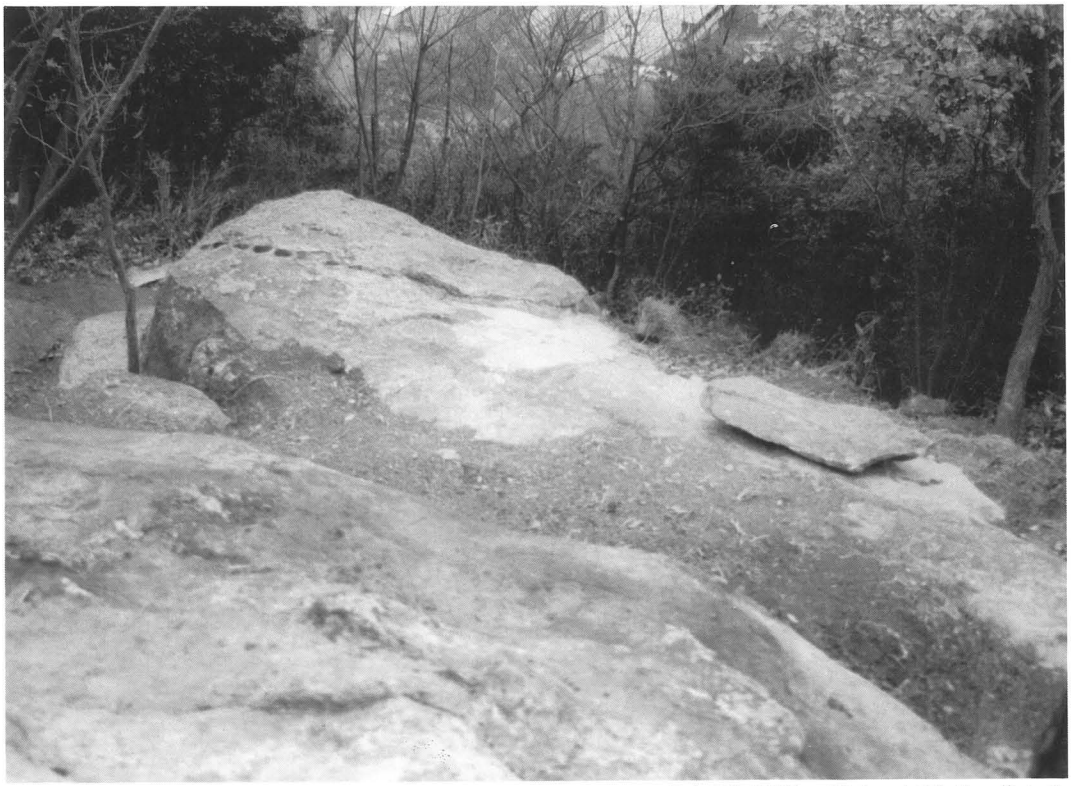
竜山石切場跡　ＫＡ－７地点　矢穴状加工痕

竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　西から

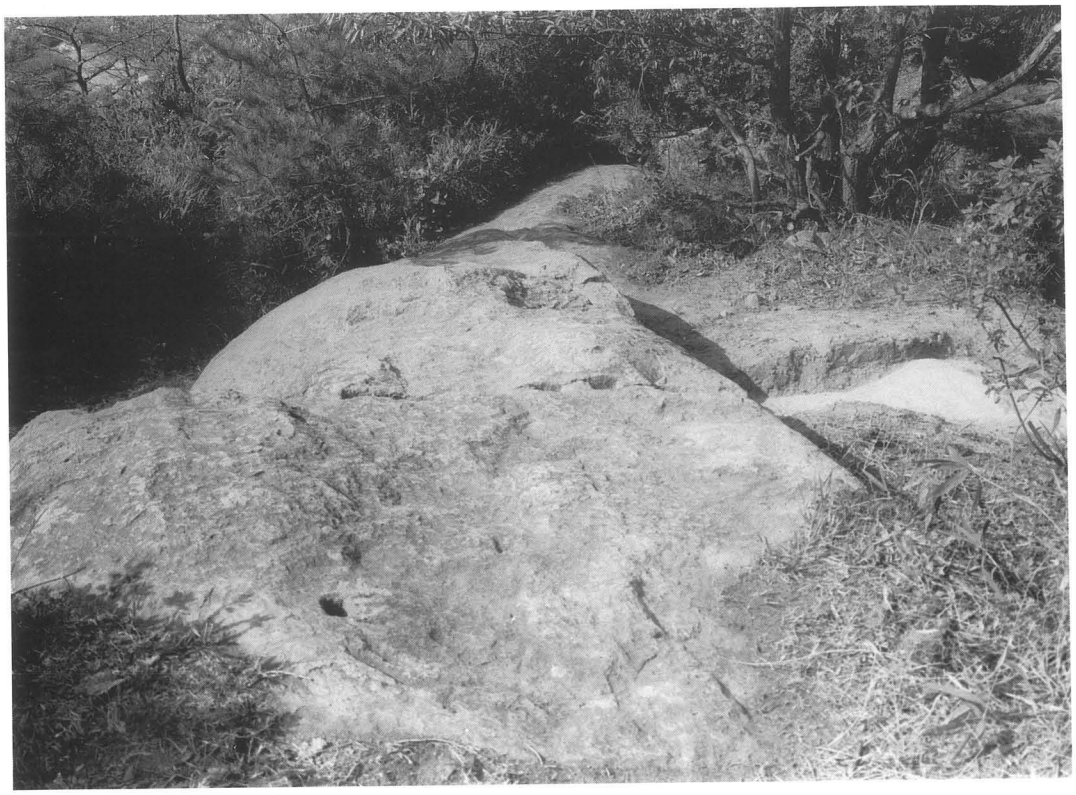


竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　南から

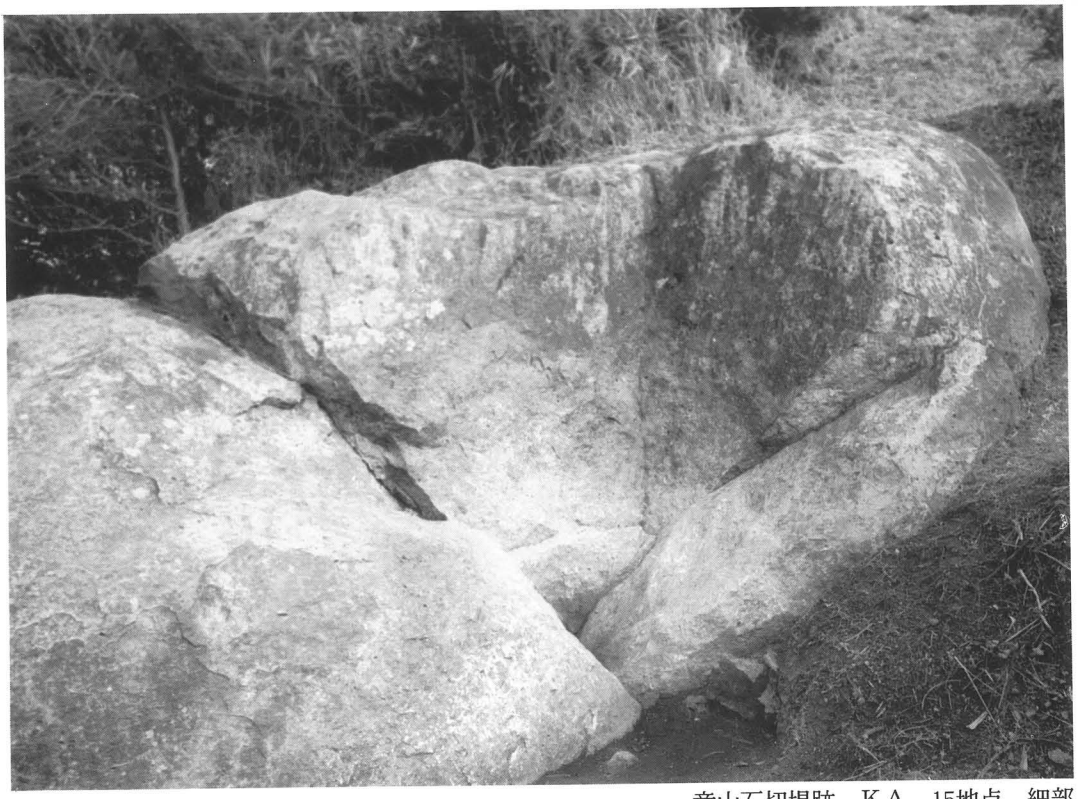
竜山石切場跡　ＫＡ－12地点　矢穴



竜山石切場跡　ＫＡ－13地点　北から



竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　全景

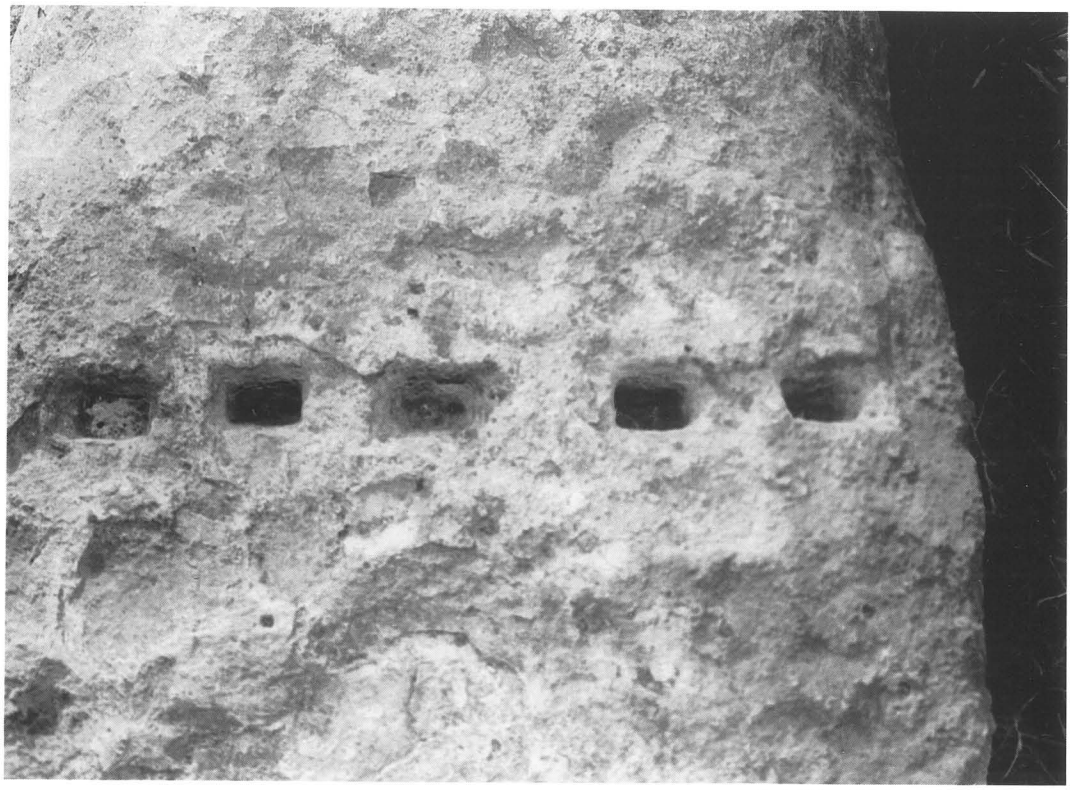


竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　細部

竜山石切場跡　ＫＡ－15地点　矢穴

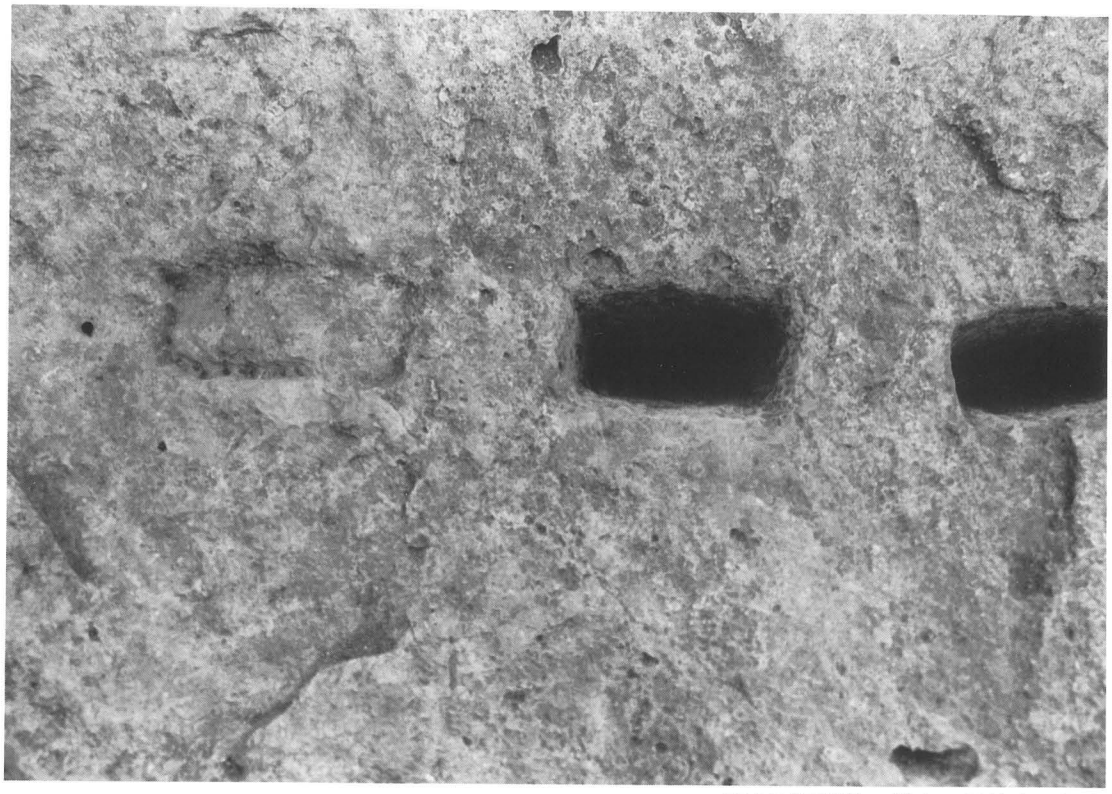
竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　全景

竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　加工痕の残る石材



竜山石切場跡　ＫＡ－16地点　矢穴

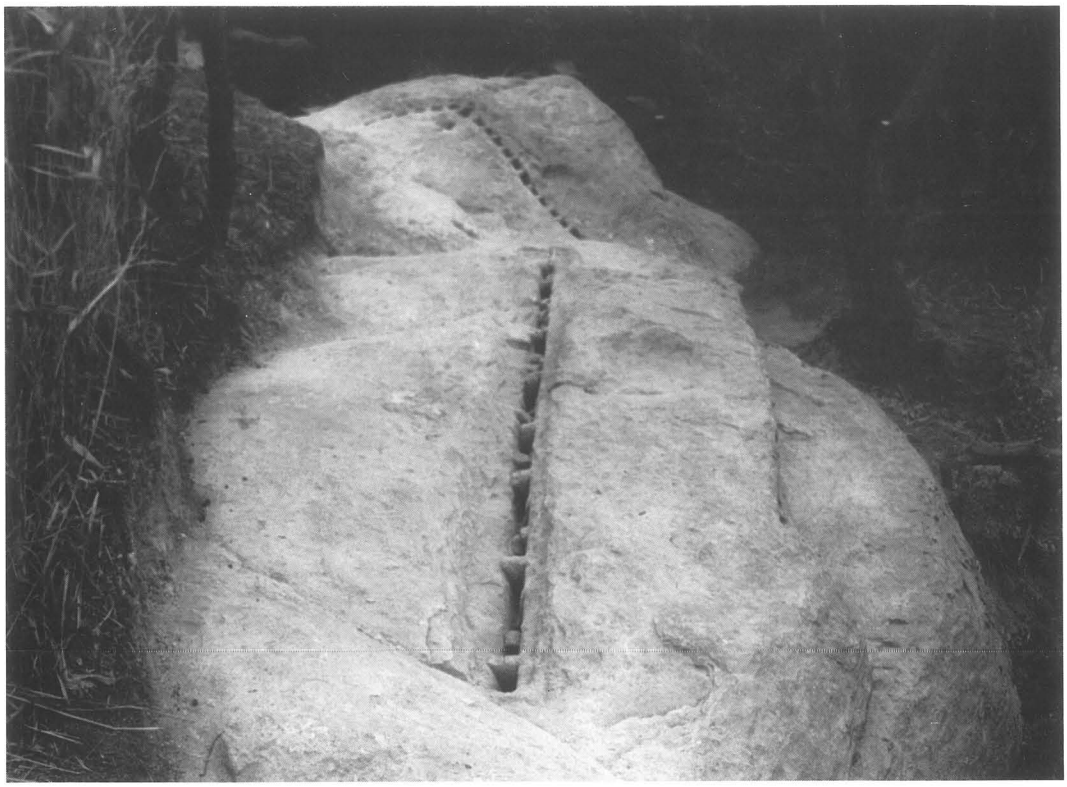
竜山石切場跡　ＫＡ－20地点



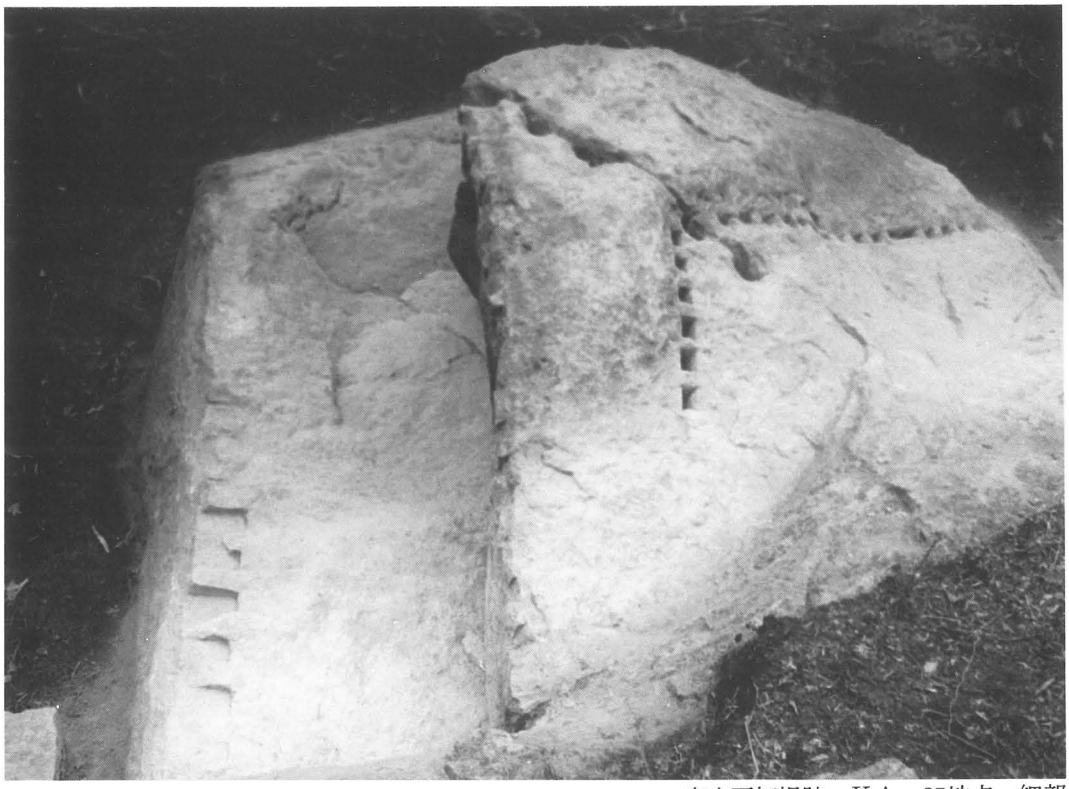
竜山石切場跡　ＫＡ－20地点　矢穴

竜山石切場跡　ＫＡ－23地点　矢穴痕

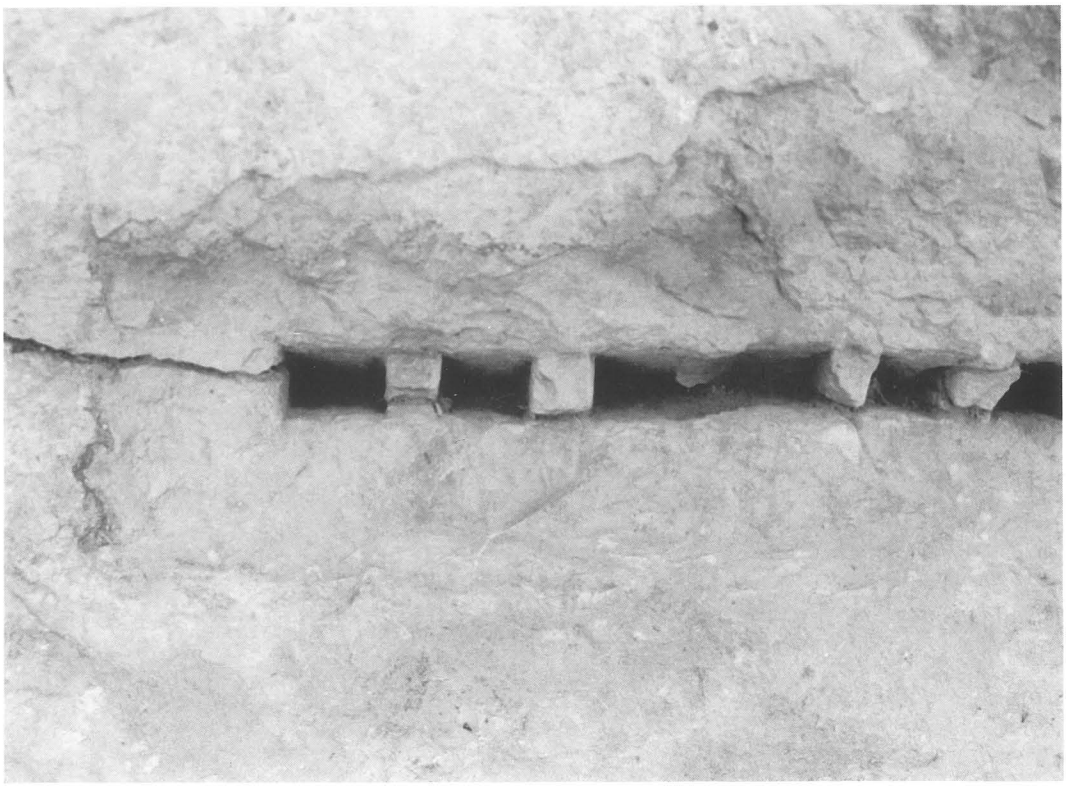
竜山石切場跡　ＫＡ－23地点　加工痕



竜山石切場跡　ＫＡ－25地点



竜山石切場跡　ＫＡ－25地点　細部



竜山石切場跡　ＫＡ－25地点　矢穴

竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　全景

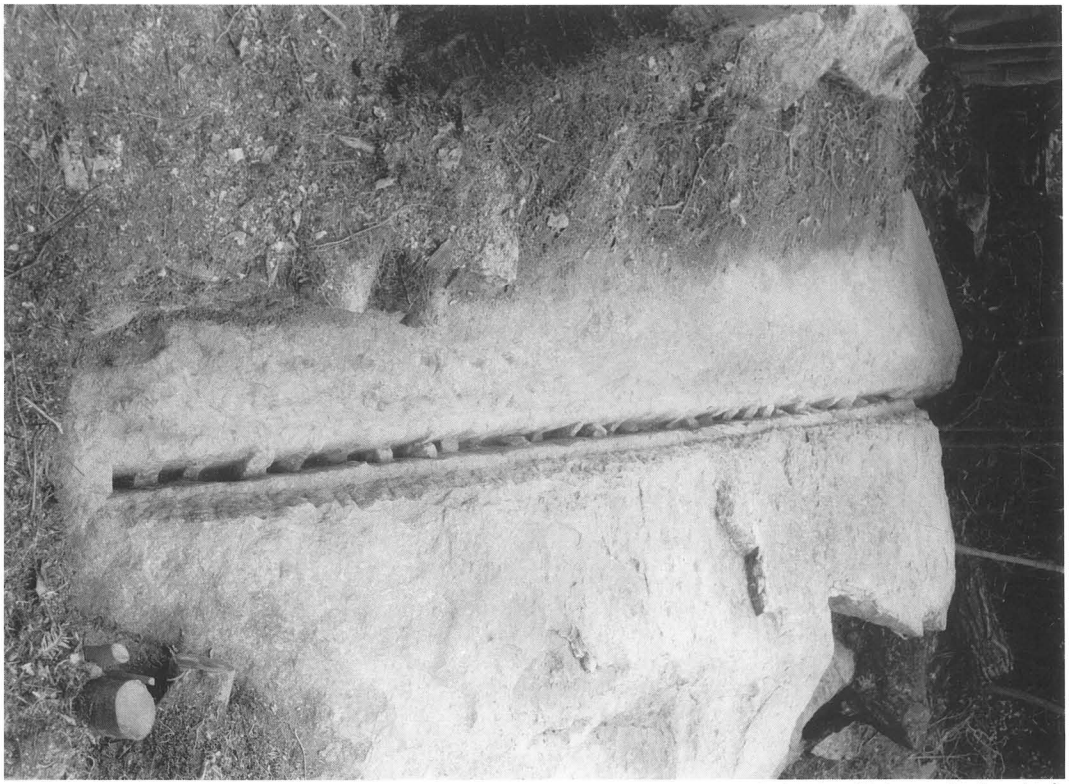
竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　奥壁部

竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴　奥壁部

竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴　南壁部

竜山石切場跡　ＫＡ－26地点　矢穴痕

竜山石切場跡　ＫＡ－28地点



竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴

竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴

竜山石切場跡　ＫＡ－28地点　矢穴

竜山石切場跡　ＴＡ－３地点　全景

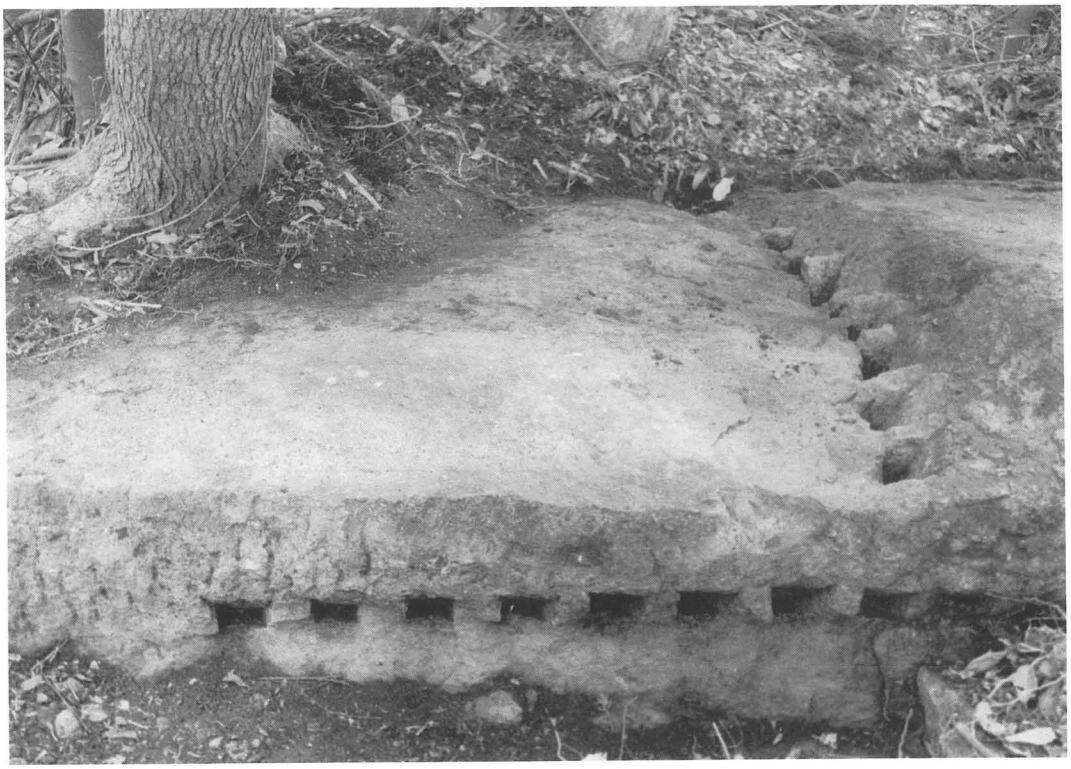
竜山石切場跡　ＴＡ－３地点　矢穴痕

竜山石切場跡　ＴＡ－４地点　全景（北から）

竜山石切場跡　ＴＡ－４地点　（南から）

竜山石切場跡　ＴＡ－10地点　全景

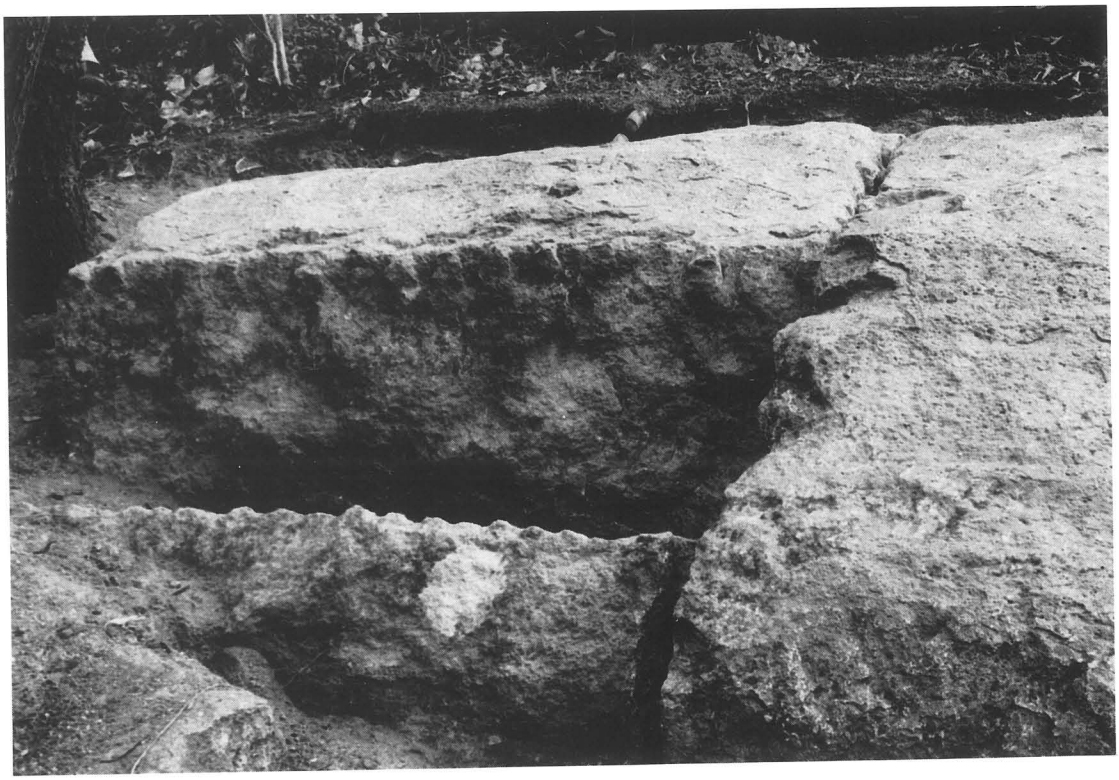
竜山石切場跡　ＯＯ－１地点　全景（東から）



竜山石切場跡　ＯＯ－１地点　矢穴

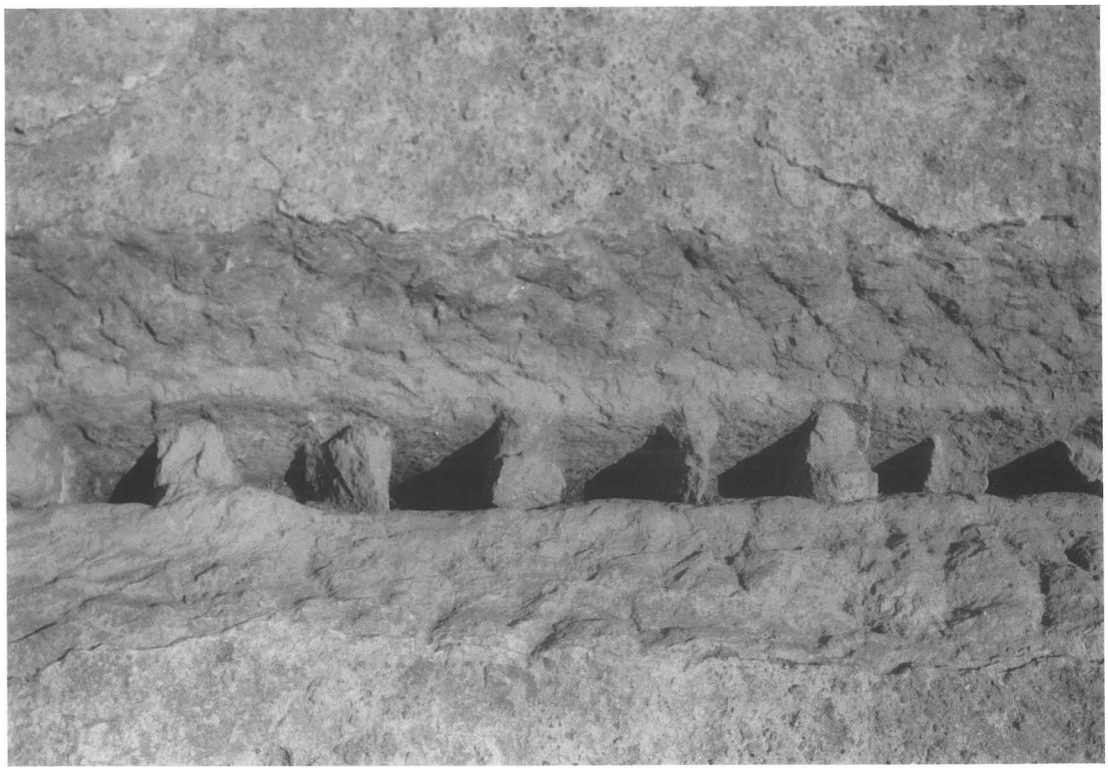
竜山石切場跡　ＯＯ－２地点

竜山石切場跡　ＨＯ－４地点　全景



竜山石切場跡　ＨＯ－４地点　切出部

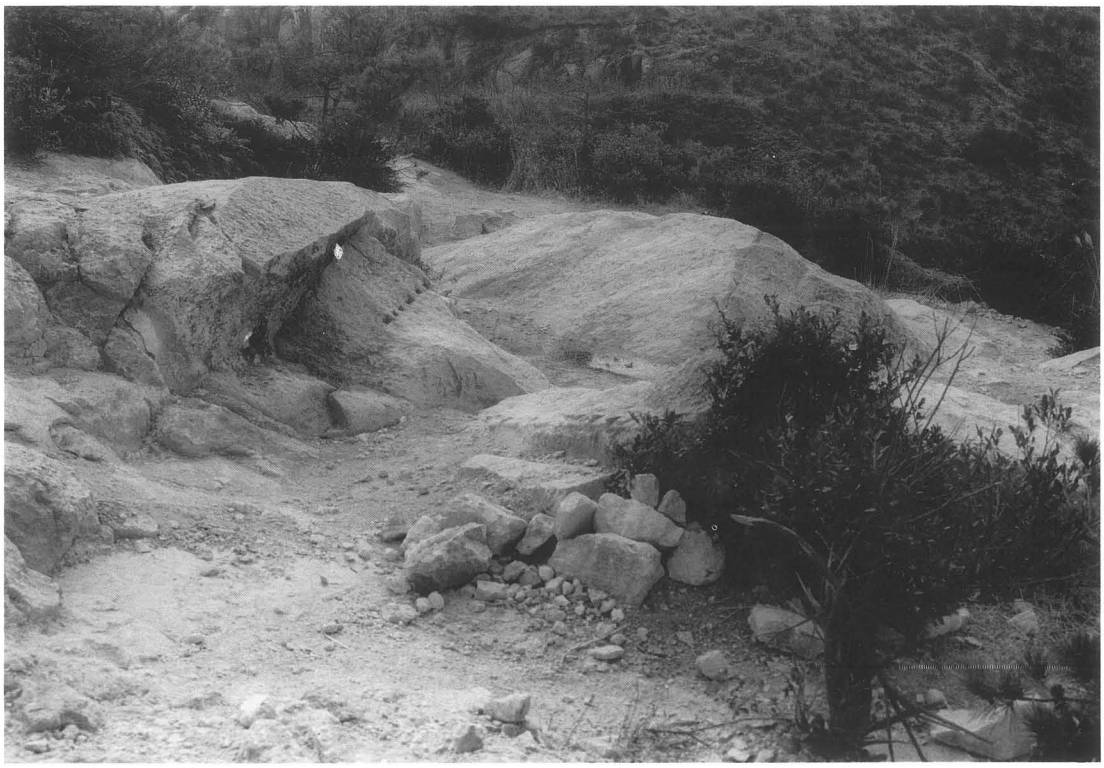
竜山石切場跡　ＩＨ－14地点　全景



竜山石切場跡　ＩＨ－14地点　矢穴

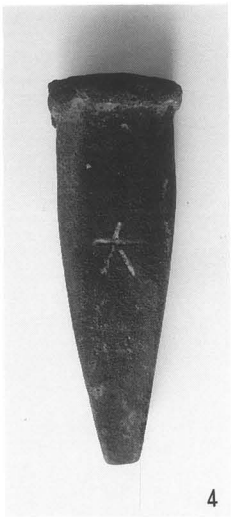
竜山石切場跡　ＩＨ－４地点　北から

竜山石切場跡　ＩＨ－４地点　南西から



竜山石切場跡　ＩＨ－２・３地点　全景　北から

竜山石切場跡　ＩＨ－２・３地点　全景　南から

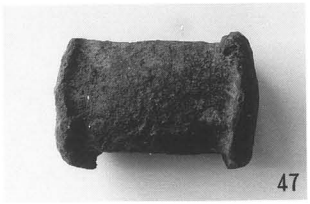

4

9

14

44

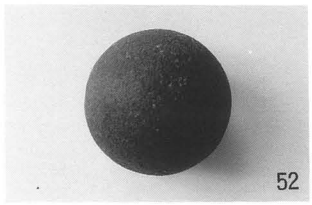
46


47

49

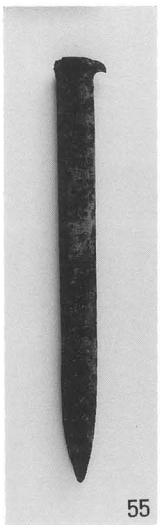
50

51


52

63

53


55

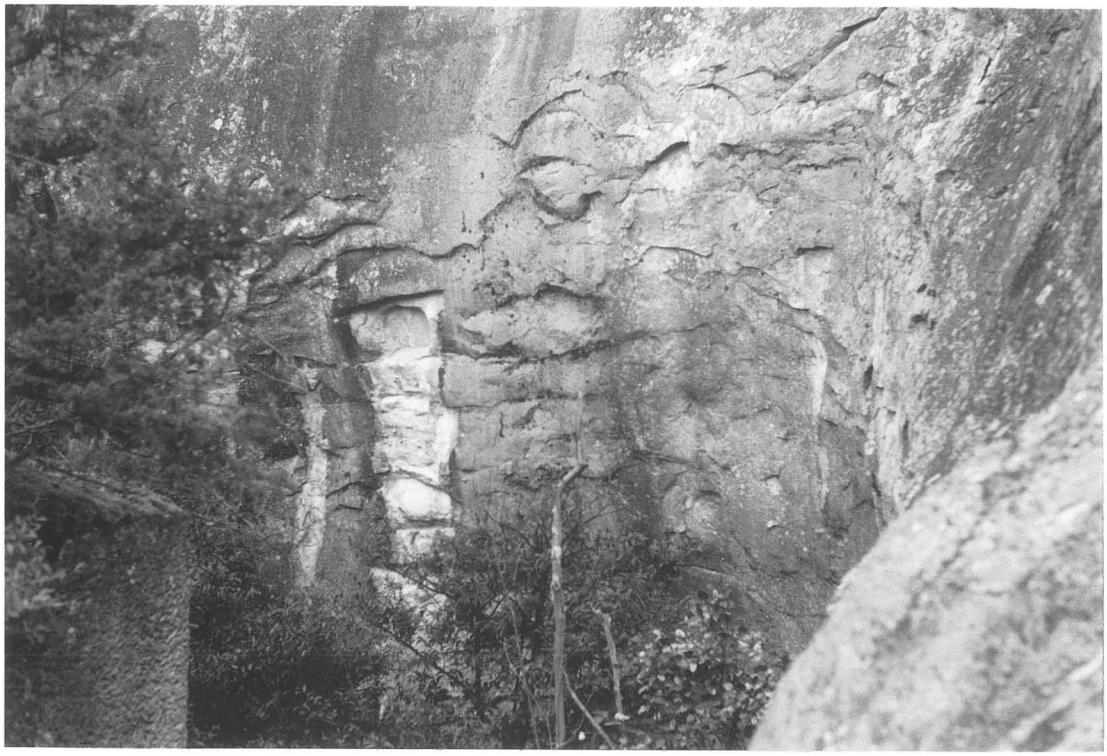
56

58

64

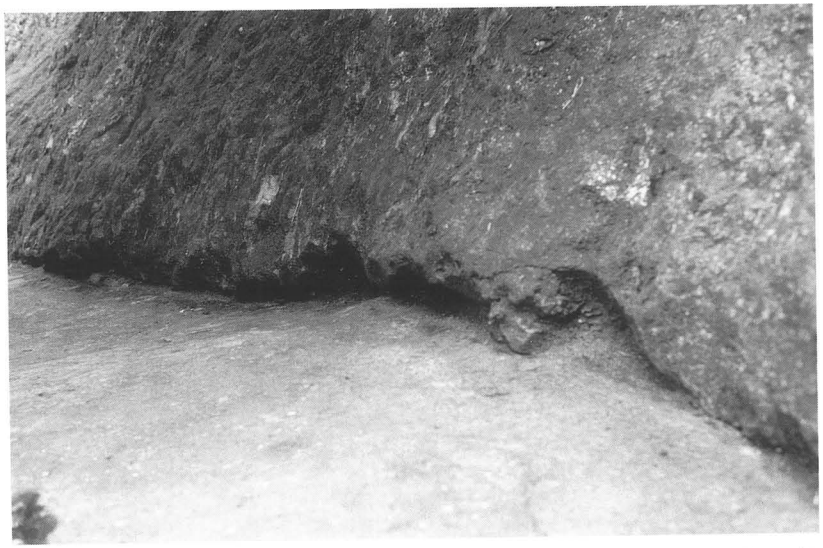
65

採石道具



石宝殿　加工痕　（西壁部分）

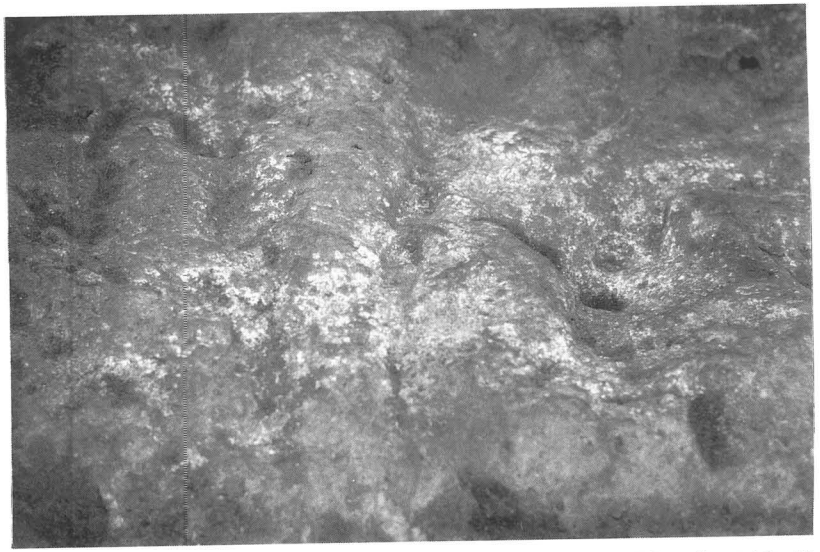
石宝殿　加工痕　（北壁部分）



石宝殿　西壁部節理面　加工痕

石宝殿　西側溝部　加工痕

石宝殿　突起部下半部　加工痕



石宝殿　西側溝部　加工痕細部

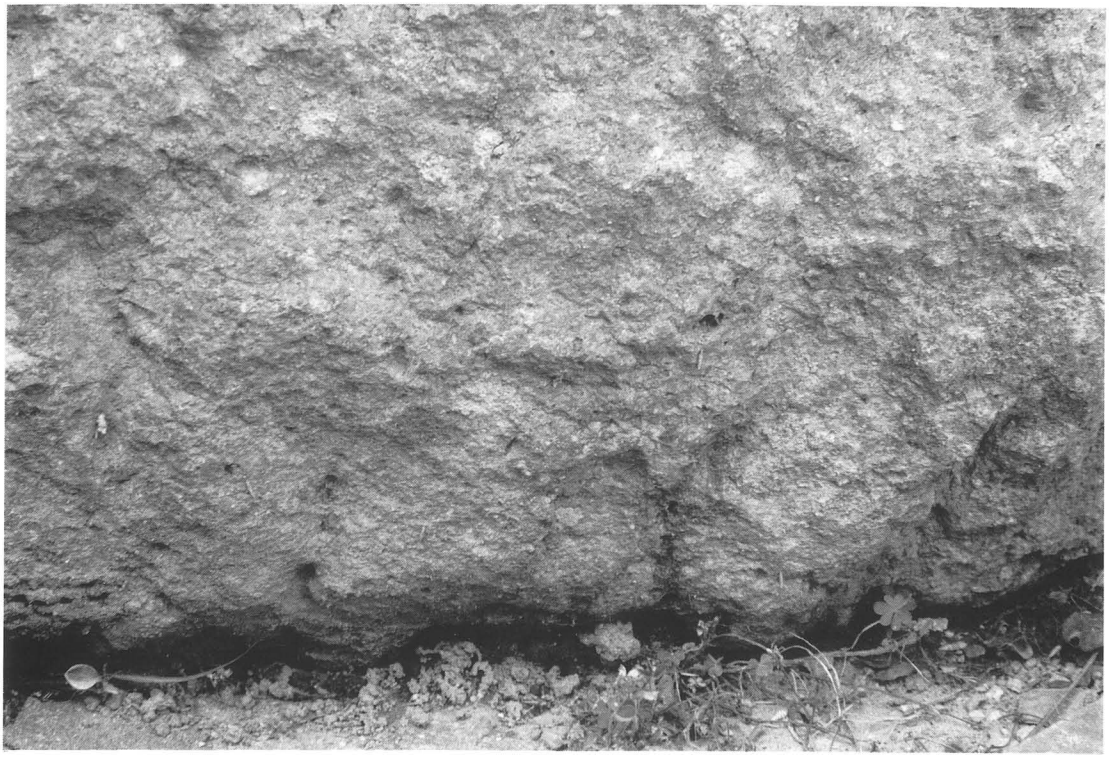
天磐舟

天磐舟　突起部　加工痕

安楽寺境内所在石棺

安楽寺境内所在石棺　内面　加工痕

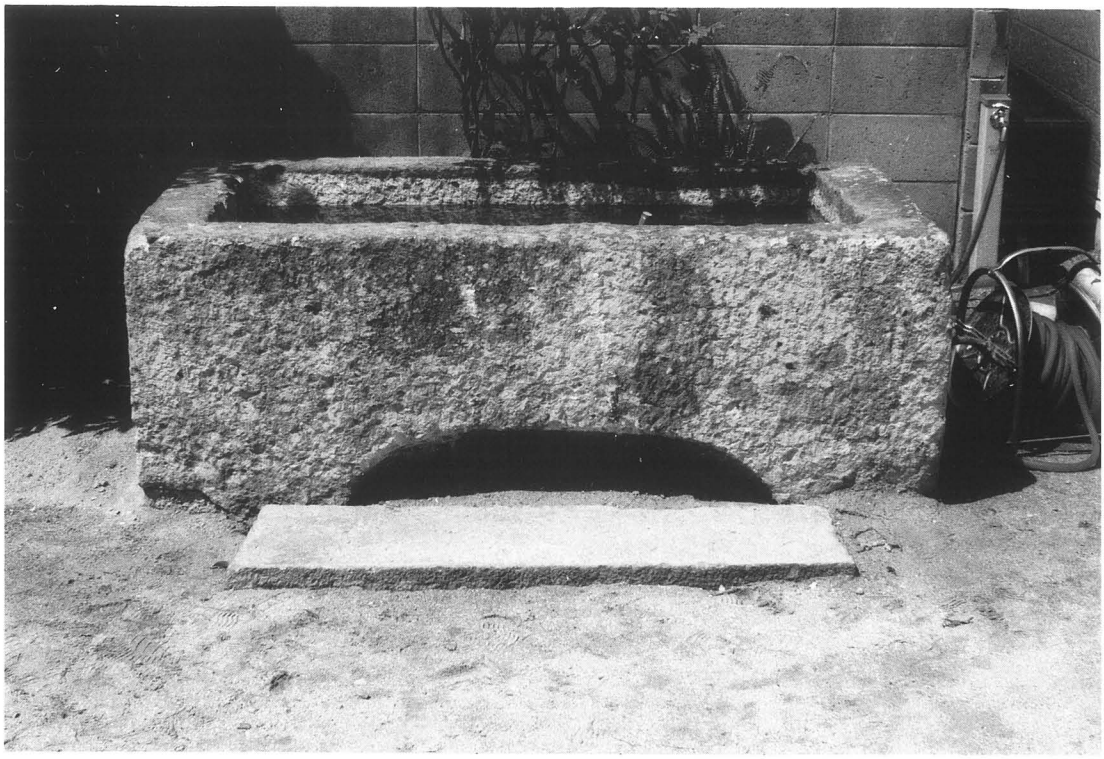
西方寺境内所在石棺



西方寺境内所在石棺　外面下部　加工痕

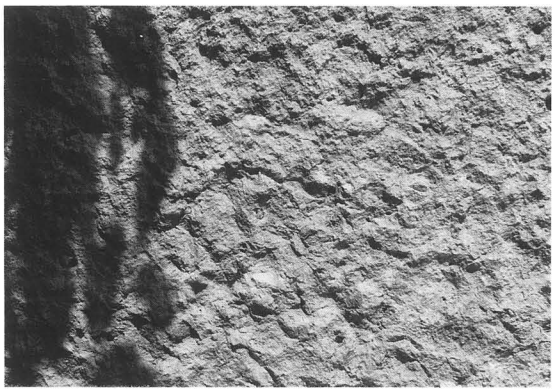
正蓮寺境内所在石棺蓋

正蓮寺境内所在石棺蓋　加工痕細部



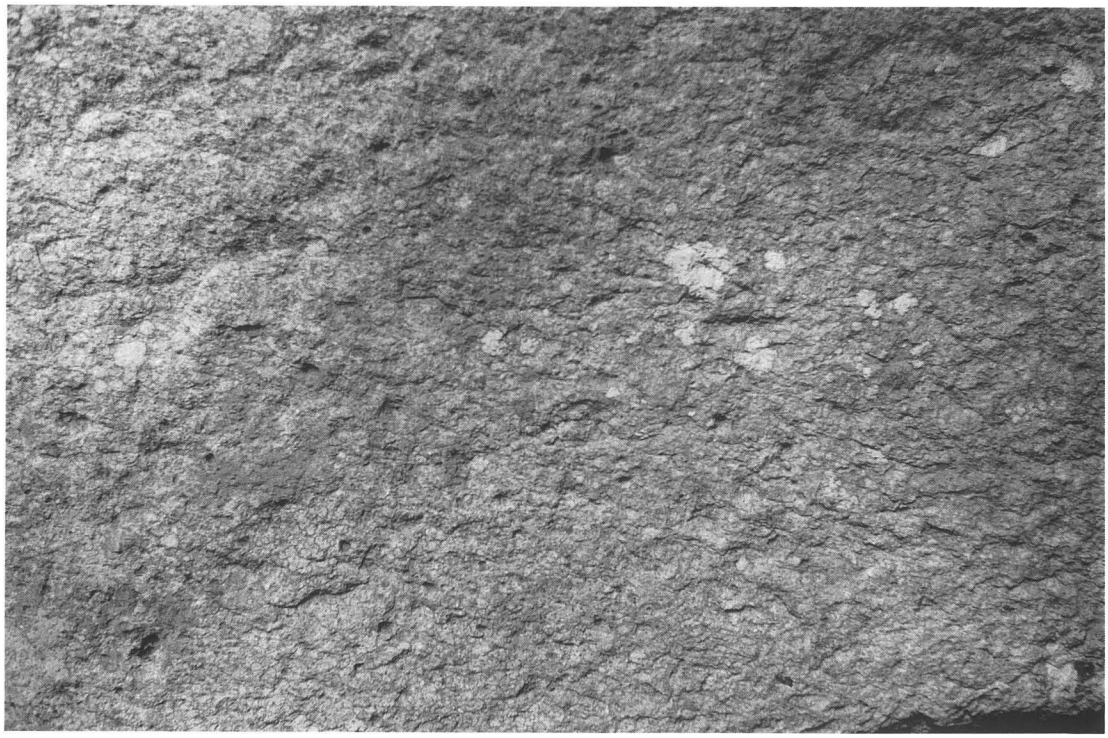
正蓮寺境内所在石棺身

正蓮寺境内所在石棺身　平坦部　加工痕

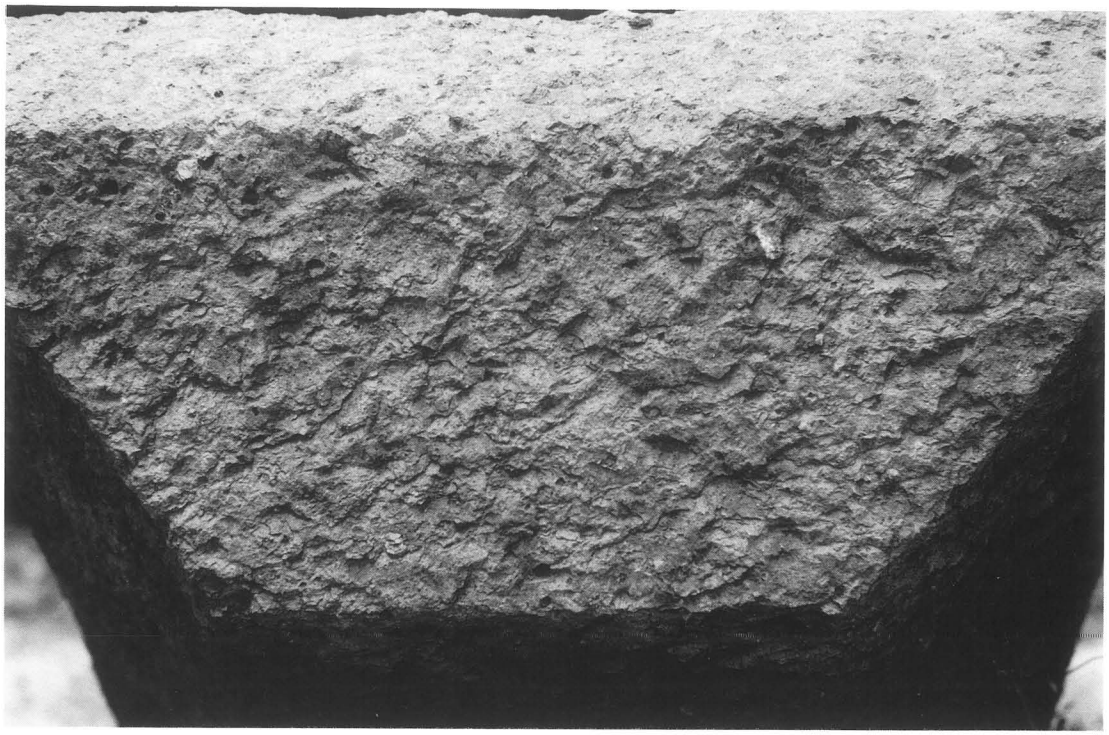


正蓮寺境内所在石棺身　短辺部斜面　加工痕

谷ノ口所在石棺



谷ノ口所在石棺　短辺部斜面　加工痕



阿弥陀18号墳　所在石棺　加工痕

大日山古墳　箱式石棺　外面加工痕

兵庫県生産遺跡調査報告　第３冊

1993年３月31日発行

採石遺跡Ⅰ
（高砂市）

編集　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

発行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10-1
TEL 078 (341) 7711

印刷　日新堂印刷株式会社
〒650 神戸市中央区橘通１丁目１－９